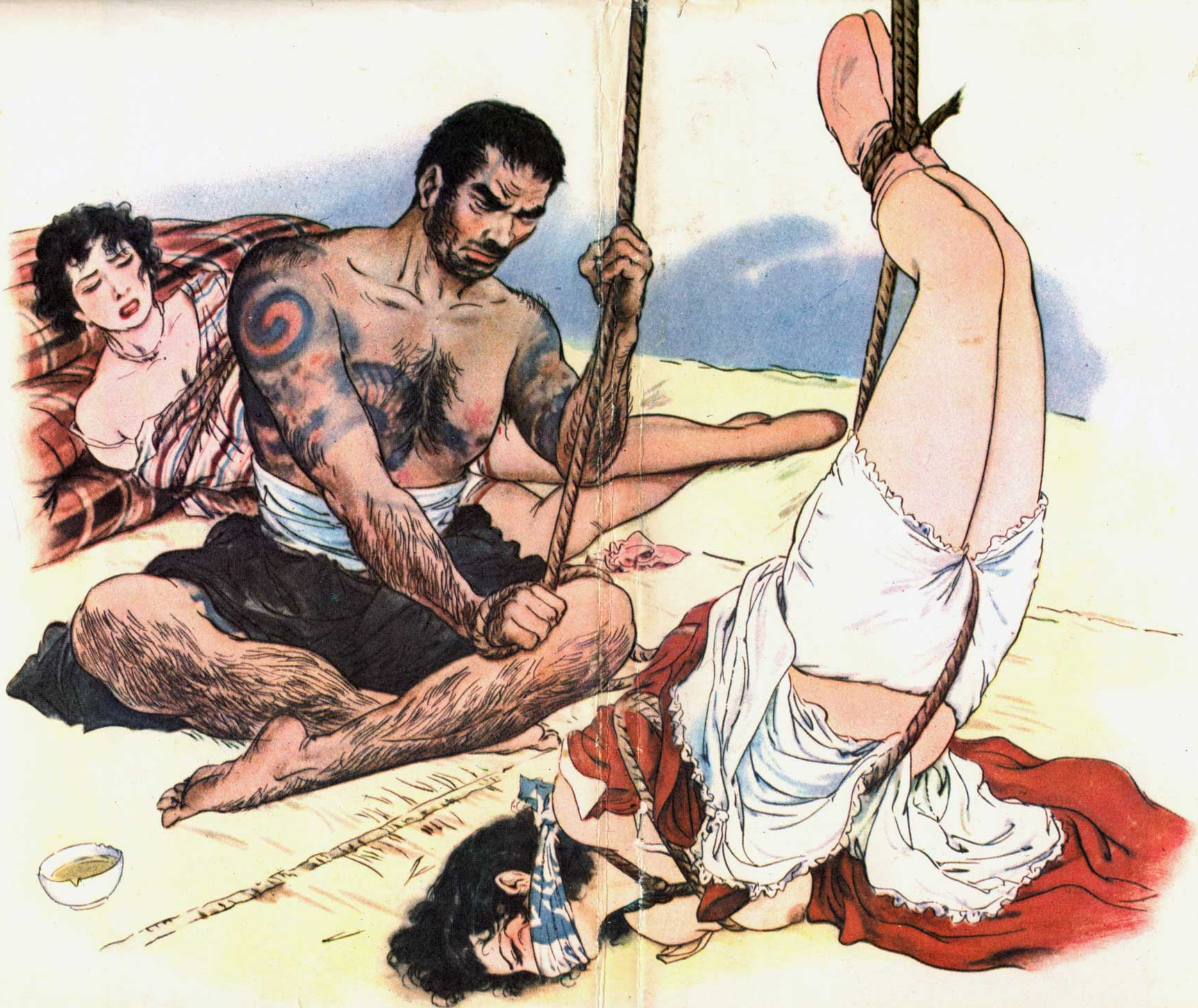


SMフェチ写真・絵画・二五〇枚・総一五〇頁

SMプレイ写真特集

定価一、〇〇〇円



アブ川柳十態

おみ足を
頂きます

唇に
つけ

お尻から
ドシと

坐る

レディ力車
婦人専用車

答
案、四割を
書けと受け

先生の
折檻
だん

執を
帯い

コレクションに

言え
ない癖を
持ち

兄の教授ぶり
義に
教える
曲藝で

令嬢

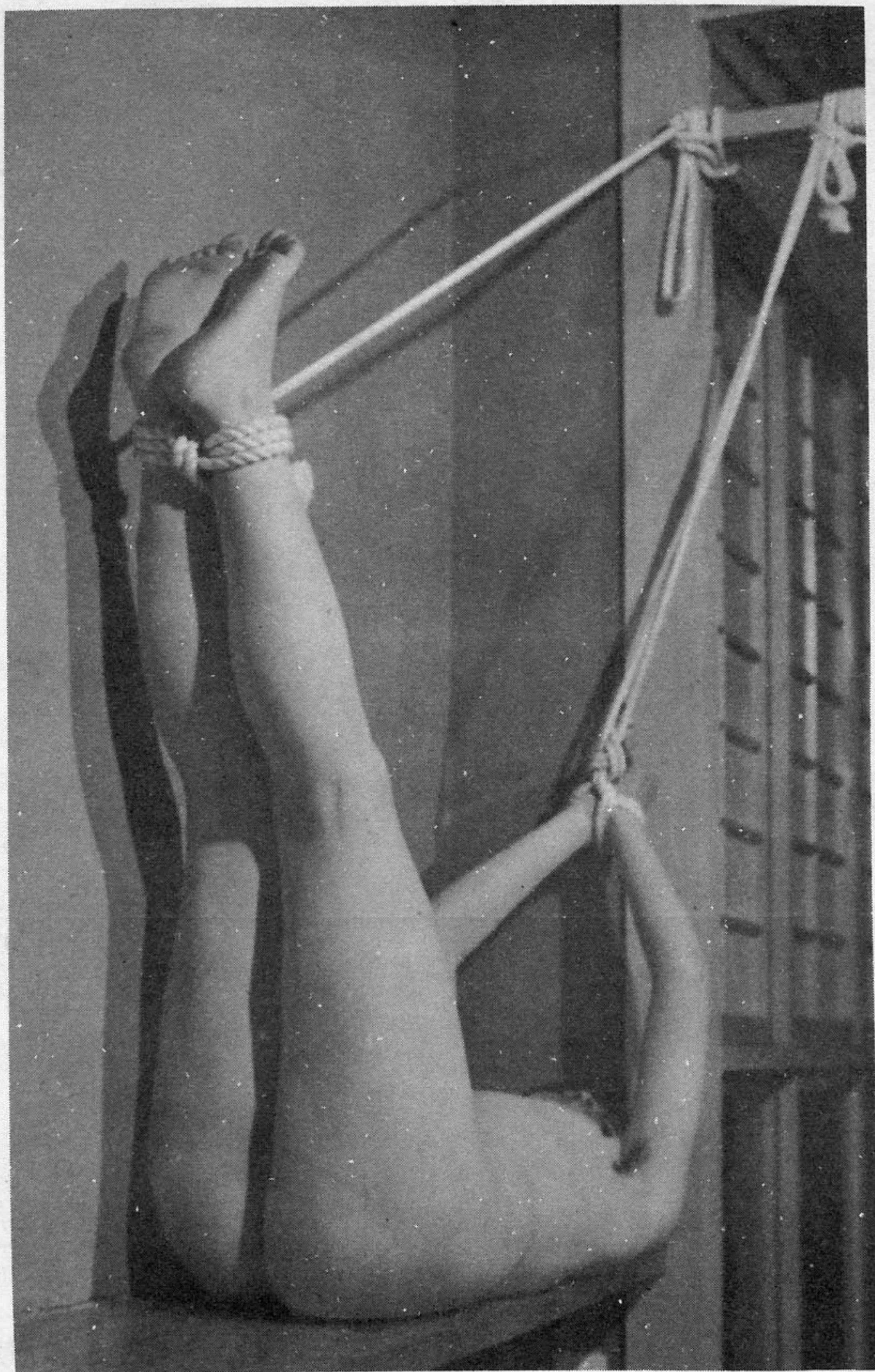
トシの
は奴隷で
出まている

胃腸が
困る

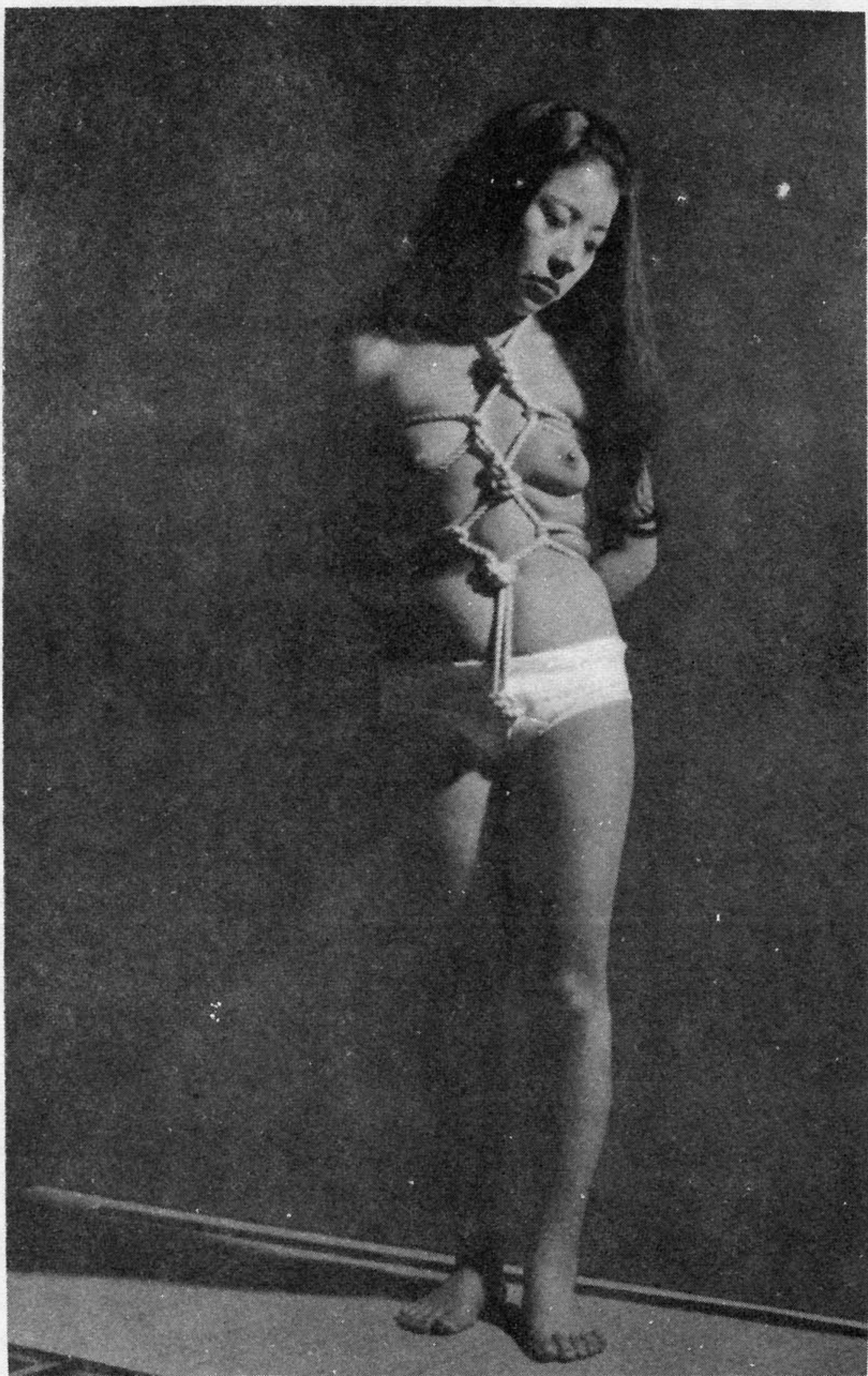
ヒップで
お尻となれば
重石と

地獄
なり

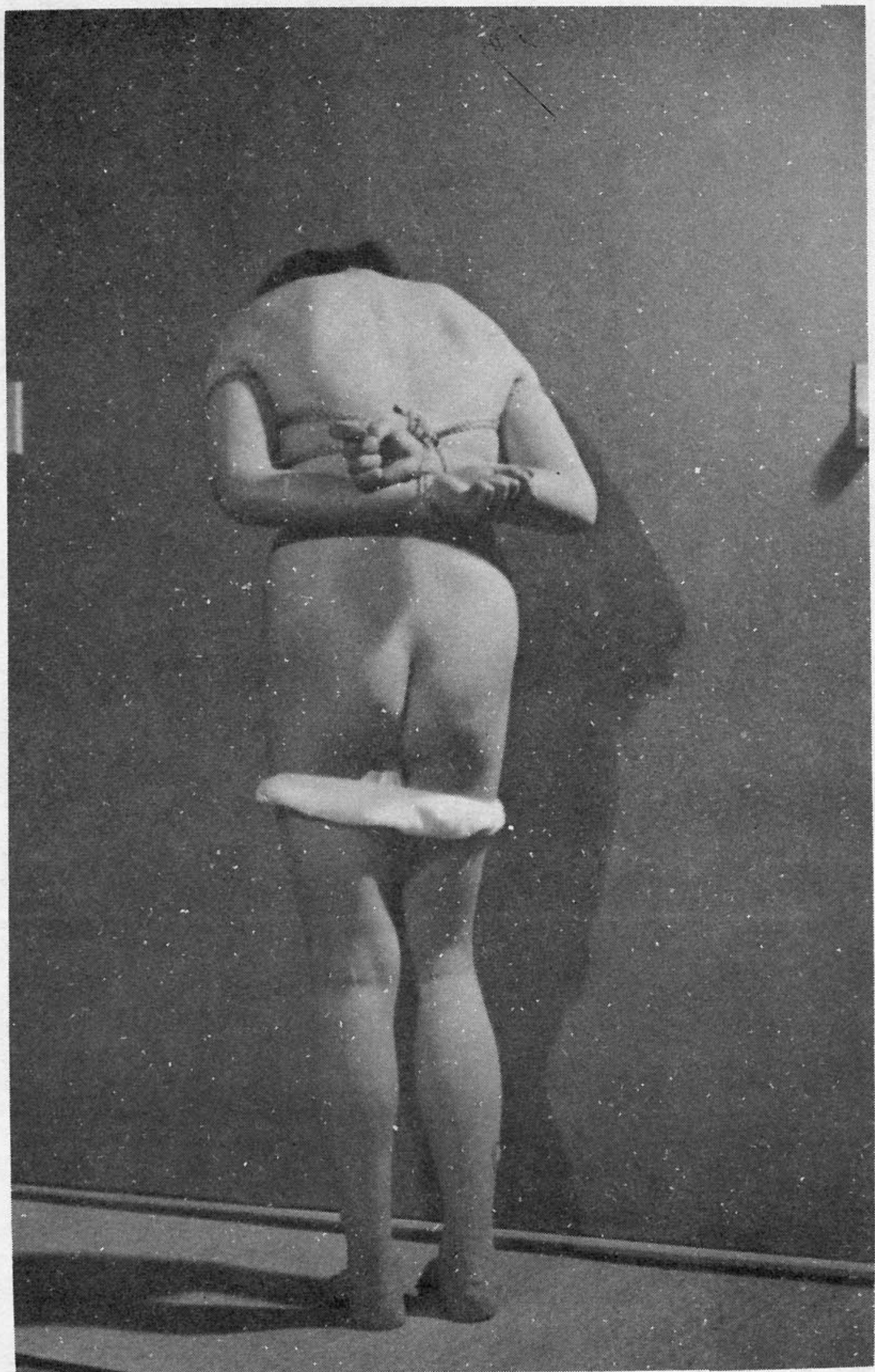






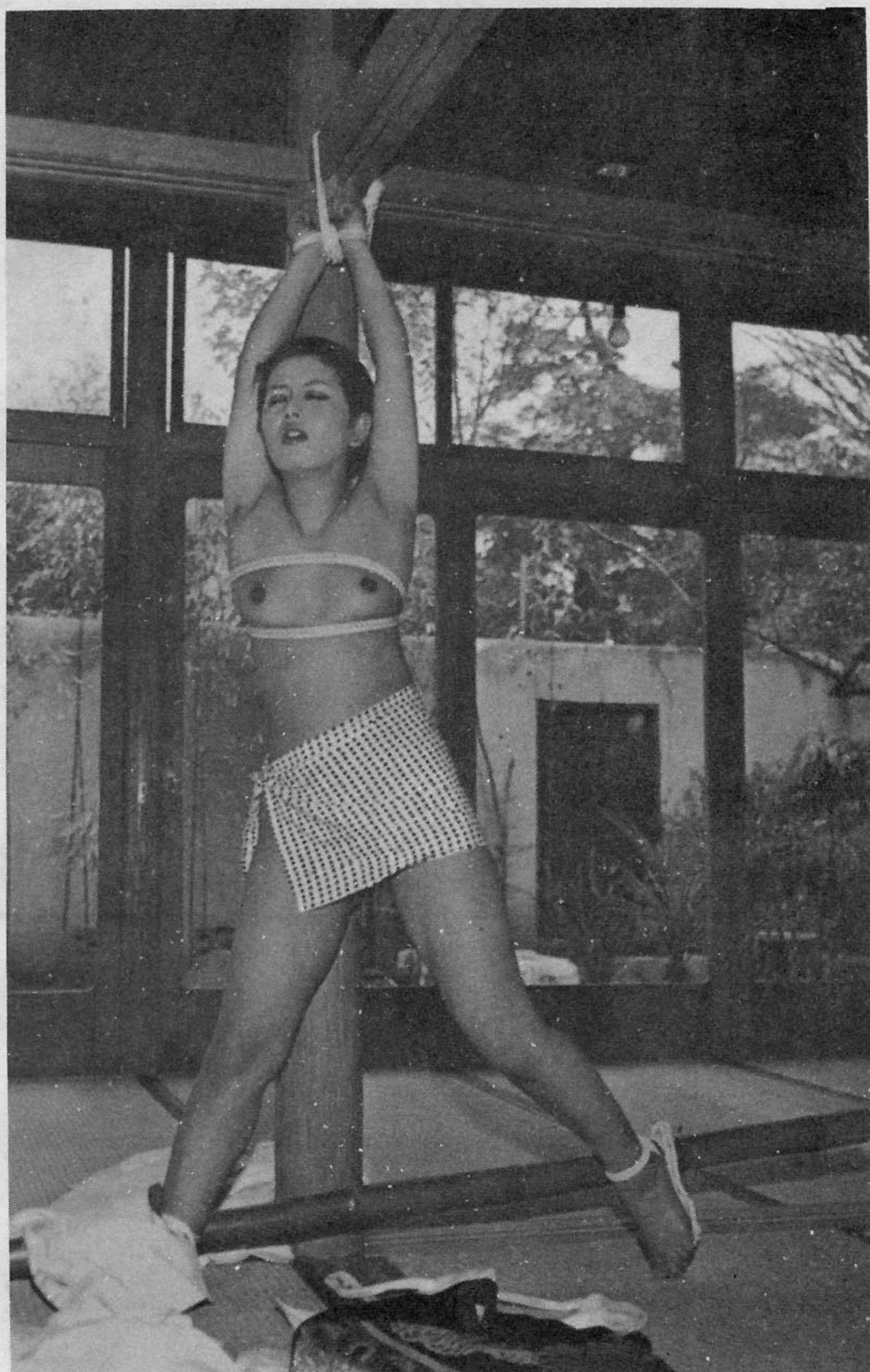












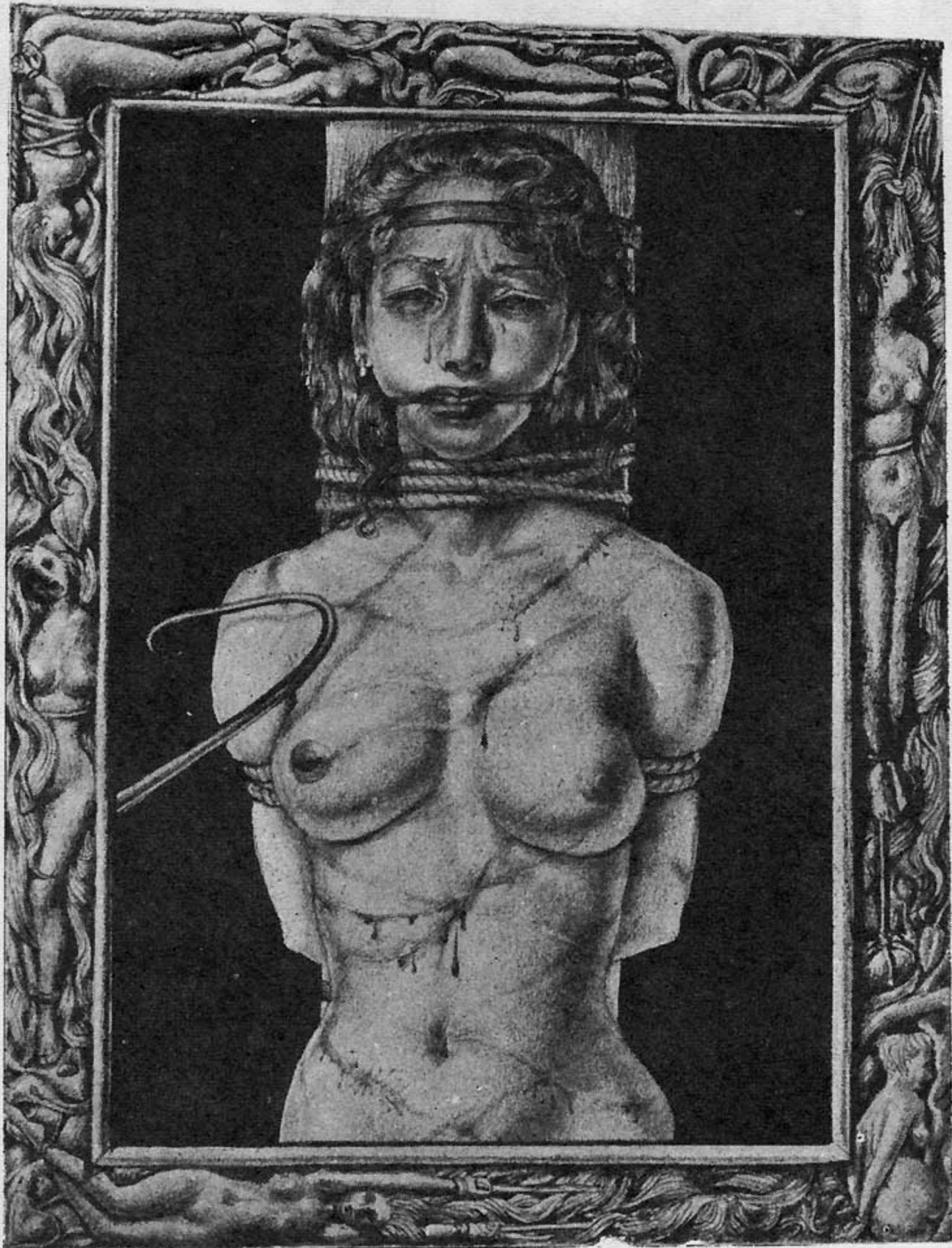


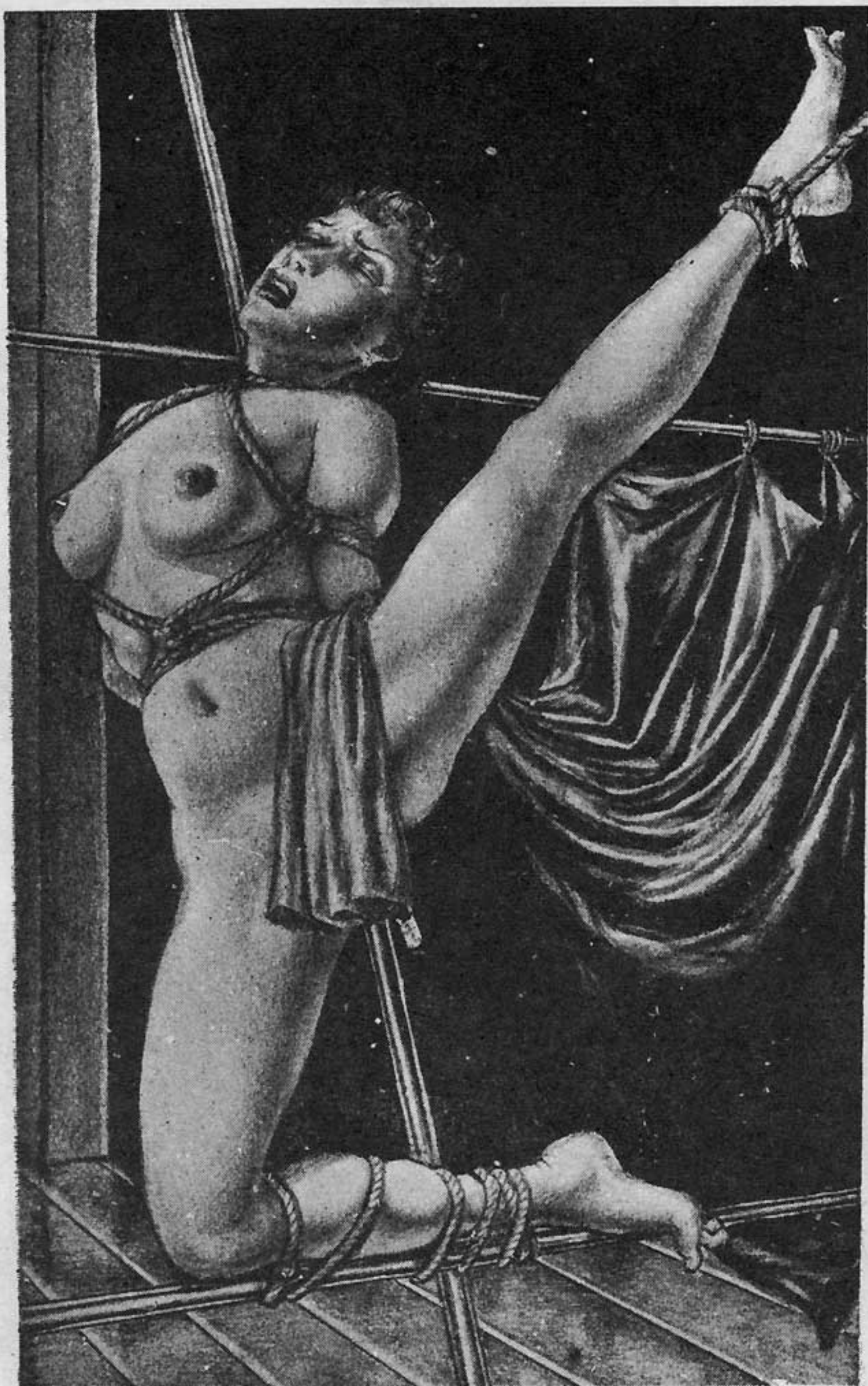


屈伏の涙

やわ肌の血

囚はれた処女の、清純な肌に悪魔は喉を鳴らす。火のような憎悪！ 乱打される鞭！ 身もだえる力も尽き果て、乙女の顔を濡らす屈伏の涙！……

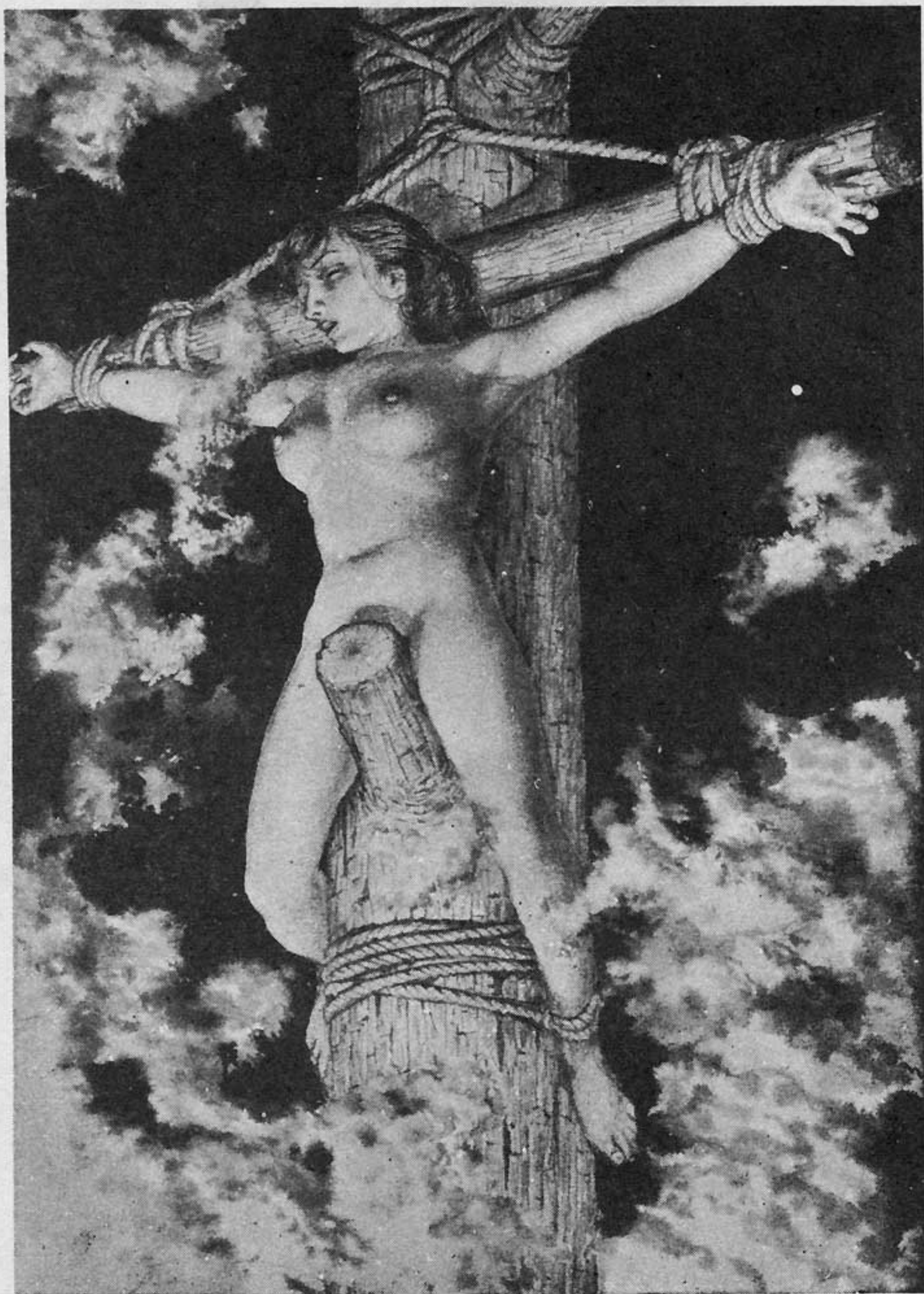




呻　く　顔

ギリギリとしほり上げられるロープにつれて、無惨にも彼女の股は裂けるまでに開く。「アアッ」呻く顔！ その顔に絶頂の美を感じてサチストの心は益々煽られる……………

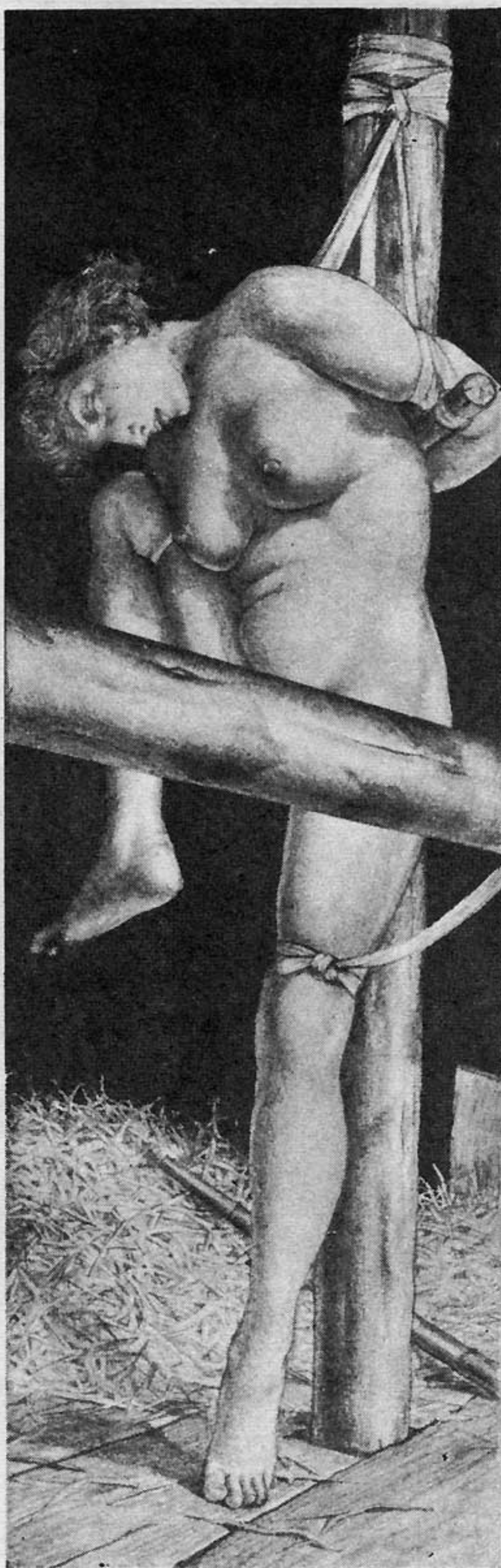
力盡きた女



空に磔られて

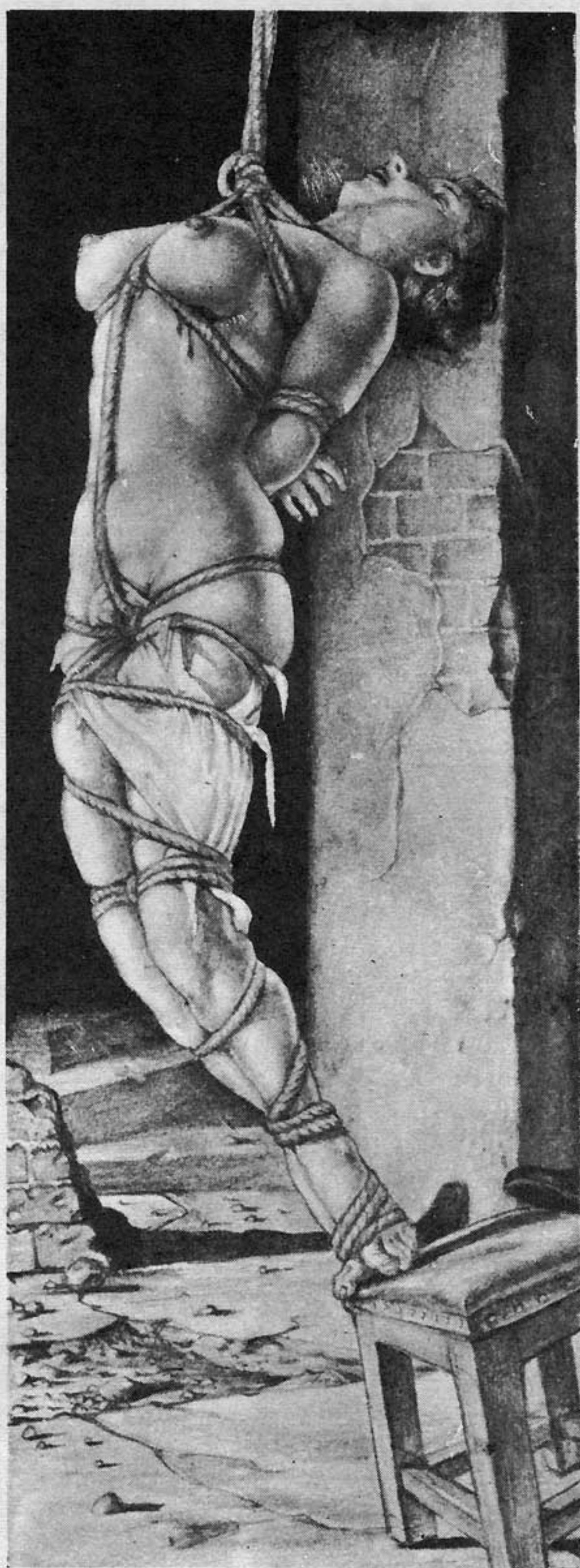
地上数十尺の天空に磔りつけられた豊満な美女！羞恥にもがく気力も消え、涙も涸れ果てた彼女の周囲に刻々と夜が迫って来る。何処からかギヤアツギヤアツと不気味な鳥の鳴声が……

馬小屋



ムツと小屋中に漂う獣の臭い。餌料や馬糞の散乱する中にくもられた真白な処女の肌が、時々思い出したように唇を洩れる苦痛の呻きと共に、ピクリピクリと震えている……

嗜虐地獄



泣こうが喚こうが分厚い壁にむなしく反響するばかりの秘密な地下室
ガンザガラメの娘の肩や腰に、鞭が鳴り、淫らな罵声がからみつく。
爪先を支えた椅子さえ、無慈悲な悪魔の足は蹴り倒す……

繪

解説

「英名廿八衆句」は「衛星二十八宿」をもちつて附けた戯作者の常套手段であらう。一名を血みどり血がいの絵とも呼んで居る。出版当時の世相がそういう絵を要求して居たので櫻田事変や上野の戦争で、江戸の人々の神経の刺激が強くなつて居た時であり、江戸から東京への推移の産物と見てよからう。此絵の特色とも云う可きは人間の血の色であつて普通は紅を用いる所を朱漆を使つている点である。漆絵を錦絵に応用したのは初代安藤広重の江房名所十二景の横絵と此二十八衆句のみで、此絵の血の色は薄紅濃紅朱漆（少し黒味を帯びてゐる）の三色刷りになつて居るのが特色であつて、出版当時市内各所の絵草紙屋の店頭に掲げられた時は朱漆がベトベトと光つて居たので、眞の血が流れて居た様に感じられたという事である。

筆者の芳幾と芳年は井草国芳の門人で芳幾が兄弟子、芳年が弟弟子で、此二人が壯年客氣火の出



慘 無 の 治 明

る様な壯んな闘志満々たる作品である。
 芳幾は明治二十七年七十二歳を以て本所太平町
 一丁目に没したが晩年極めて不遇であつた。芳年
 は天保十年に生れ、明治二十五年六月五十歳を以
 て本所区亀江町の仮寓に没した。病源は永年の不

攝生から脳梅毒に羅つたのである。奇とすべきは此両者とも日本一
 の名声を博して居ながら道楽の揚句、資産を湯盡して晩年は甚だ不
 遇であつた点の一致して居る事である。



儀牲六態







縛り繪六景





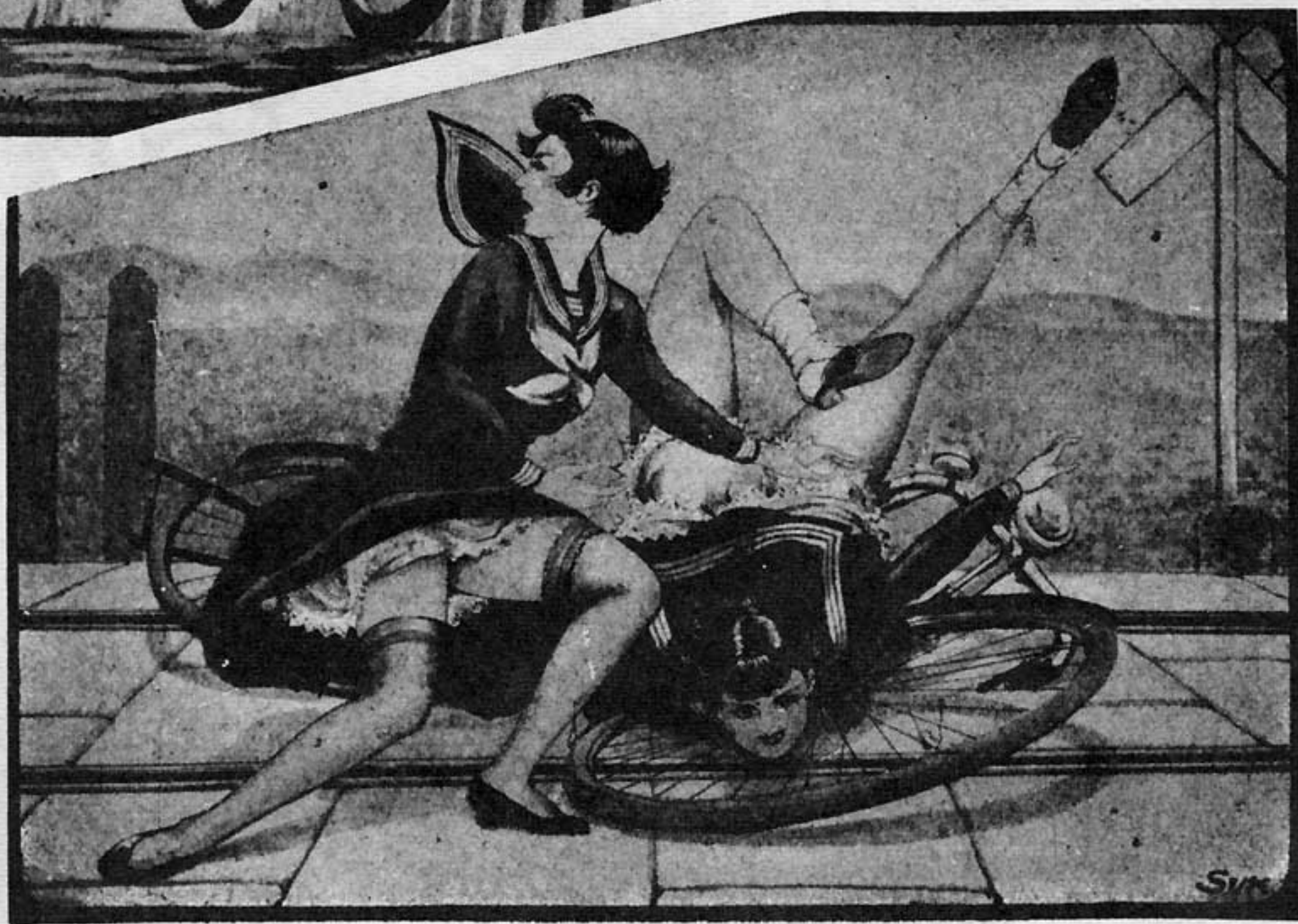
轢

れ
き

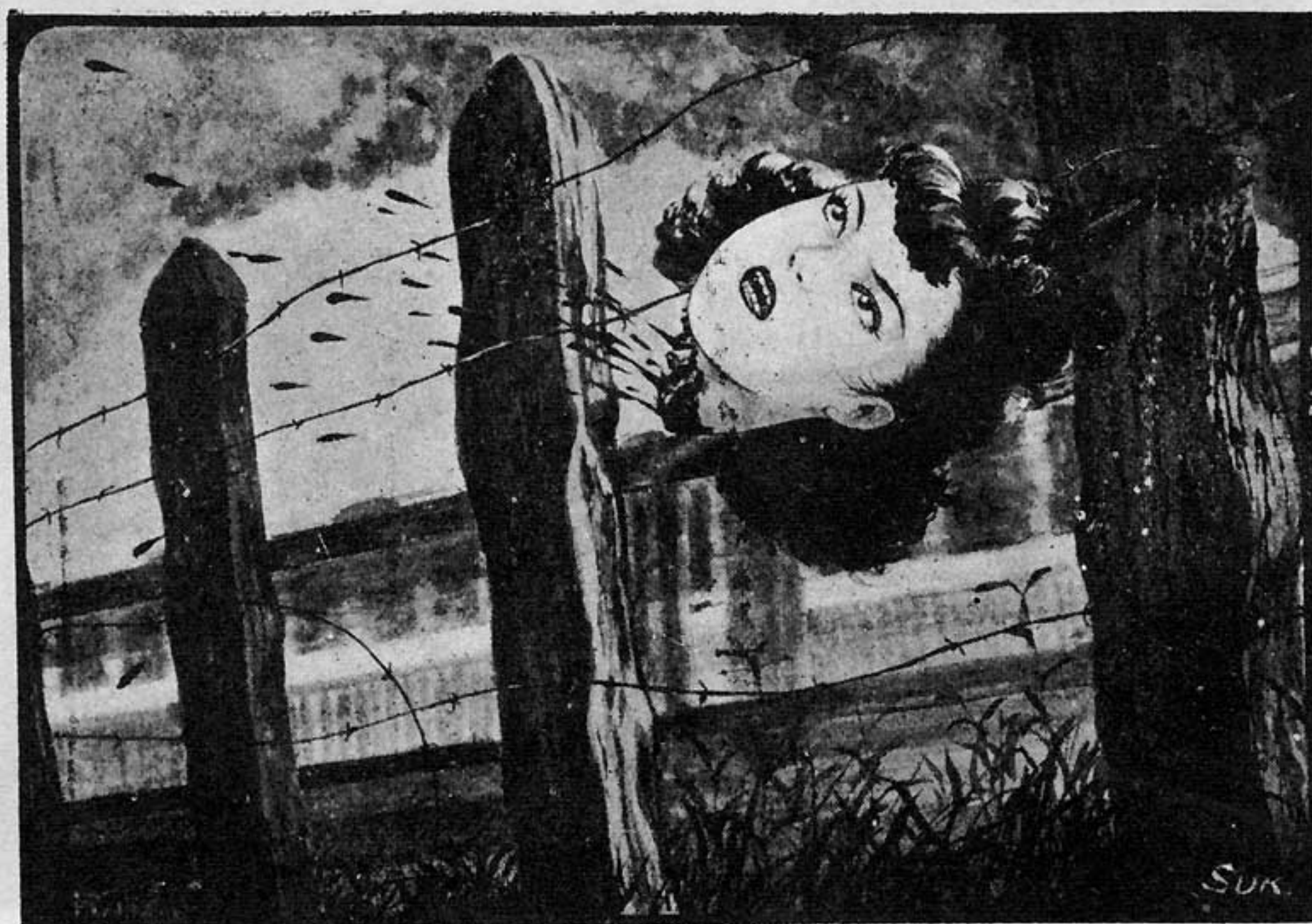
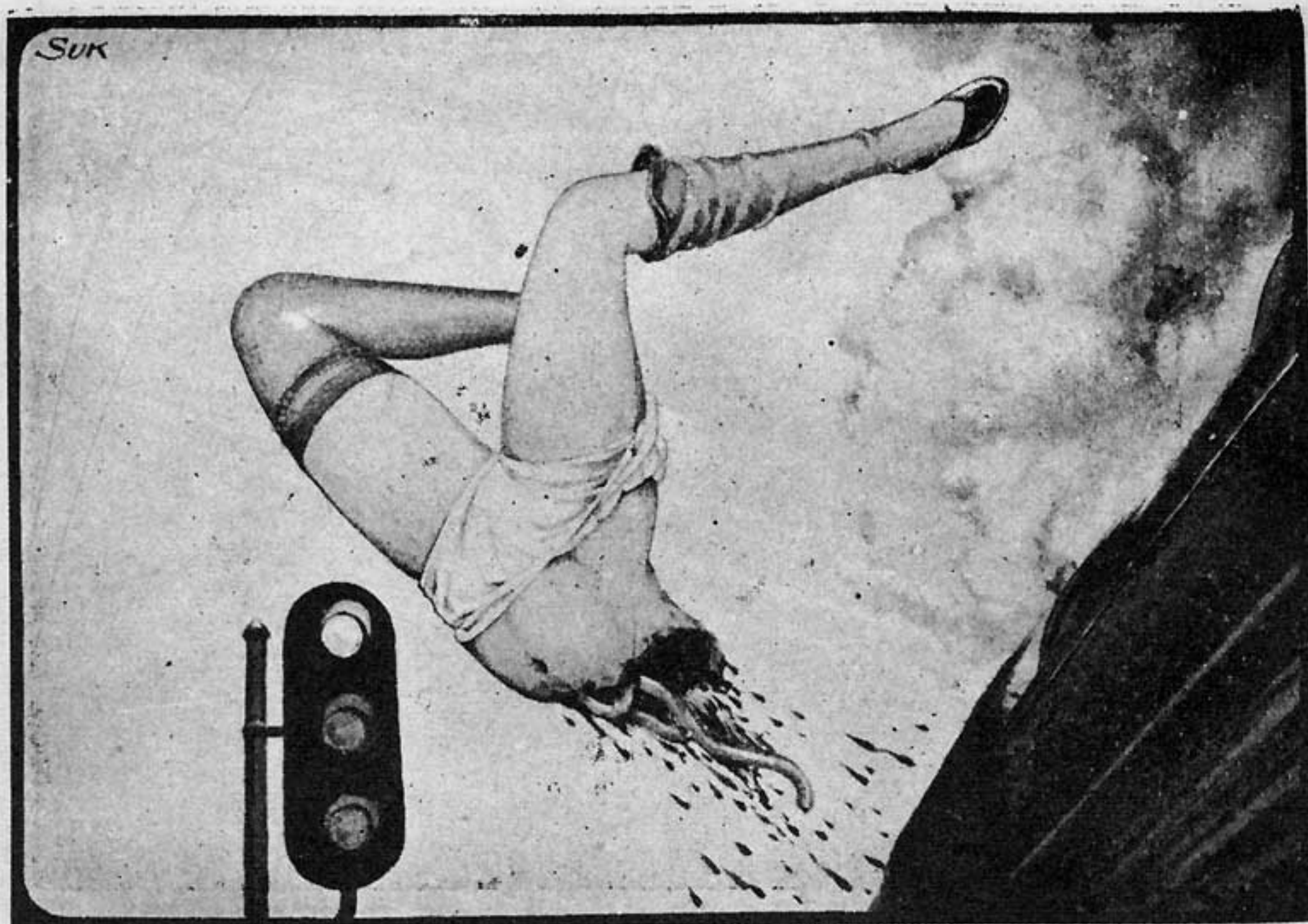
殺

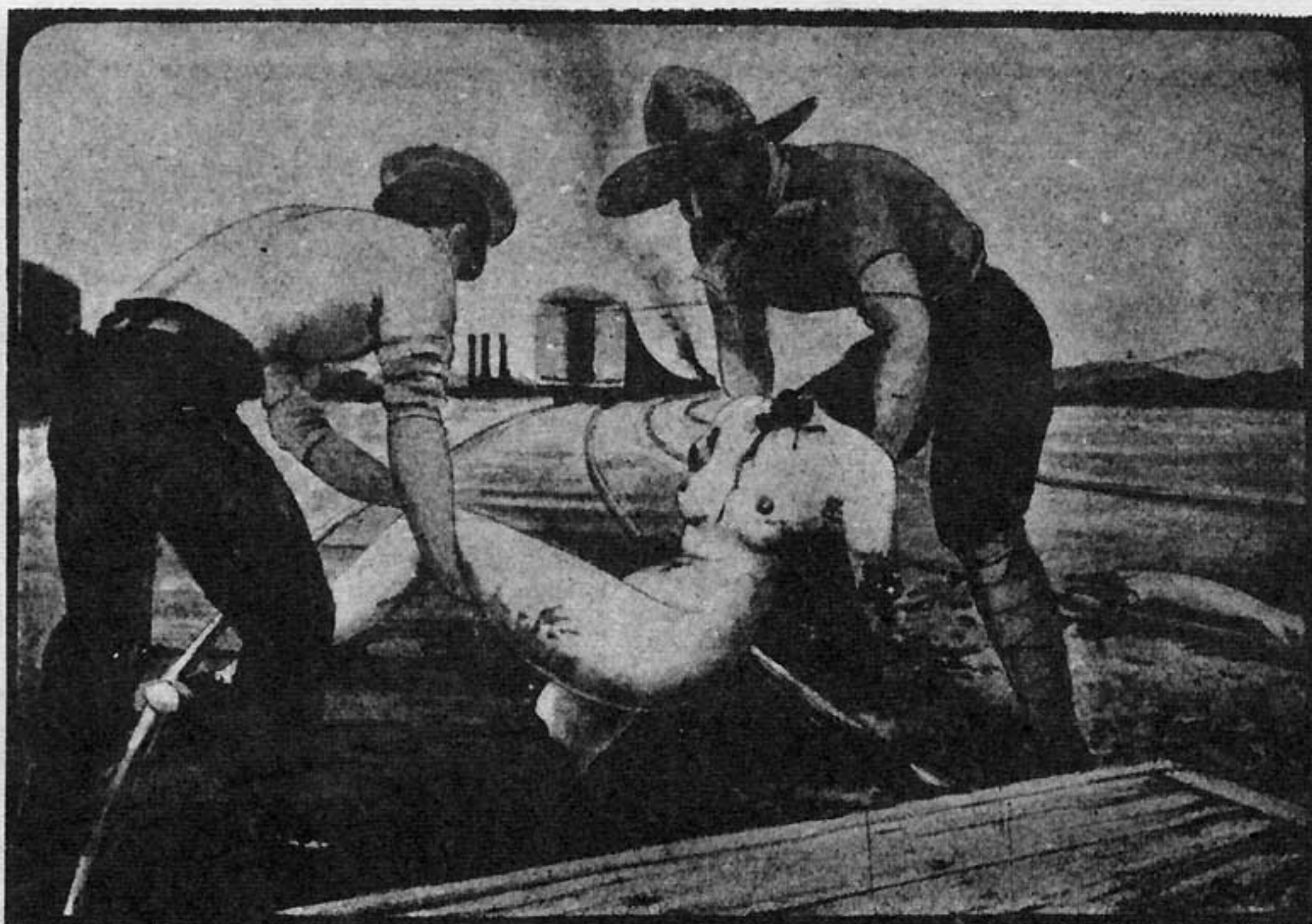
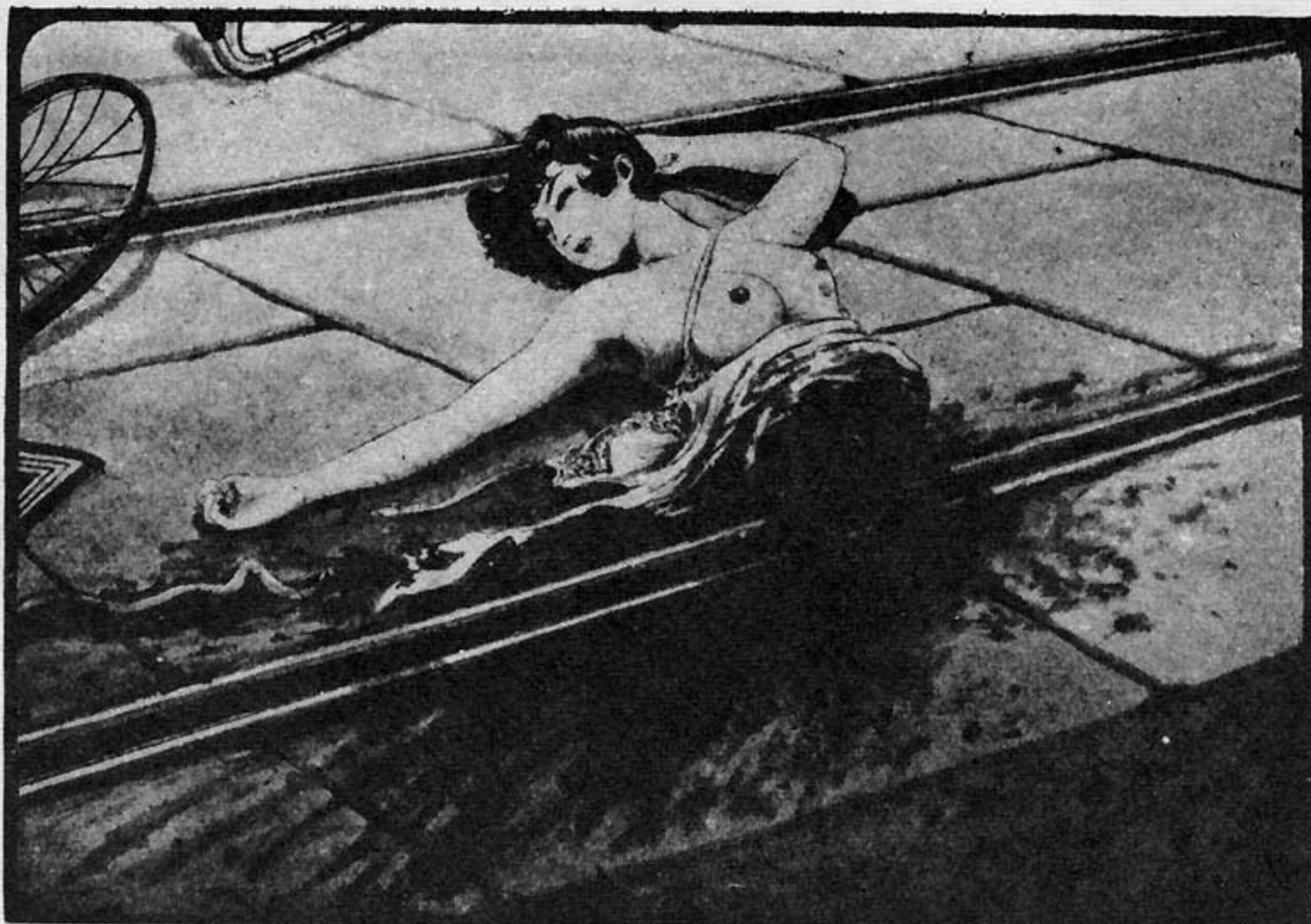
さ
つ

〔鉄路に散る二輪の花〕









奈々洛の戯夢

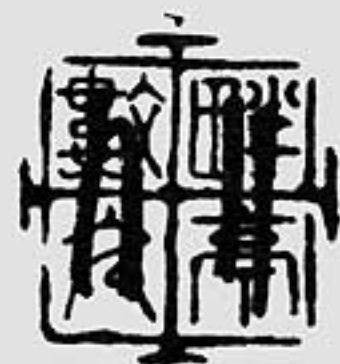
山本武





切腹幻想





(い) (ま) (も) ★ (む) (か) (し) (も)



戦争

日本の歴史は戦争から戦争へと間断なく歩ゆんだ。戦争がもたらす非道、惨酷さは、むかしも、いまも、少しも変ることなく流れつづけている。

性！
ある。

甲冑に身を
かためた猛き
武将が 出征
に際して、再
び生きて還ら
ぬ決意と最後
の思情を示す
のであるが、
戦陣幾夜かの
後 勝利の饗宴
とともに人間の野
はたちまち、むき出
しになつて行くので



明治維新から日清日露の両戦役をへて大東亞戦争にいたる八十年、個人個人の運命はいろいろであるが、その個人の運命をおしなべて支配するものは、やはり戦争そのものであった。

日清談判が破裂すると、時をうつさず我が精銳は清を攻略し、清軍騎兵の奇襲と増援に苦戦しつつも渡河作戦に成功した(上図)。かくて破竹の勢いは、



多数の清国兵を捕へ、遂に旅順口の虐殺事件をひき
 おこすにいたつた。
 出陣にあたり、別離の涙にむせぶは今も変らぬ図
 ではあるが、送るに際し、誰かこの無惨を予感し得
 たであらうか



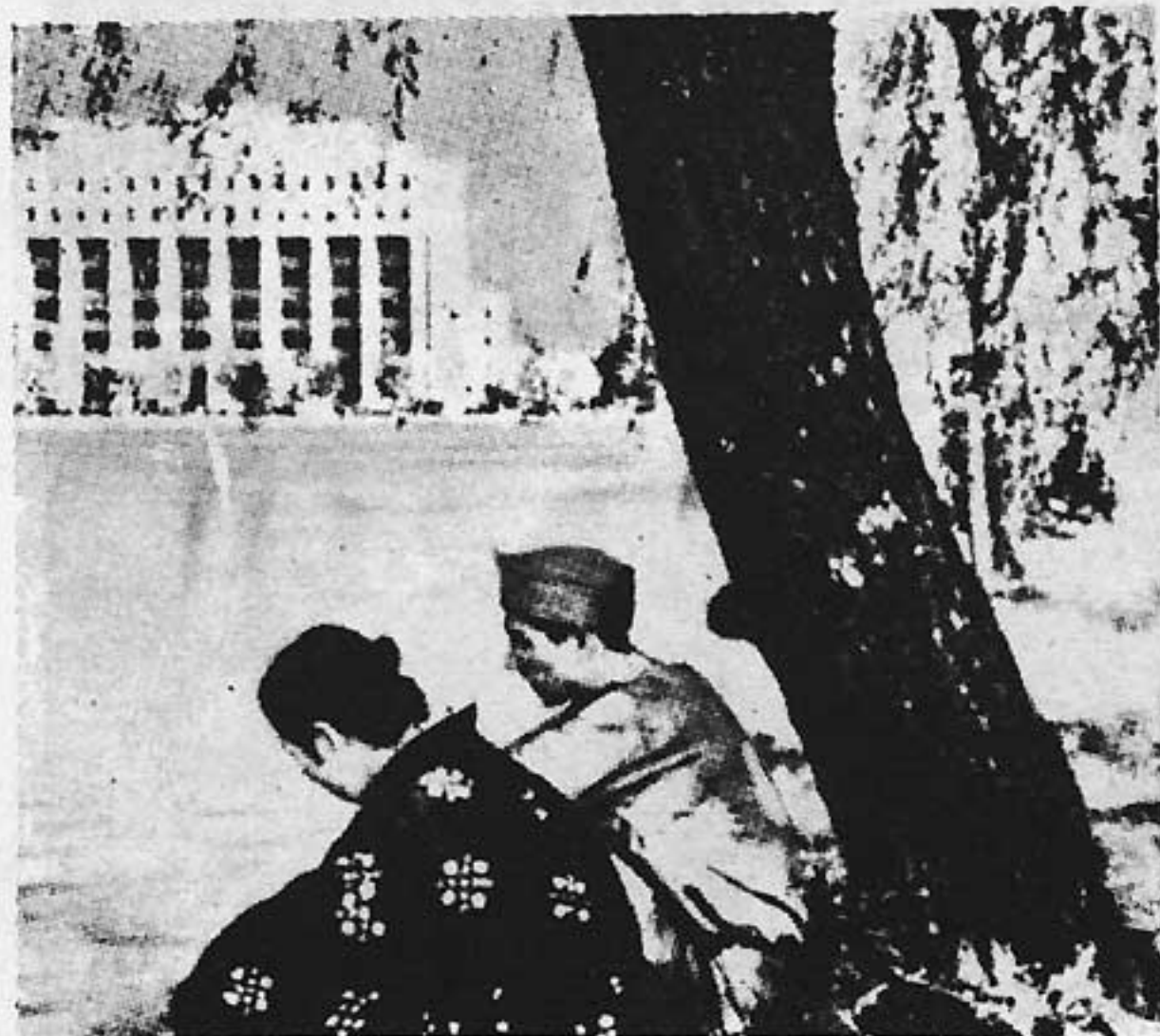
歴史は再び同じ大陸の原野で繰り返えされたことは大東亜戦争史にゆづるとしても、近代史上最大の虐殺事件といわれる南京の悪虐行為を忘れてはなるまい。トラックで護送される市民の群れの行先は……。2万人からの男女が殺され、四週間にわたって南京は血の街と化した。これが、いわゆる「南京の強姦」として世界に宣伝されたのである。しかし、戦いは敗れた。

敗戦

とともにやつてきた生活の混乱と異常。生きるため、食つてゆくた

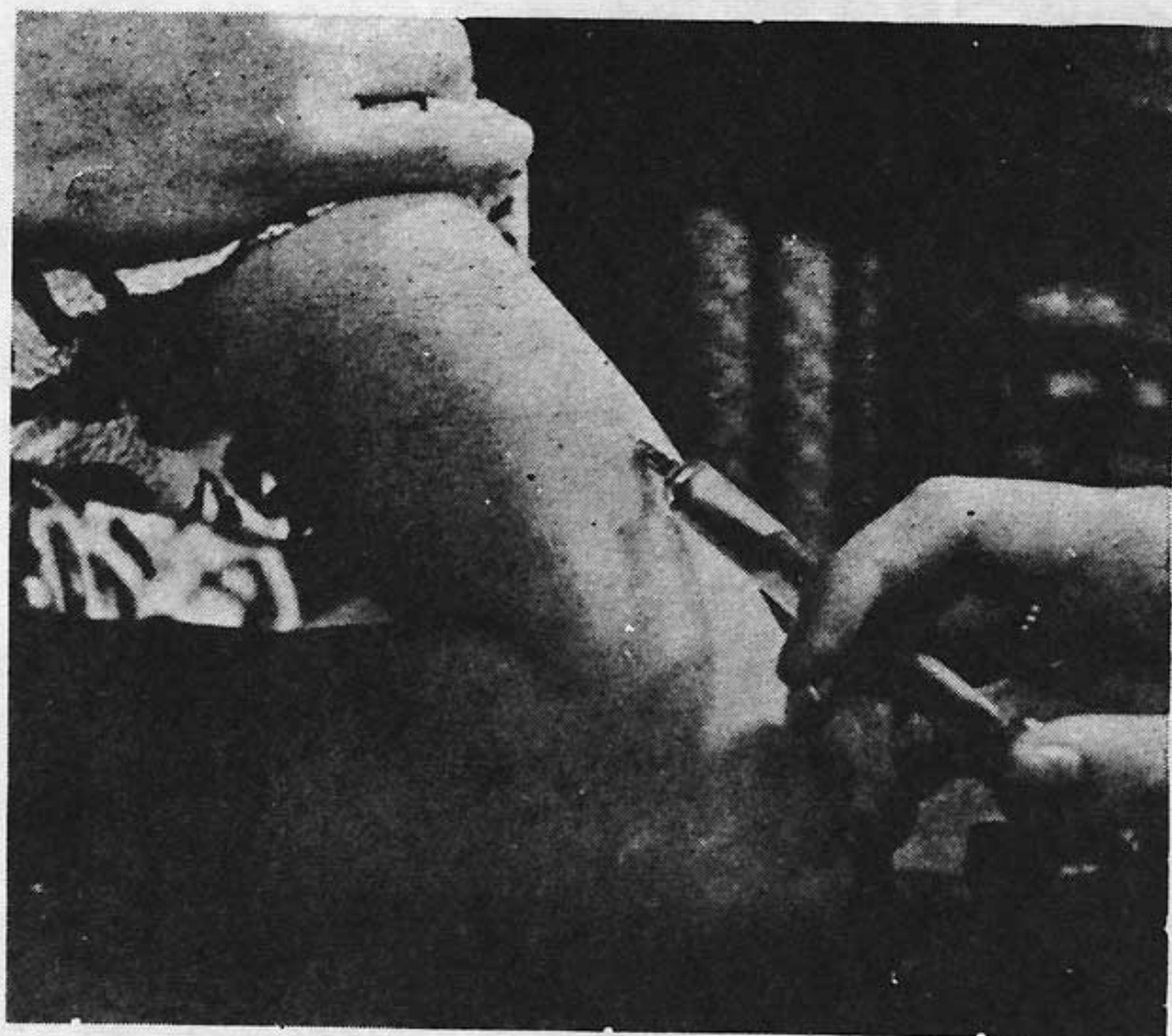
めに、何ものをも売り、何ものをも提供し、できることなら何んでもしなければならなかった。

そのなかで、もつとも生々しいのは、肉体そのものを提供して、それをもととして生きてゆくパンパンが巷にあふれたことである。有楽町から立川へ、千歳への基地と。



そして封建的な古いものの一切が音をたてて崩れ落ち、性風俗はとみに解放され、青年男女はダンスに青春のはけ口を求め、すべてが「肉体の門」をくぐつていった。こうした風潮とともにヒロポンという興奮剤が大眾の中にひろがつていった。

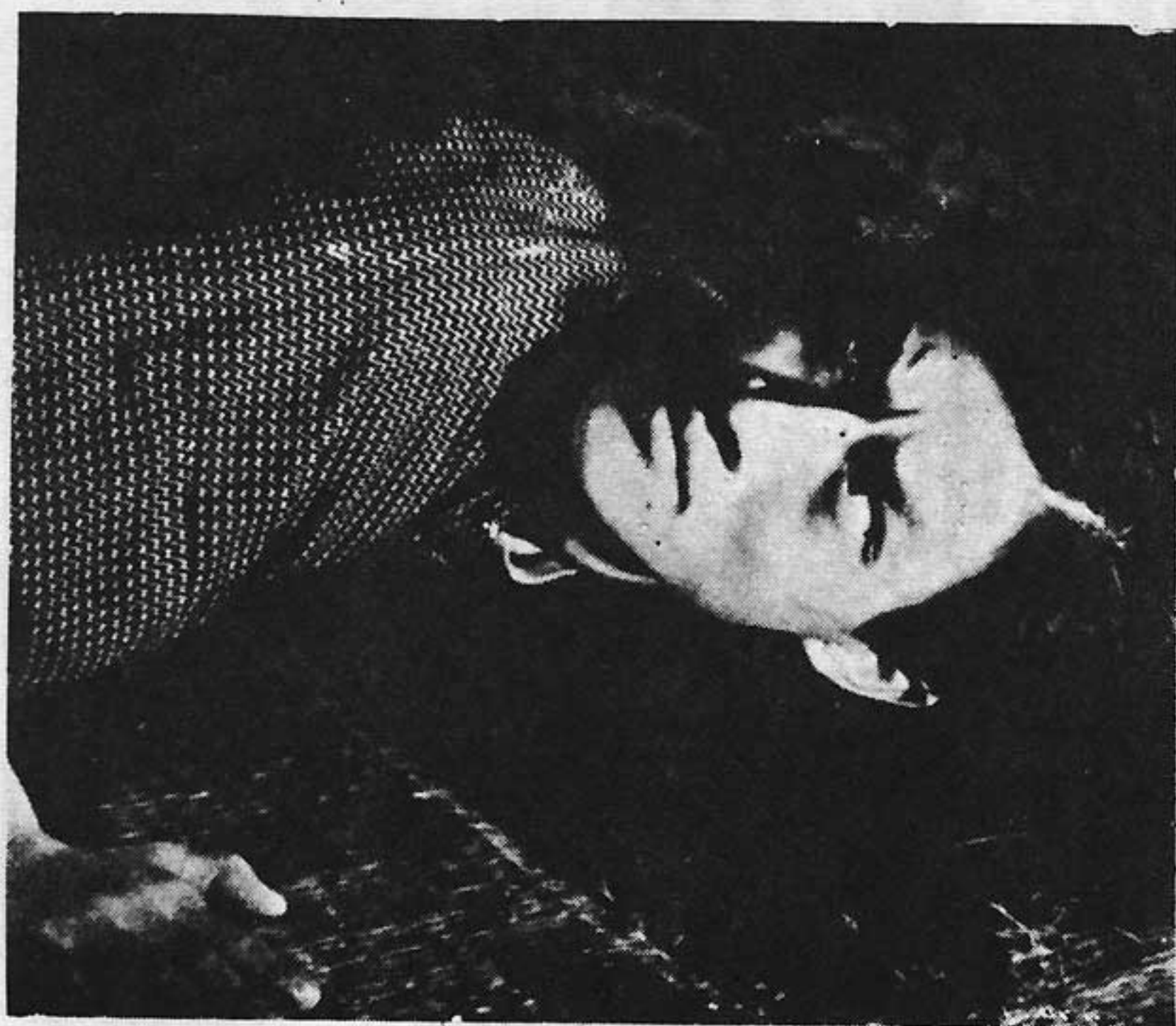
ヒ(ロ)ポ(ン)禍(の)地(獄)

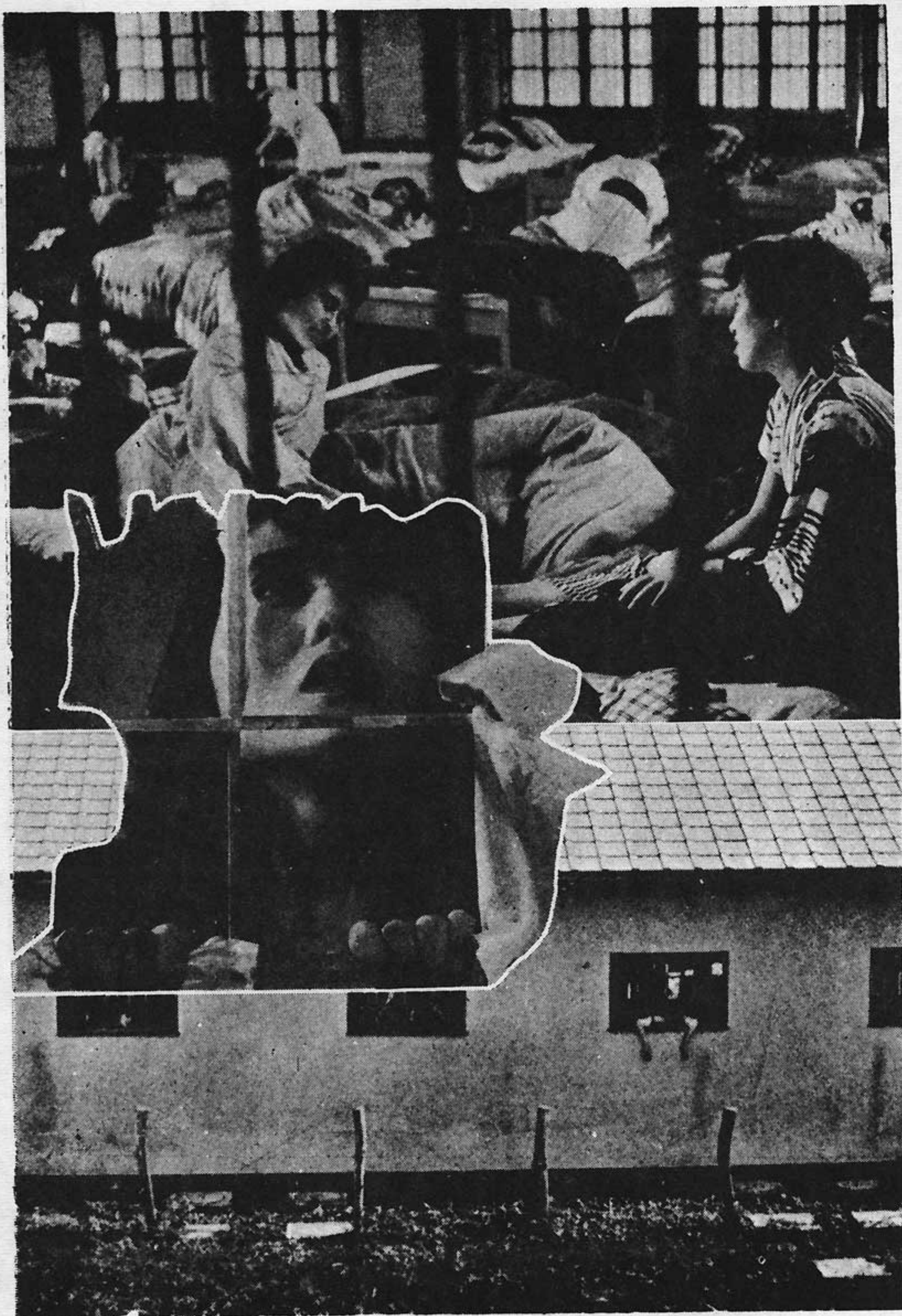


プスツ！小気味よく刺さる針……無色の液体が皮下に流れこむと、途端に気分が爽快になる。——だが、これが昂じると所謂「ポン中」になるのだ。

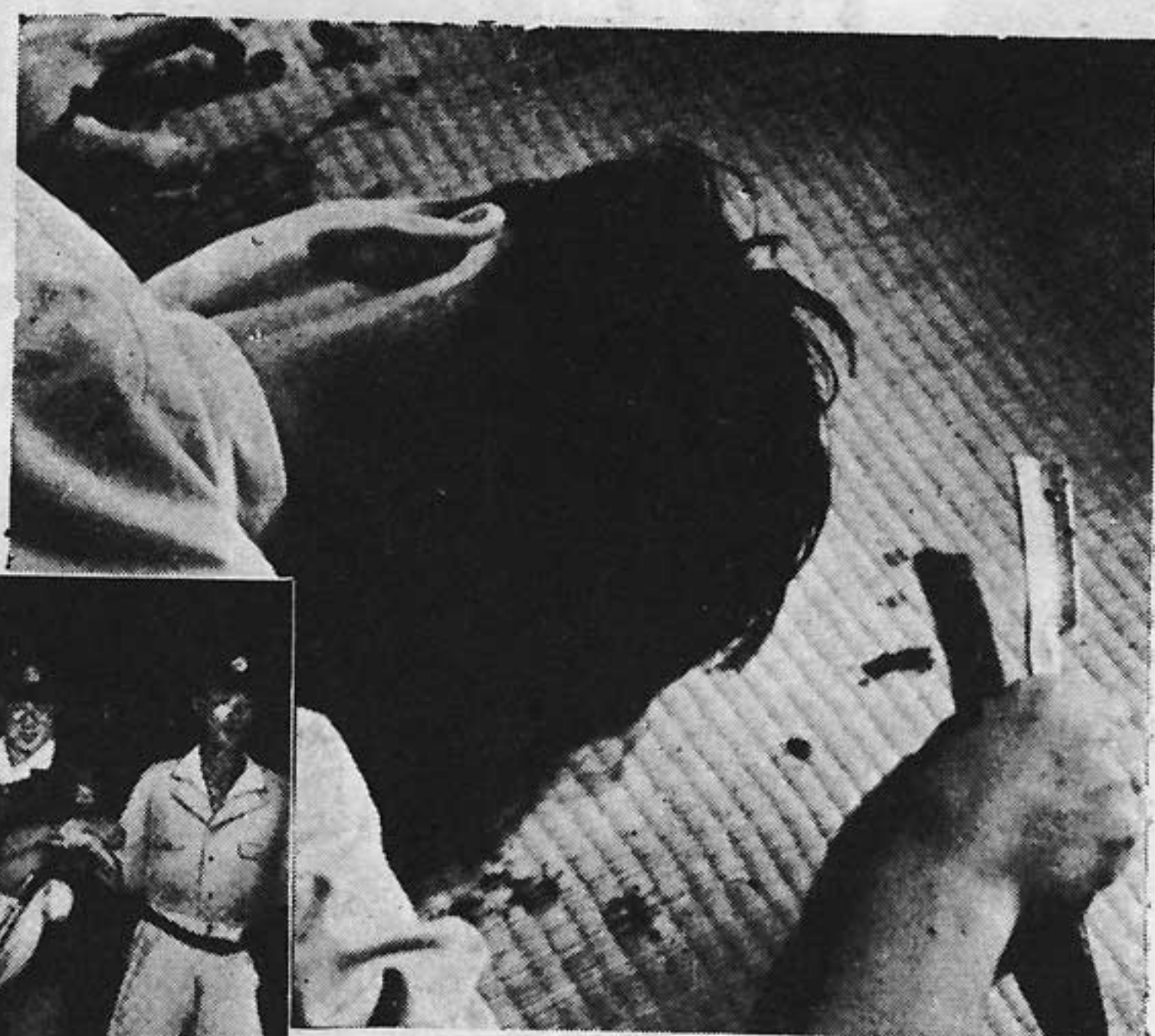
突如！深夜の嵐が襲う。得体の知れぬ悪魔が躍り、舞上る血しぶき、戦慄の叫声！……これがポン中の発作症状である。

この呪うべき敗戦の落し子「ヒロポン禍」は、厳しい取締りにも拘らず全国に蔓延、憎むべき殺人などの兇悪犯罪を生んでいる。これも戦争である。



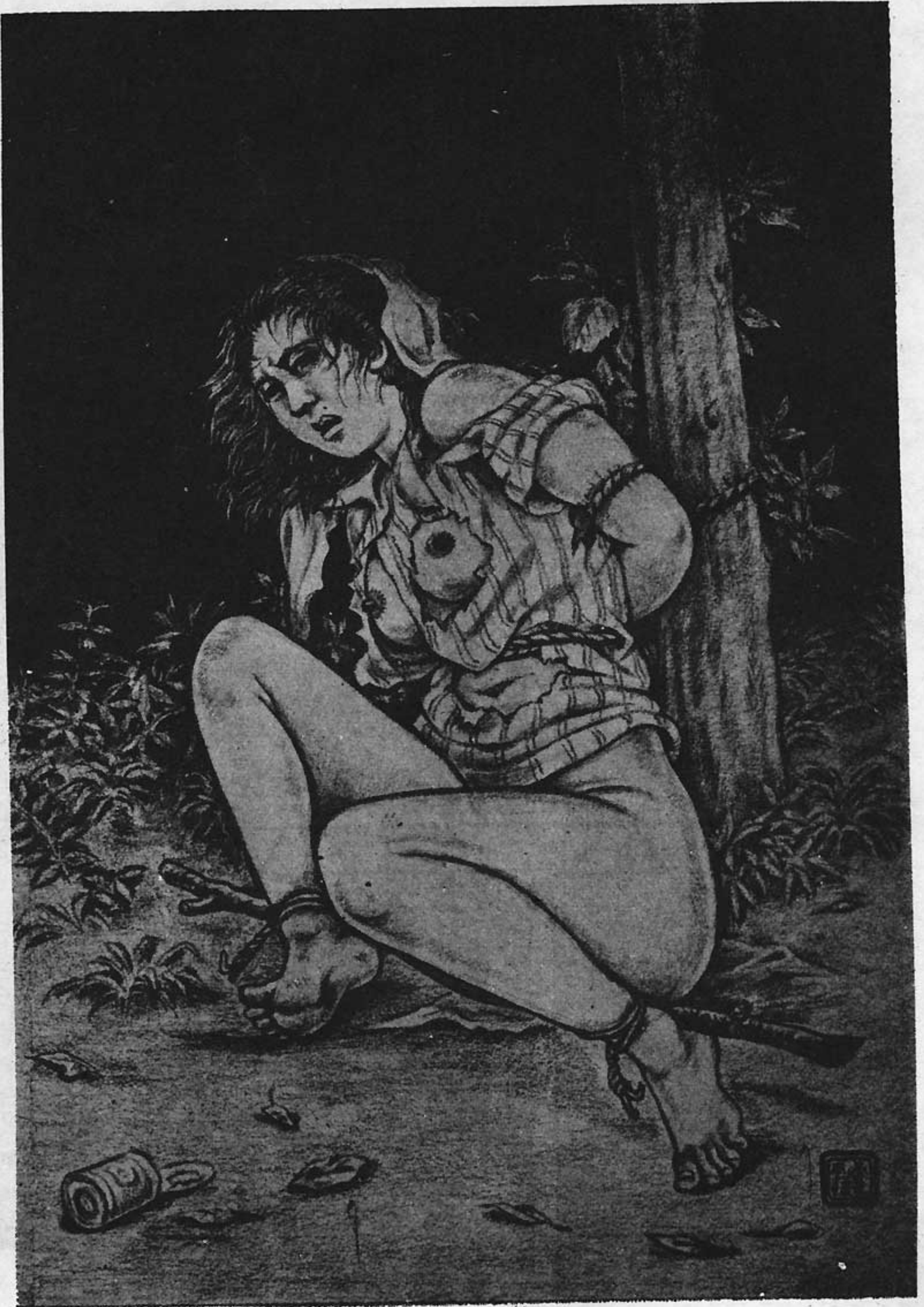


今年一月から六月末までの警視庁管下の検挙数は四千四十二名に及び、なお年々増加の憂うべき現象を呈している。写真は病院に呻吟する患者の実態である。



敗戦の悲劇

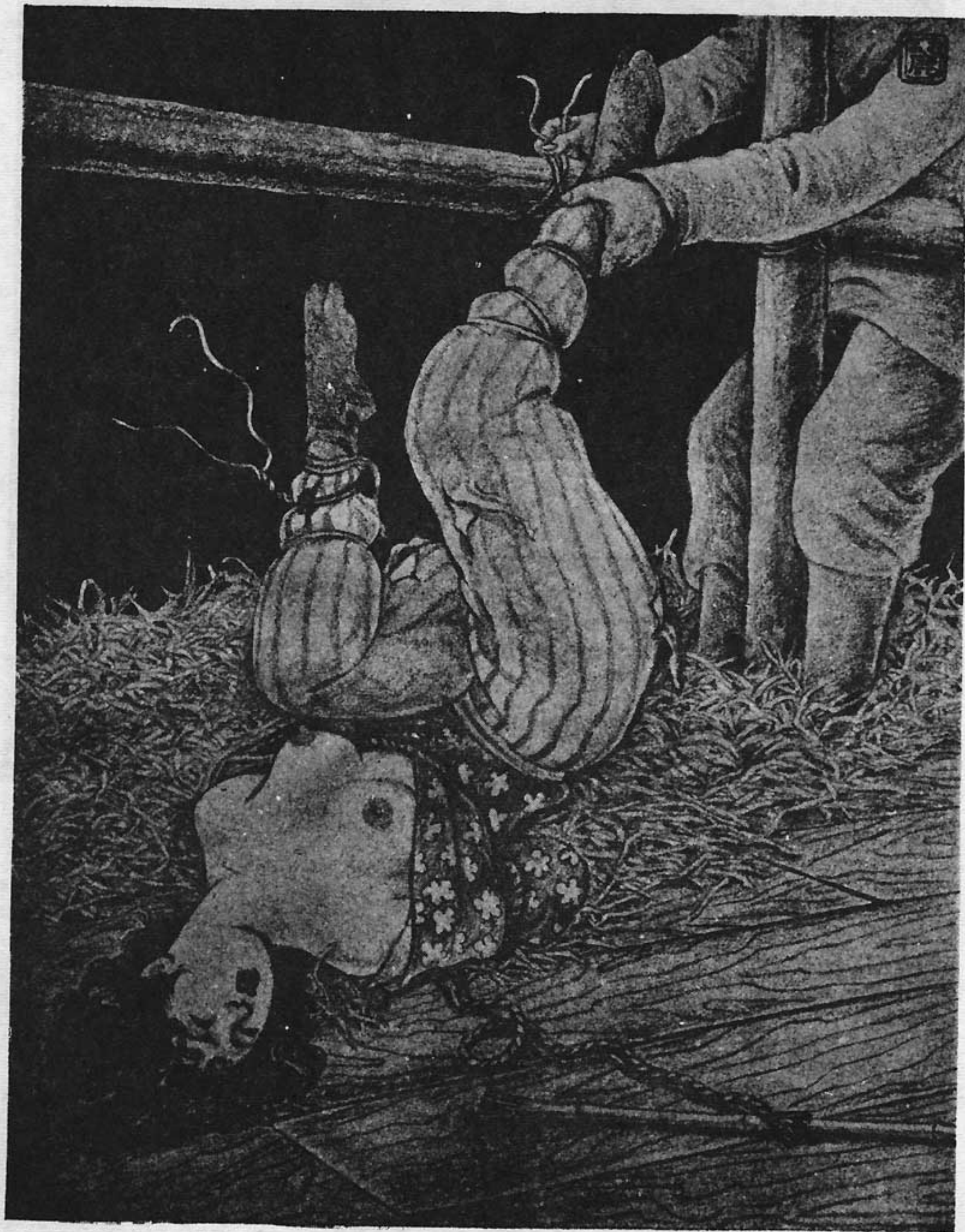
満州の曠野で凌辱される日本婦人

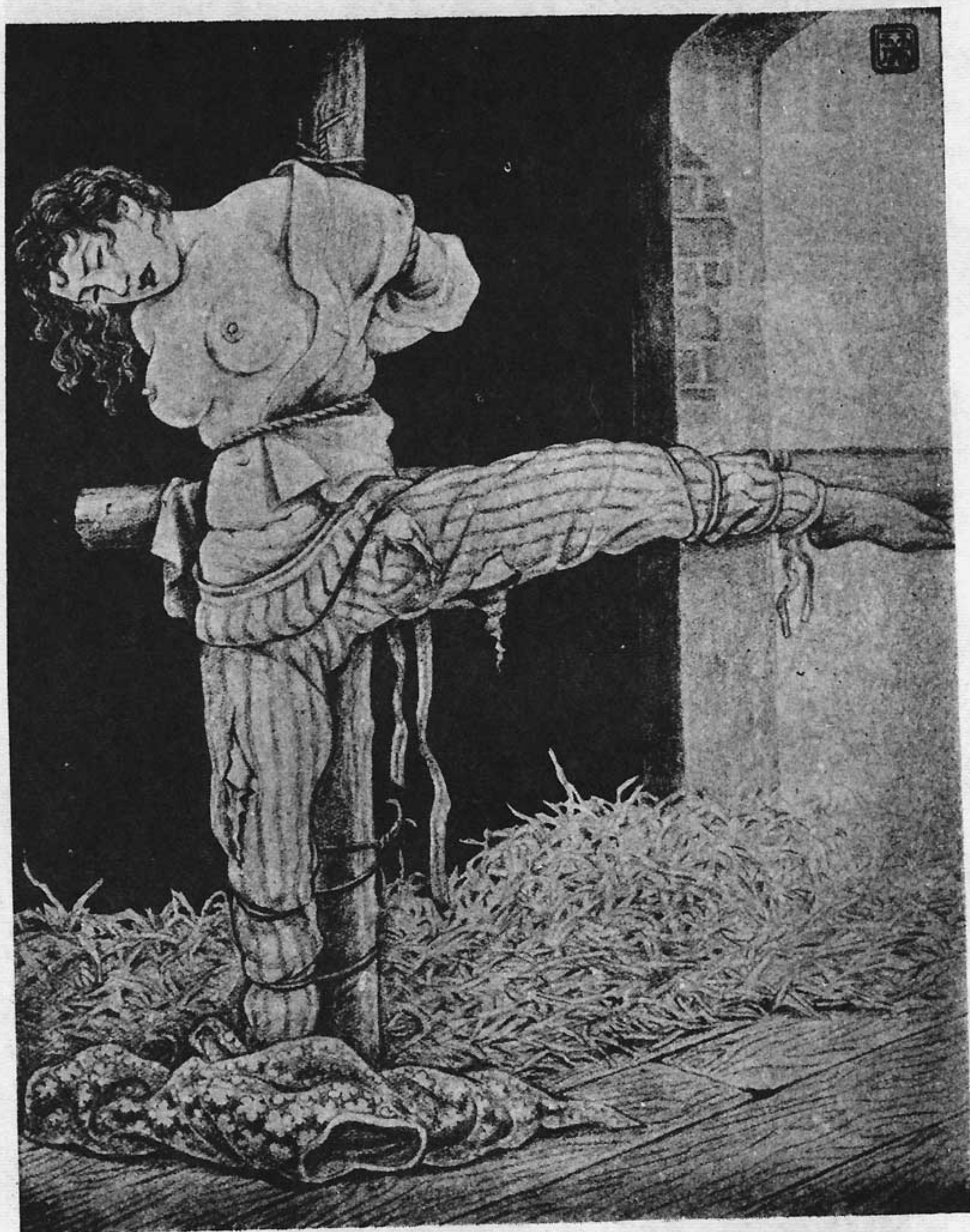


土

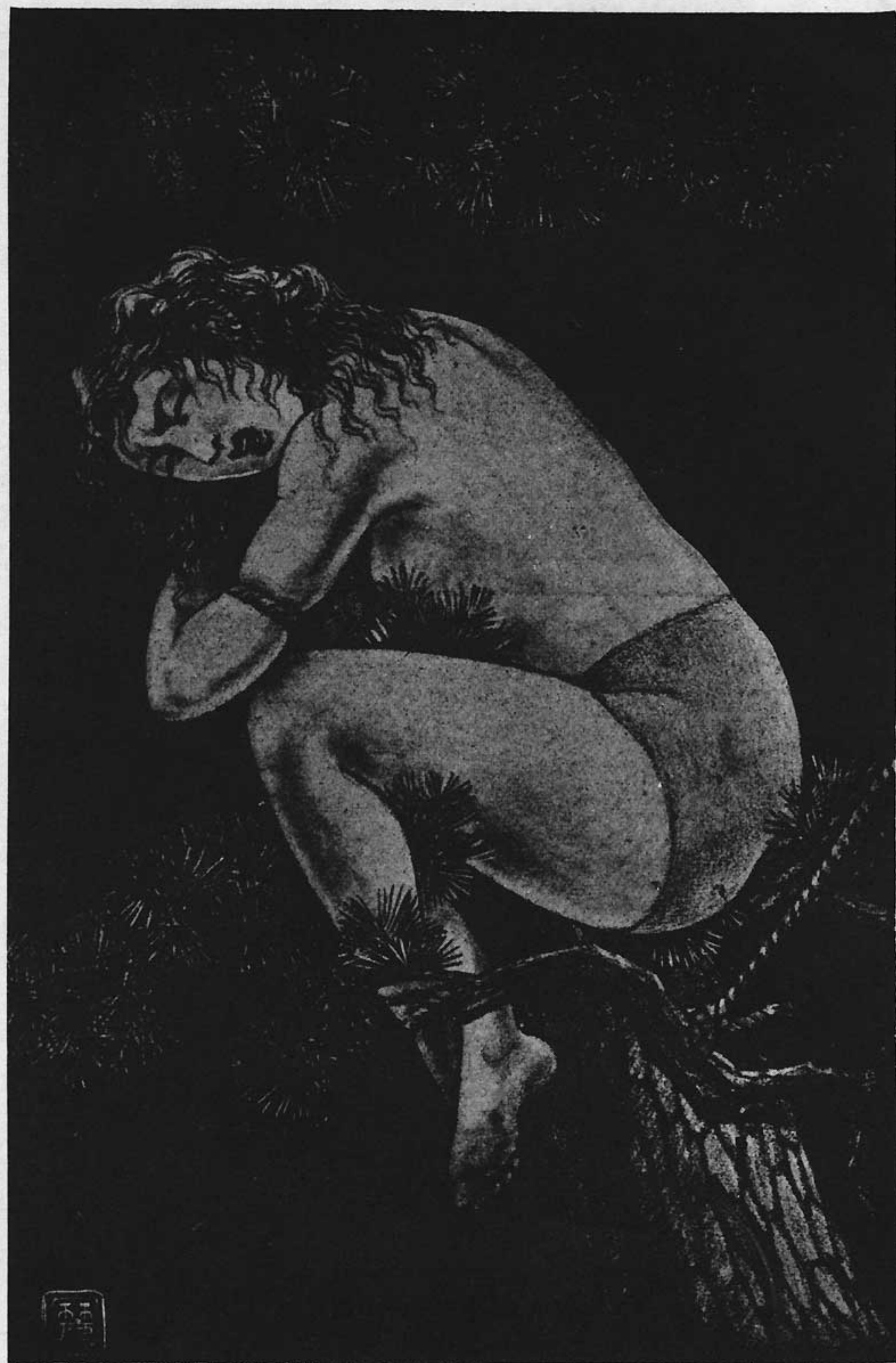
藏

敗戦の悲劇のアイデアより









松葉責め

新妻初秋姿 ナイロンのレインコート……萩と雨…

庭の泉水に秋雨の降りそぐ夕、ナイロンのレインコートにフードを
しぶかにかぶせて腰紐で後手に縛って雨にうたせる。



新妻初秋姿 ナイロンの……桔梗と女郎花

秋立つ日の日曜日、秋草の咲き乱れる庭の樹にナイロンのレインコート
トをまとわせた新妻を後手に縛りつける楽しさ。



白い玩具の映像

—囚はれたニュー・フェイス—

上品な美貌と豊かな肉体に恵まれたニューフェイスの奈津子は一日も早くスターになりたい心の焦りをつけ込まれ、悪質なプロデューサーの罠に掛った。



強い酒をしたゝか飲まされて、フト気がつ
いた時は、彼



女の体はガソジガ
ラメに縛られ、
既に準備の整

った地下
室の床の
上に横た
わつてい
た恍々
と四方か



ら彼女を照らすライト。「アッ」彼女は羞恥で
気が狂いそうだった 清純な処女の肌は露
わにされ、淫らな手や視線が体中を舐
め廻しているのだ。呻く顔、もだえ
る体をカメラは冷酷に写して行く
……



画 集

複雑な表情

何かを云っている。しかしそれは聞えません。ただし
貴方にだけはそれが判るのではないのでしょうか？





蛇

柔と軟の着想より

鰻 責 め



人間は蛇とか鰻とかいう長いものには本能的な恐怖を感じる、蛇はいささか使い古されているので、美しい娘を着衣のまゝ鰻入りのざるの中へ投げいれてみた。魚ぎらいの人には？——



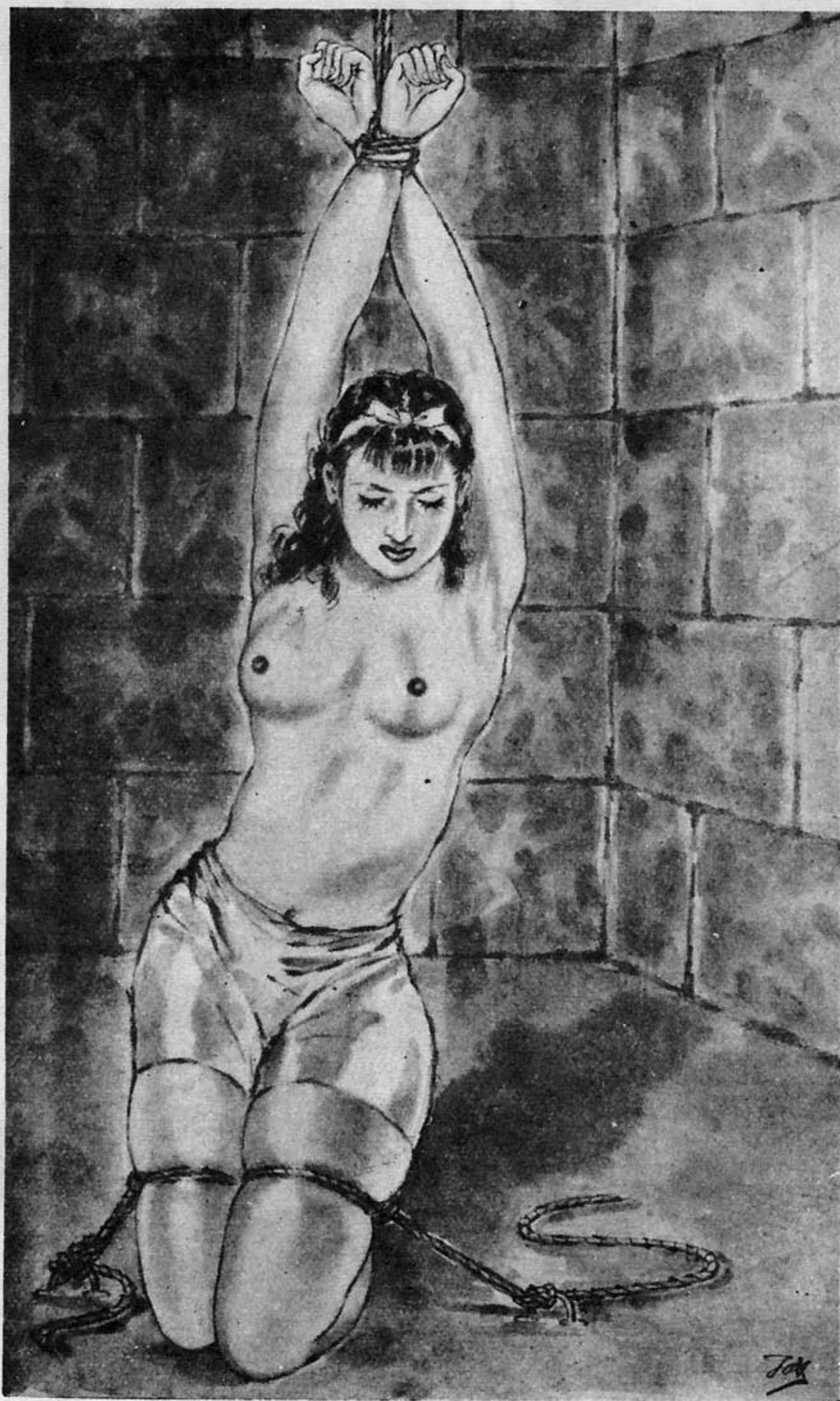
縣 火 尊

現代版一つ家の幻想



冷い石蔵

白い若々しい彼女の裸身がふるえている。抜けるような手の痛みが、かたいコンクリートの冷たさが、美しい彼女を無慈悲に責めている。



女 囚 人 夜のしじまを破って、カタコトと監視の男が近づいてき
おんな めし うど た。若い女囚人は囚衣のほころびさえかくすことが出来
ず、おびえた顔でふりかえるばかりだつた。



生 贊
いけ にえ

御籠場に水御垢をとっていたうら若い乙女は、荒法師たちに後手に縛られて腰巻一つのまゝ、岩の上へ放りなげられた。滝の水しぶきは、白い肌の上へ容赦なく降りそそぐ、神に捧げる悲しいいけにえだった。





切腹曼陀羅図繪

惡

夢

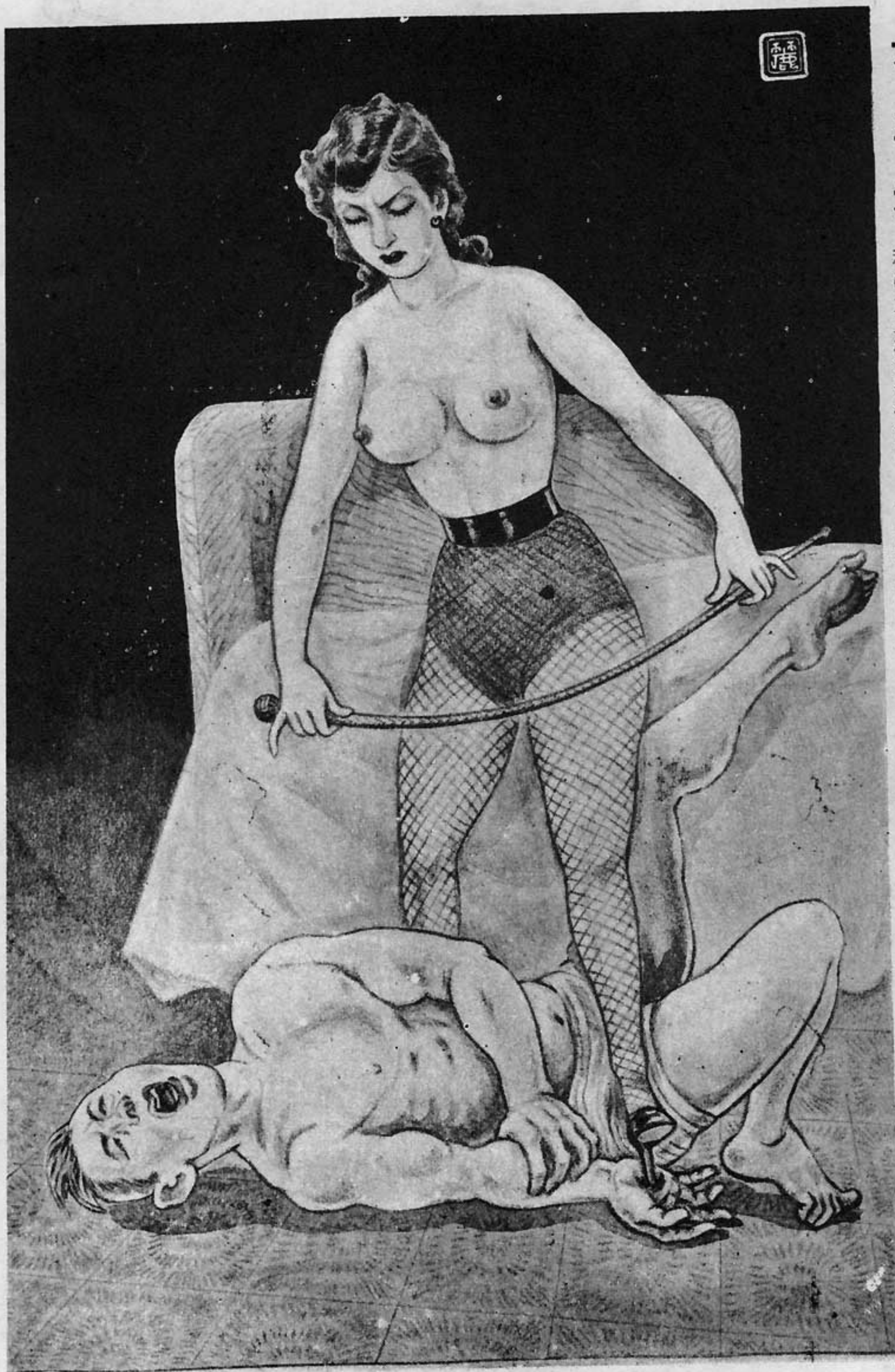




虹児

女王様

女王様、私は貴女の忠実なる従僕です。
私は女王様の命令なら、どんな苛酷な事でも喜んでお受けいたします。



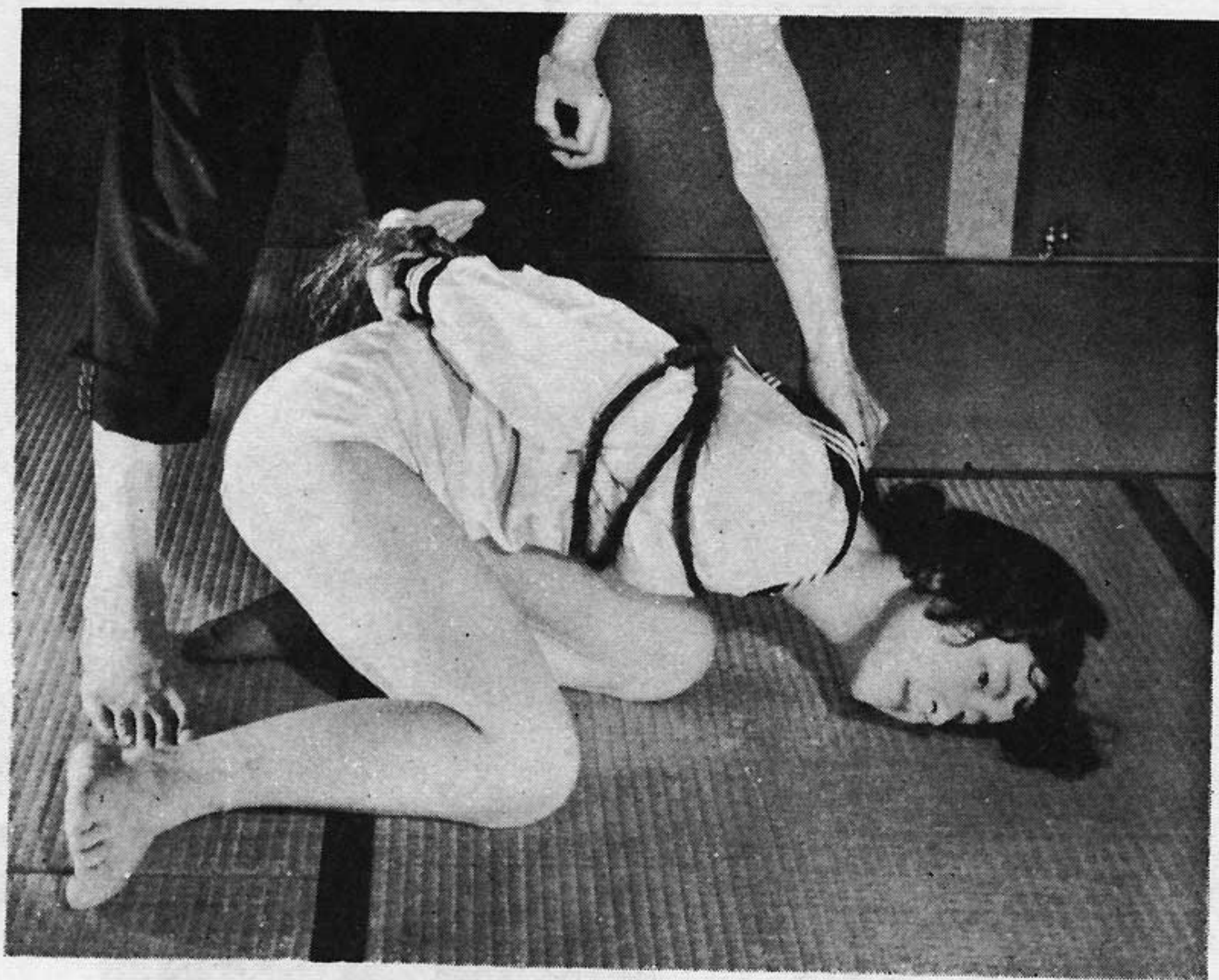
めし縛いまき美

本誌は、本誌の誕生する以前の、数年前から、秘かにアフ・フォートの研究に努めて参りましたが、幸いに最近、美貌のモデル数人、良家の子女で好意的出演による、を特約し得たので、愈々活潑に作品公開を始めることとしました。この作品はすべて、サチ、マゾ、レスボス、ソドミイなど、あらゆる分野を、高い品性を維持しながら、鋭くキヤツチしたもので、他誌の追随を許さぬ、本誌独特のものであります。何卒御期待を乞う次第です。

第一回発表は、若いピチピチした美貌の処女を、近代的感覚で緊縛しました。構図や雰囲気、に重点を置いたものですから、別に説明は不要で、単に鑑賞して載けばよいのですが、念の爲に、一言づつ注釈を加えておき

老 海 後





うしろ手

ましよう。

「後海老」は、弓状に背り返った線の美しさを狙いました。今迄他社で発行された緊縛写真で、浴室の作品は皆無であります。本誌は特に美しい岩風呂にカメラを据え、数々の傑作をモノしました。これはそのうちの一枚である訳です。自然を摸した岩風呂と、美しい乙女の肌は絶妙のコントラストと言うべきでしょう。

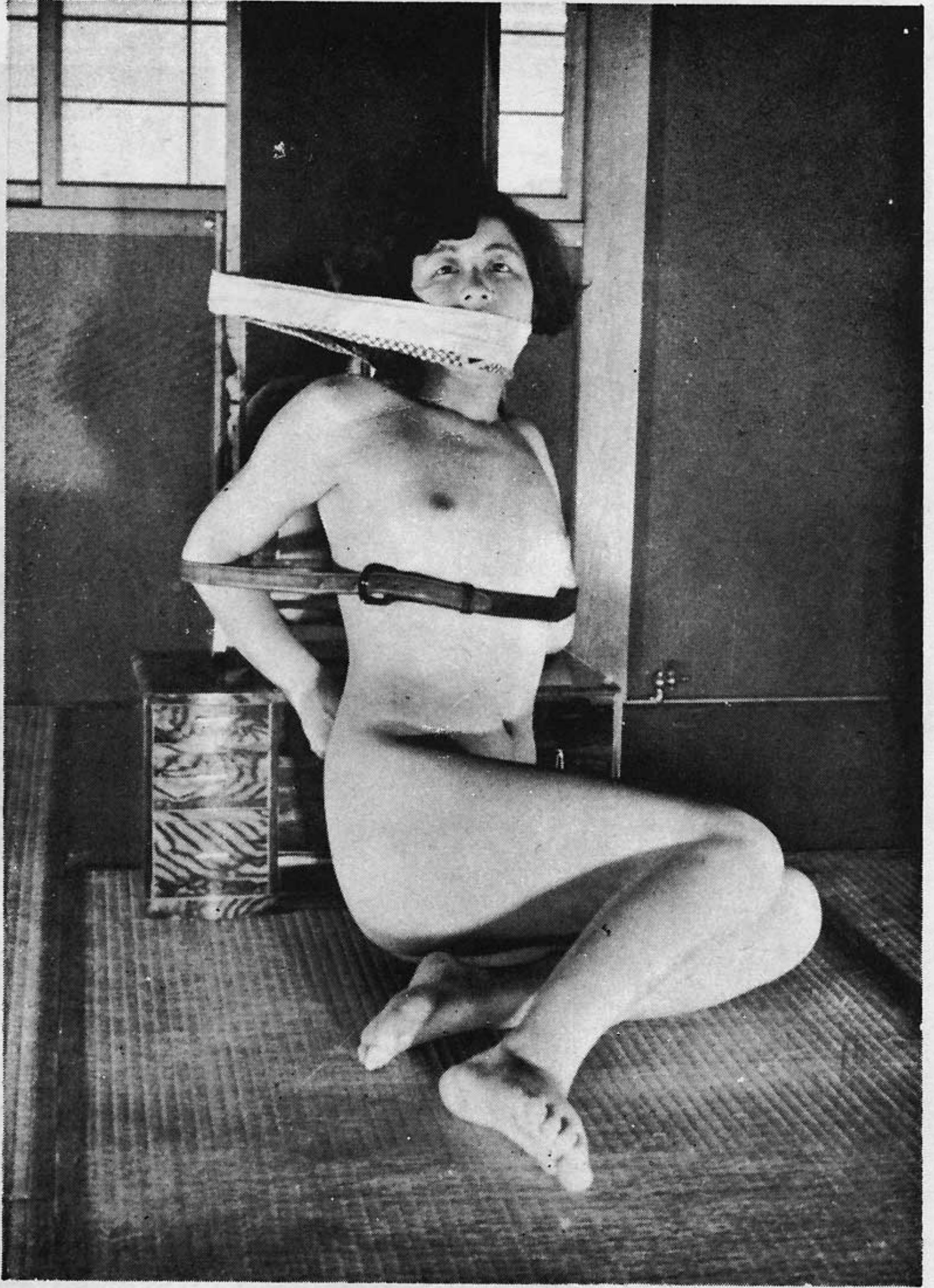
「うしろ手」は力に圧迫される女性の体の曲線を狙ったものです。良好なモデルに恵まれて、サDESTテクな構図と曲線の美しさは御満足を載けるものと思います。

「お仕置」は女同志の美しさです。（セーラーは借着ではありません）ナイロンの靴下の魅力！……。

「鏡台」は、鏡台自身女性的で優美なものです。それが、それに革帯で緊縛した作品です。白い手拭の効果——。この写真は全体の美しさを鑑賞して下さい。



お仕置



鏡 臺

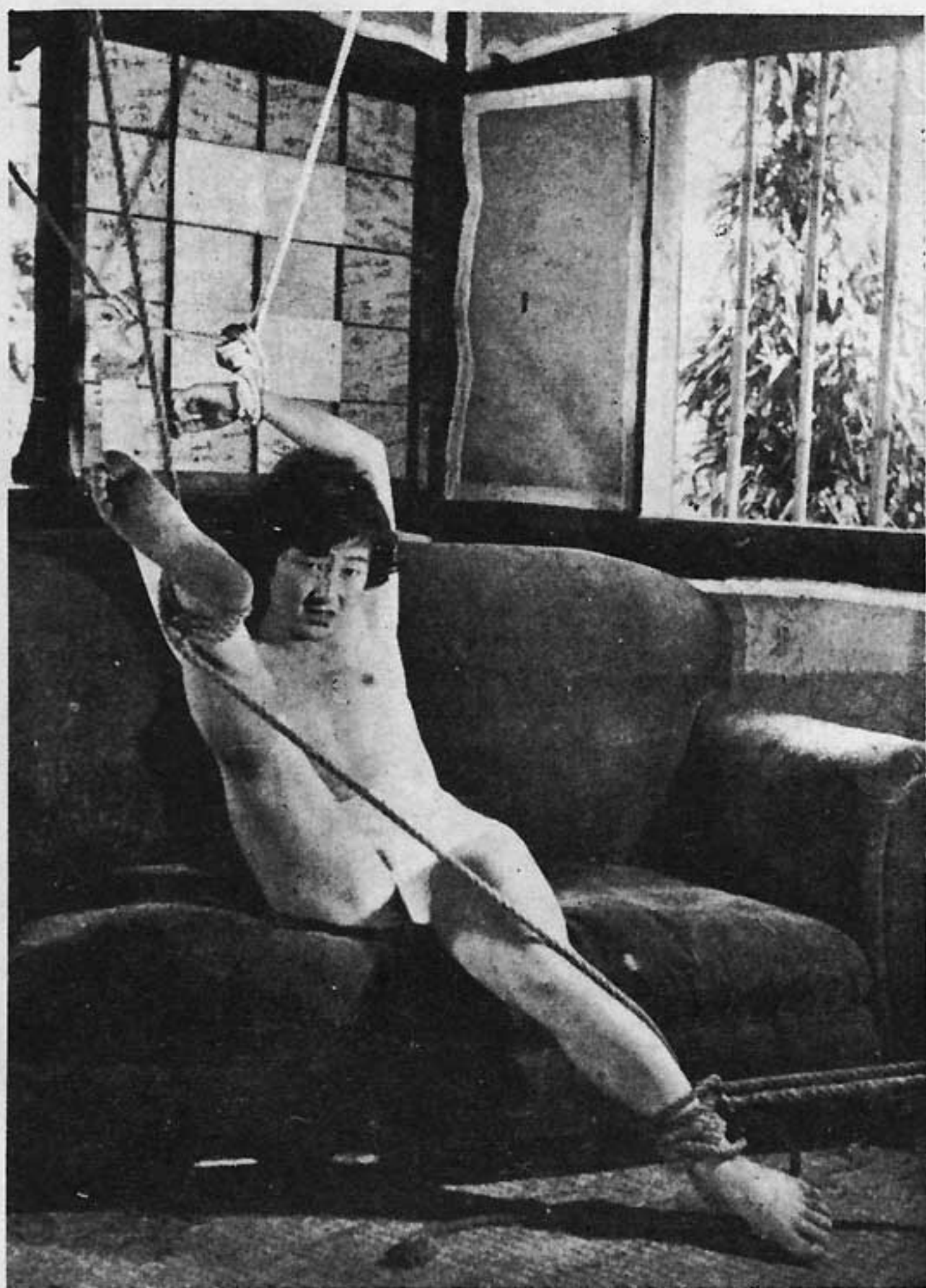


↑エプロンの處女

一枚一枚衣類をはぎとられて、羞と怒りに悶える処女の肌！ だ
がやがて、體に喰い込む縄や鎖の痛みに、抵抗する氣力も次第に消
え失せ、腫に浮ぶ涙と共に、彼女はグッタリとなつた身を貴方の前
え投げ出す。

詭高い白鳥が、悪魔の力に翻弄される悲劇のシーンです。

← 凌辱のソファ



← 犬の餌



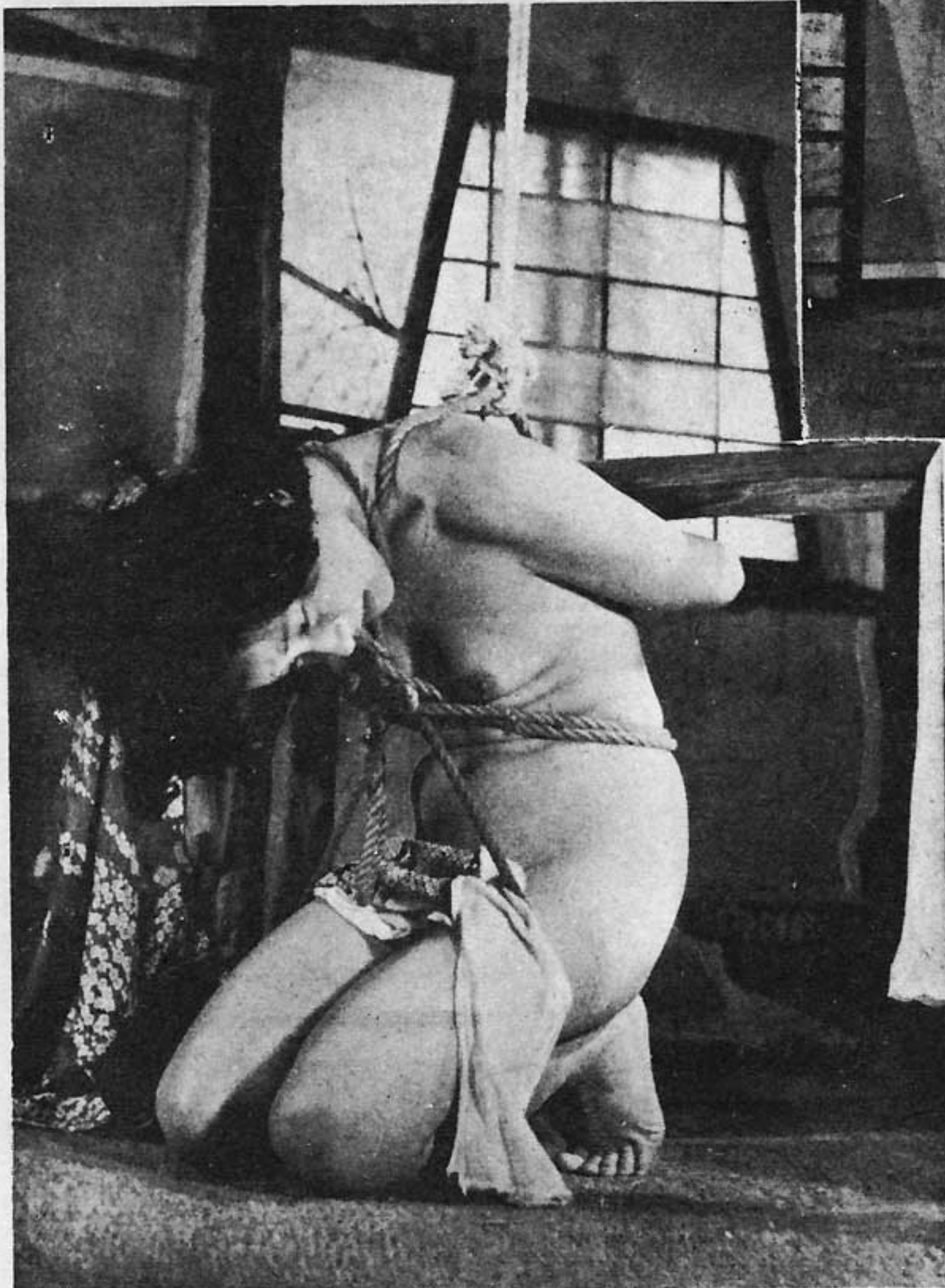


→ 吊られた小鳥

成熟した美貌の処女ぐらい美しいものはない。その処女を、人気のない一軒家に連れ込んで、縛って、吊して、鞭うって、思う様に辱かしめる。

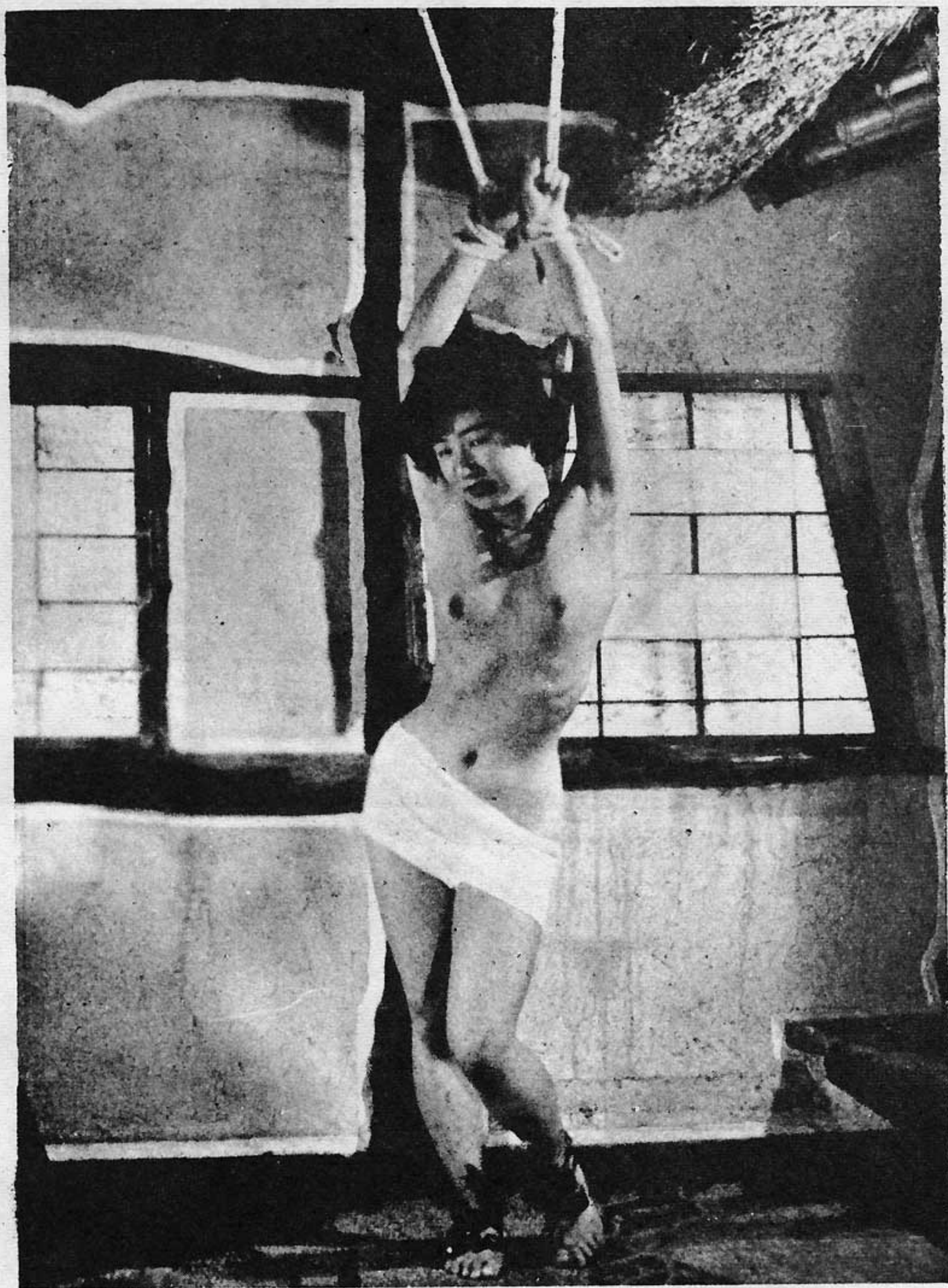
こんな空想は、誰しも描いてみるものだが今號の特寫フォトはそういった雰囲気特に強く狙ってみました。

ふだん自分を嫌っている女を、さんざん苦しめて、哀願させる楽しみ、これこそサデストの最高の悦楽であらうと思はれますが、そんな幻想を描きながら、この写真集をユツクリ観賞して下さい。



← 乳房のうめき

肌を揺るがす





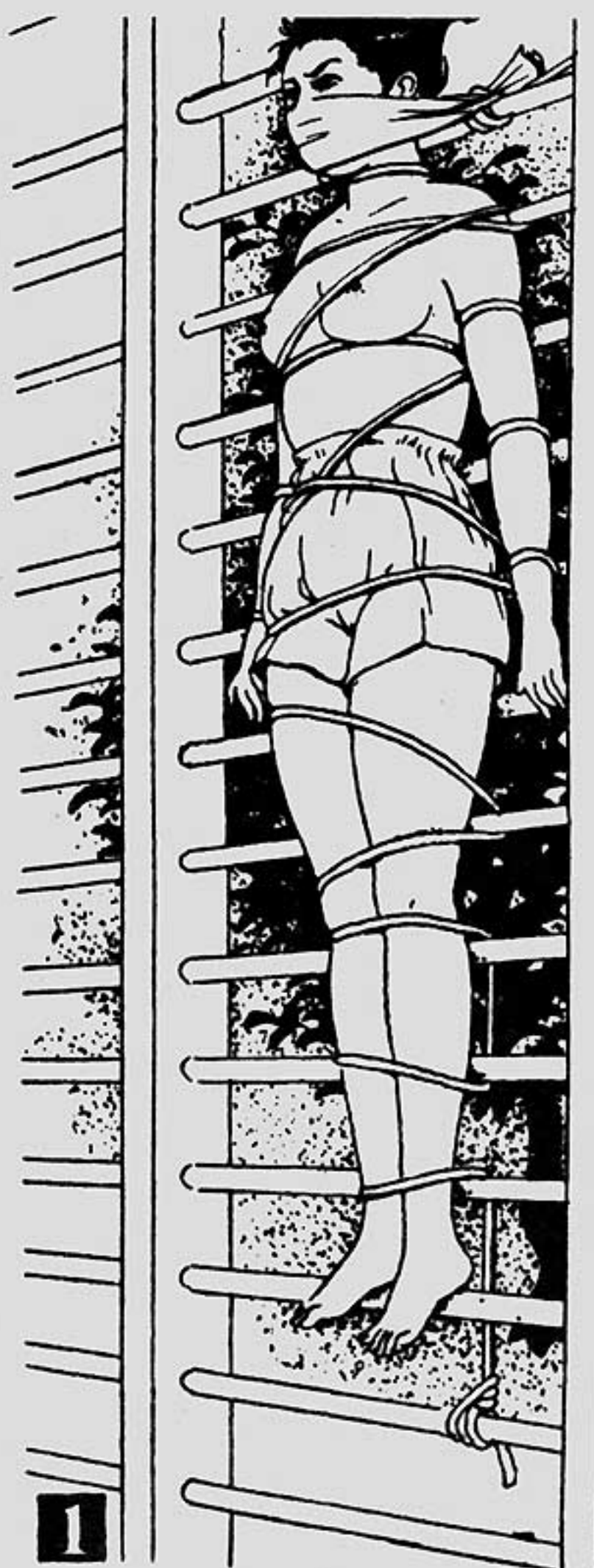
兇行現場における 死體寫眞

この写真は、十五、六年前にあつた靖国神社境内の殺人事件の現場写真であるが、腹部、及身体の前部に死斑を認めることが出来るから、この死体は俯伏せになつて殺害されたことが推定できる。

この事件はいまもつて迷宮のままだが、勿論被害者もこの誰だか判つていない。

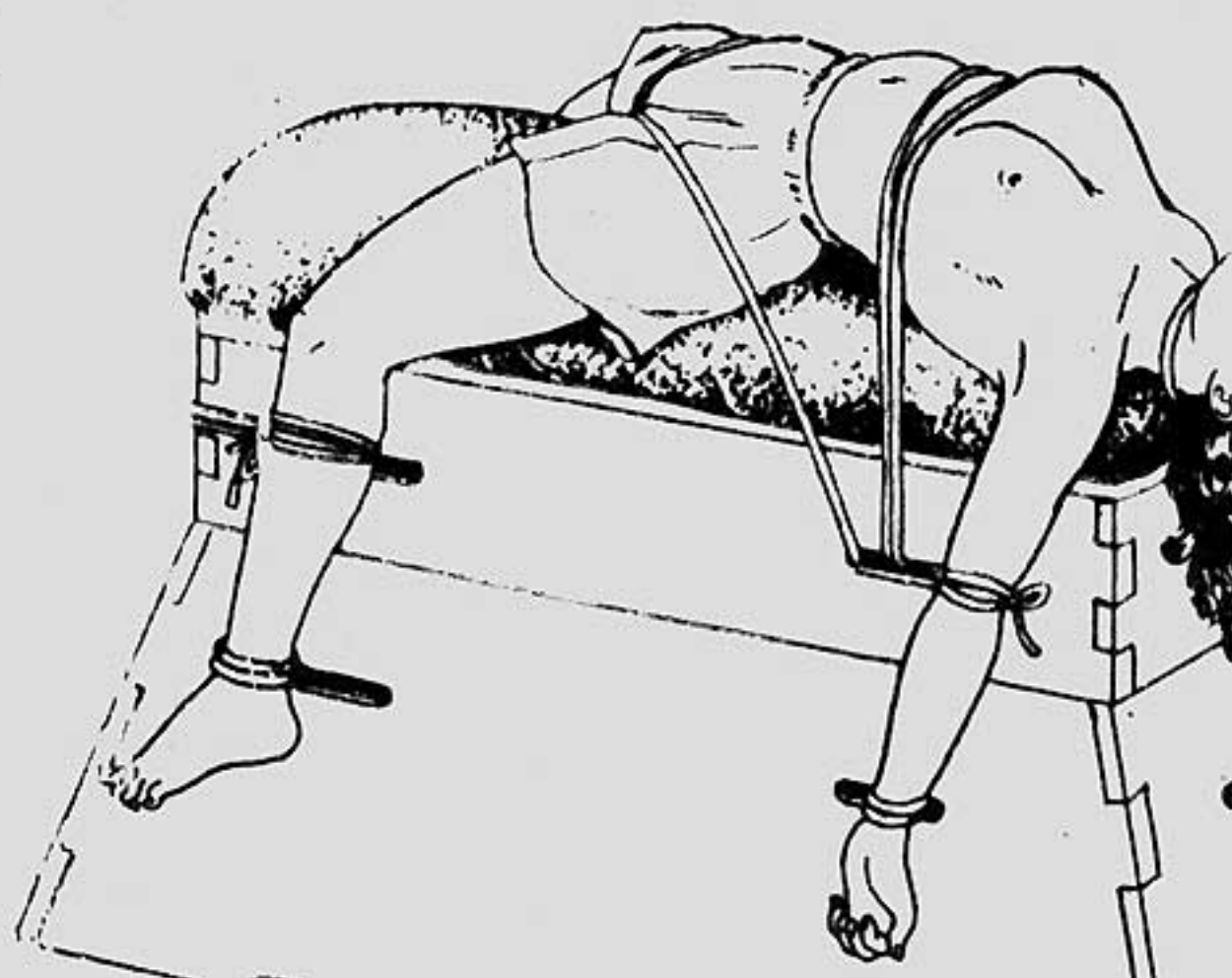
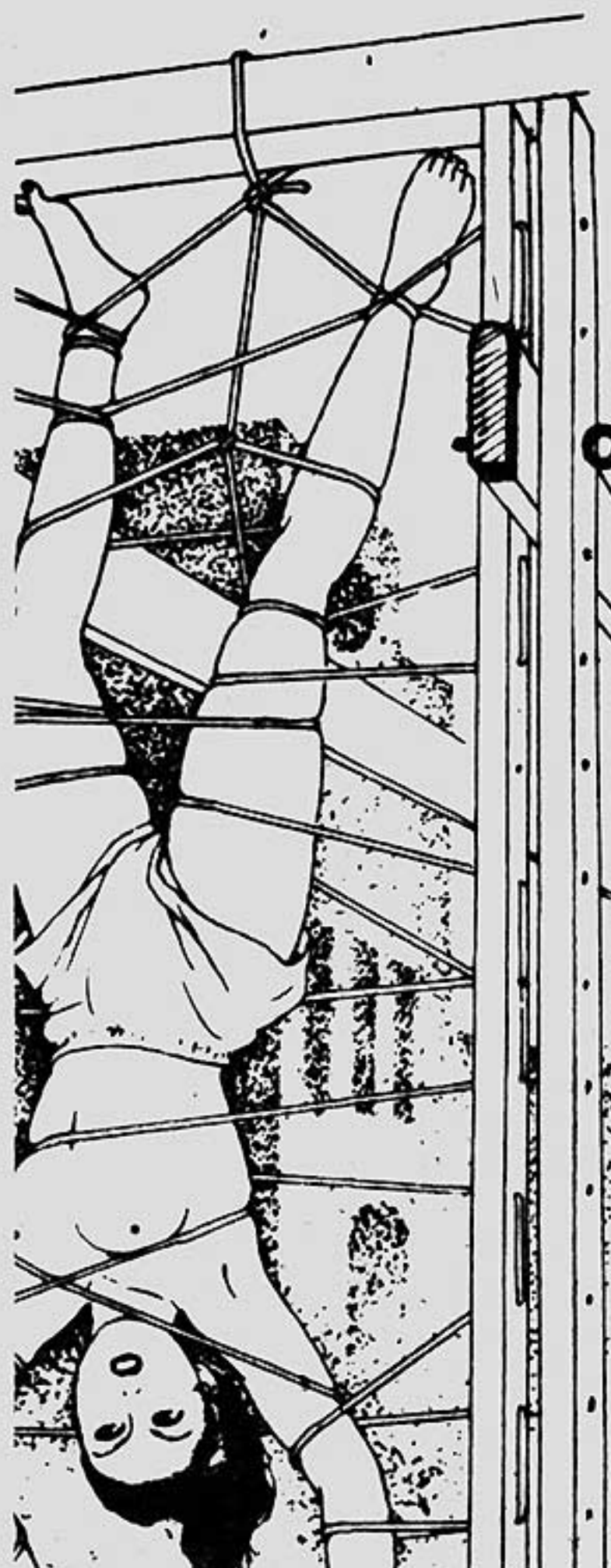
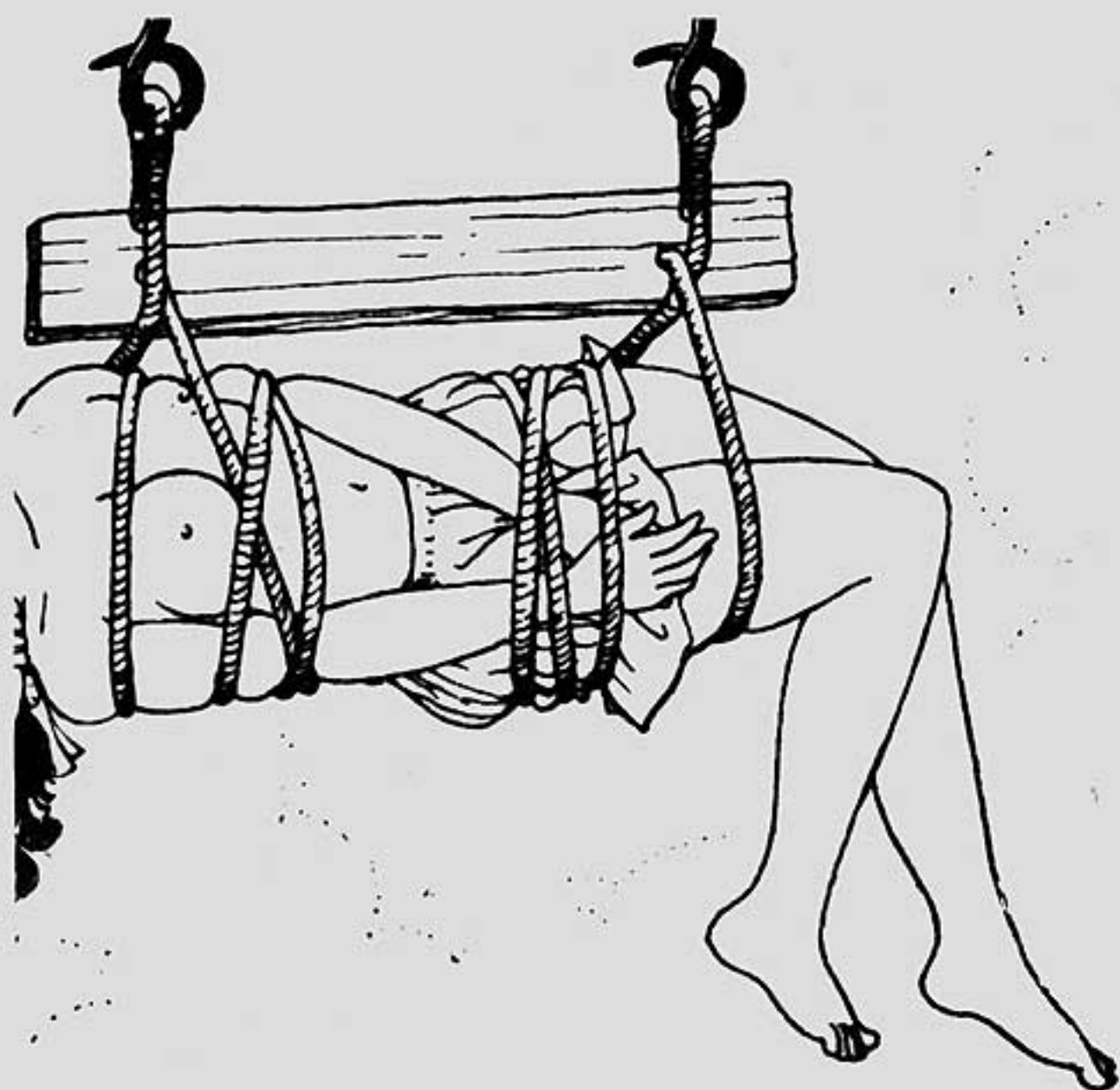
写真の死体が全裸であるのは、勿論外傷の有無の証拠写真を撮影するために裸にしてあるのだが本事件の場合は、実は被害者は、裸の上に、被害者のものらしい着物で覆われていたのを発見されたのである。

つまり犯人は、現場以外の場所で被害者を絞殺し、裸にして、紐で縛つて現場まで運び遺棄したことが推定された。

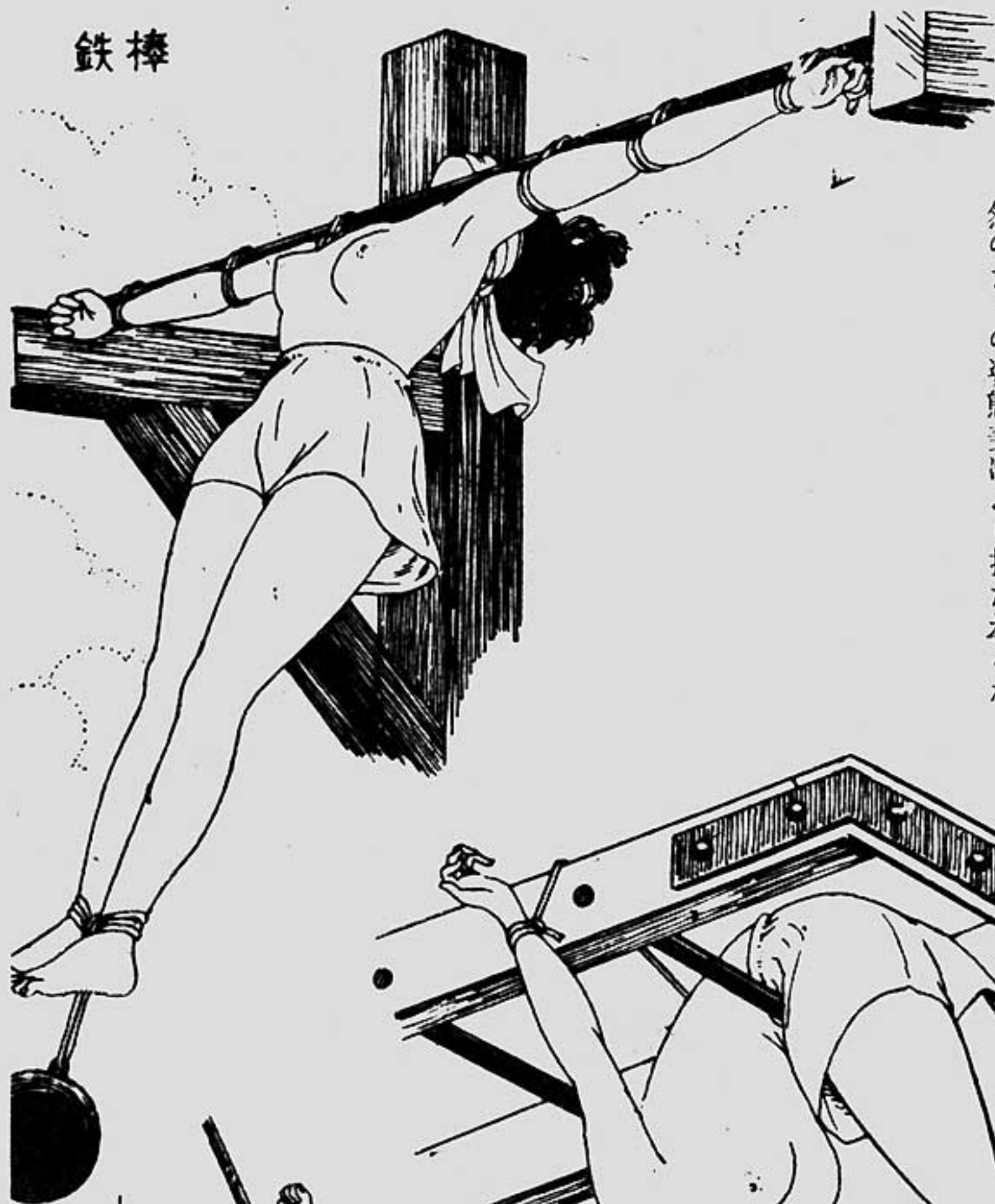


縄について

責絵には縄が重要な役目をつとめています。そ



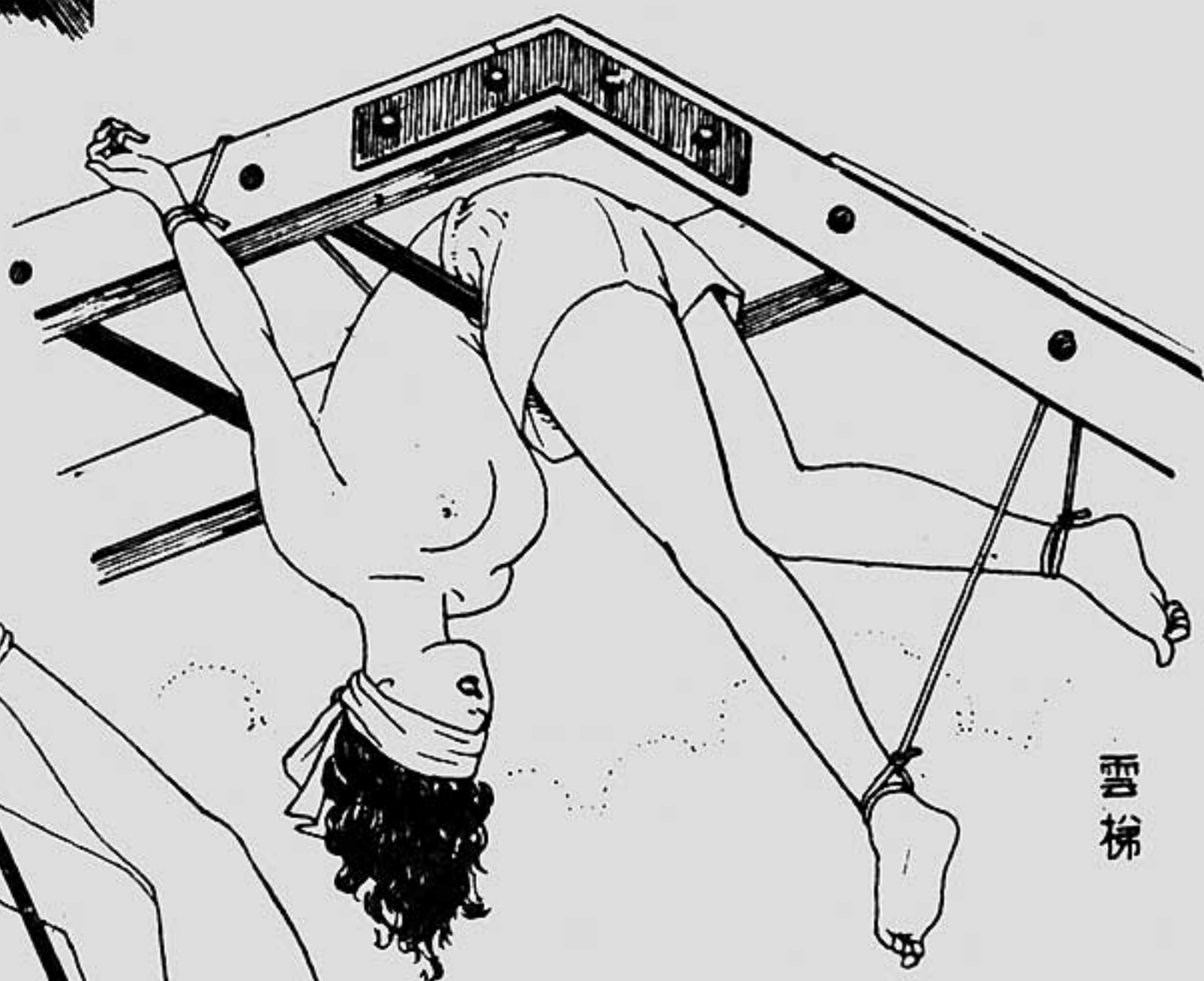
鉄棒



して遂には責める人が消えてしまつて被縛と縄だけが画材となり、更に縄が主役とさえなつて参ります。奇譚クラブの読者諸子にはこうした縄の演技にこよない愛着を感じて居られる方々が非常に多いと思います。

処で、私は今迄意識的に縄に抵抗して参りました。それは私が縄による美しさよりも自然のまゝの姿態美により打たれるか

雲梯



らなのです。でも今月は一つ縄をふんだんに使つて緊縛愛好家の御批判をお願いする事にいたしました。皆様の御教示を頂ければ幸甚に存じます。

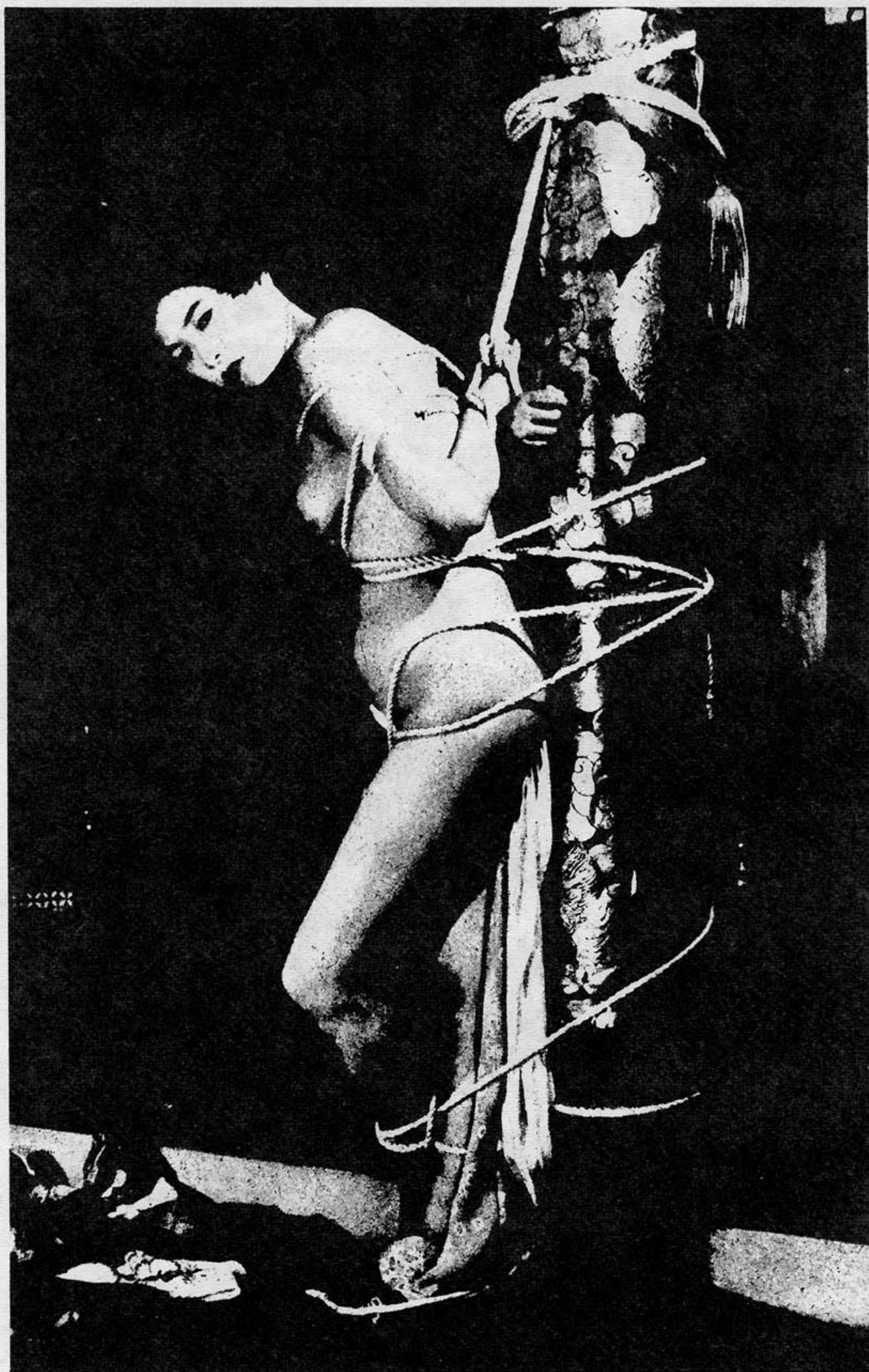
燦々と降りそぐ初夏の陽光の下、のびのびと肝体をきたえる体操道具をテーマにして苦い乙女の素肌を画くのはたのしい限りです

遊動円木





華麗な無惨繪

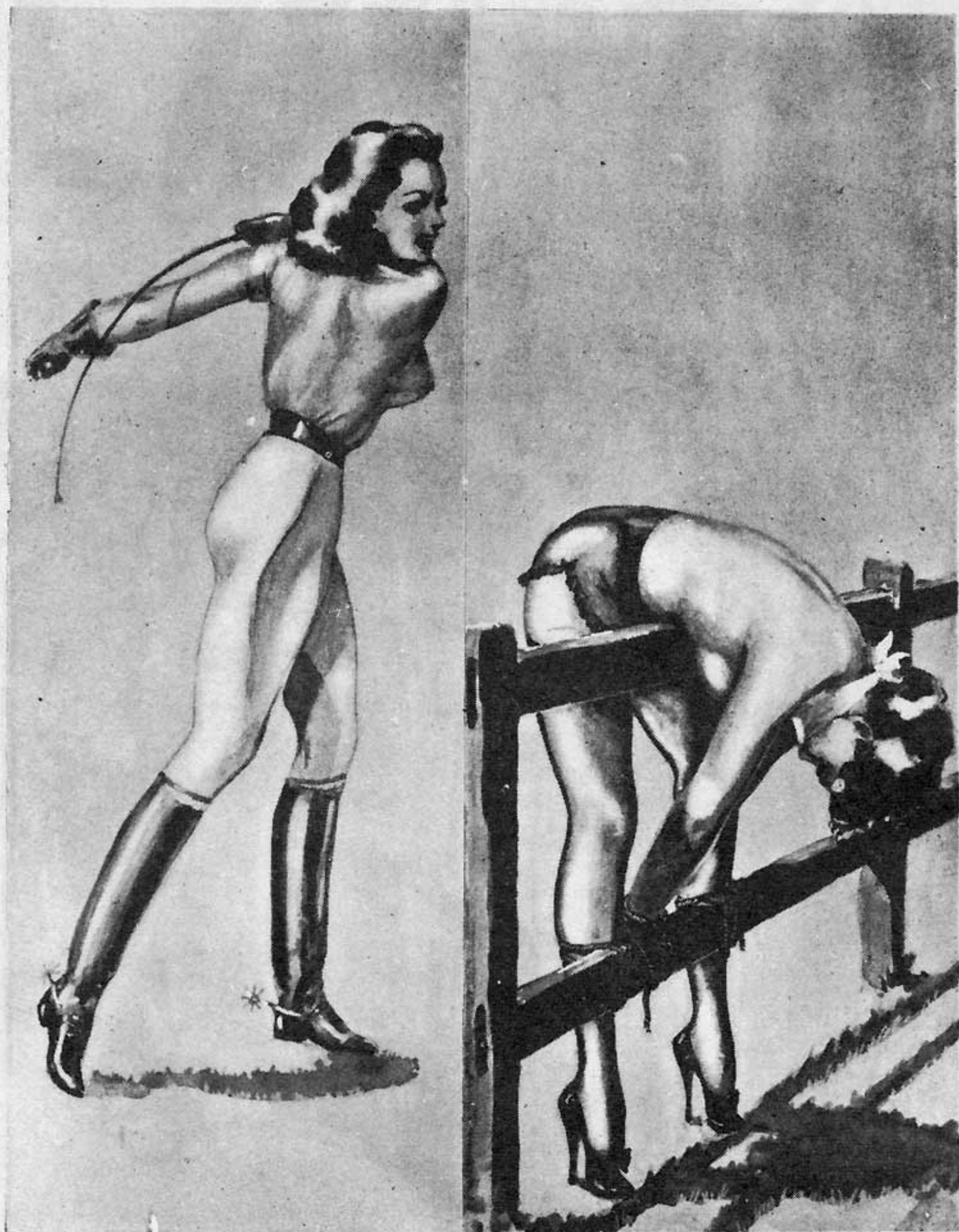




変態 臀 打ち・大画集

アメリカ女性のサヂズム

現代アメリカの変態風俗を紹介する資料は殆どない。本誌は特に在米の愛読者と緊密な連絡をとり、今後ドシドシこの種の資料の紹介に努めるつもりである。この絵は白人の女主人が女中らしい黒人の女を折檻する、代表的な“臀打ち”である。





↑ ピシッピシッと鞭が振りおろされる度に、薄いパンタロンの下、よく発達した娘の臀が、悲鳴といつしよにモクモク、モクモクと蠢動する。厳めしい教師の顔にもやがてサヂズムの歎びがギラギラ浮んで来る……………



→ オールドミス教師はしつけが厳しい。一寸した事で娘のスロースをおろして尻を打つ。その度に彼女は欲情するのだ。

西洋のムチ打は、女家庭教師と生徒、女子寄宿舎生徒、僧侶と尼僧をあつかつたものが多い。文学も絵画も、たいていこれをモチーフにしている。

上図は「公開のムチ打ち」と題するもので、女学生を教師が打っているもの。あきらかに、男たちは、懲罰をはなれて、娘の尻を打つのを楽しんでいる光景。

下図は、女教師が、生徒のお尻を平手打ちにしているところ。こういうのは、打つほうも打たれるほうも、じつは嬉しいがつて※



←
ポツテリと肉付のい、小間使を裸にむいて、その白のように豊かな臀を、女主人は容赦なく打つ。原因は嫉妬とサチズムに、同性愛がまじっている。

※いる。この絵は、打たれている女生徒が、先生の脚のあいだに顔を入れて何をしているのであろうか？
思春期の若い娘は、ふくらんで行く乳房やお尻、じぶんの肉体を見せびらかしたい。しかし、見られることは怖い。そこに快樂があり、お尻は、羞恥と誇りの焦点である。
偽善的な、教師とか僧侶は、その焦点のお尻に、欲望の発散を求める。



←
これも女学生を折檻するオールドミスの教師。哀願するのもしき入れず、彼女の手は素早く動いてズロースをずりおろす。ウブ毛の光る可愛い、しかも女になり切った生徒のお臀に教師の嫉妬と憎悪に満ちた眼が光る……

母の折檻。若い娘の尻は年上の女の嫉妬の的となる。



責めの惨酷さは、東西同じである。若い娘を身動き出来ぬように縛りあげて、美しい乳房をいたぶり、形のいいお臀を鞭打つのがサチストの永遠の夢なのである。



↓アメリカのマゾ女性を諷刺したカリカチュア。





教師ともなれば威厳をつぐろつて固苦しい生活をせねばならない。そこで彼等は微罰に名を借りて、生徒のお臀を打つては秘かにその性慾やサチズムを満足させる。これは、その実例写真で遅刻して来た生徒の臀打ちだが、この豊満なお臀を見ては誰しも一寸、叩いて見たくなろうというものである。

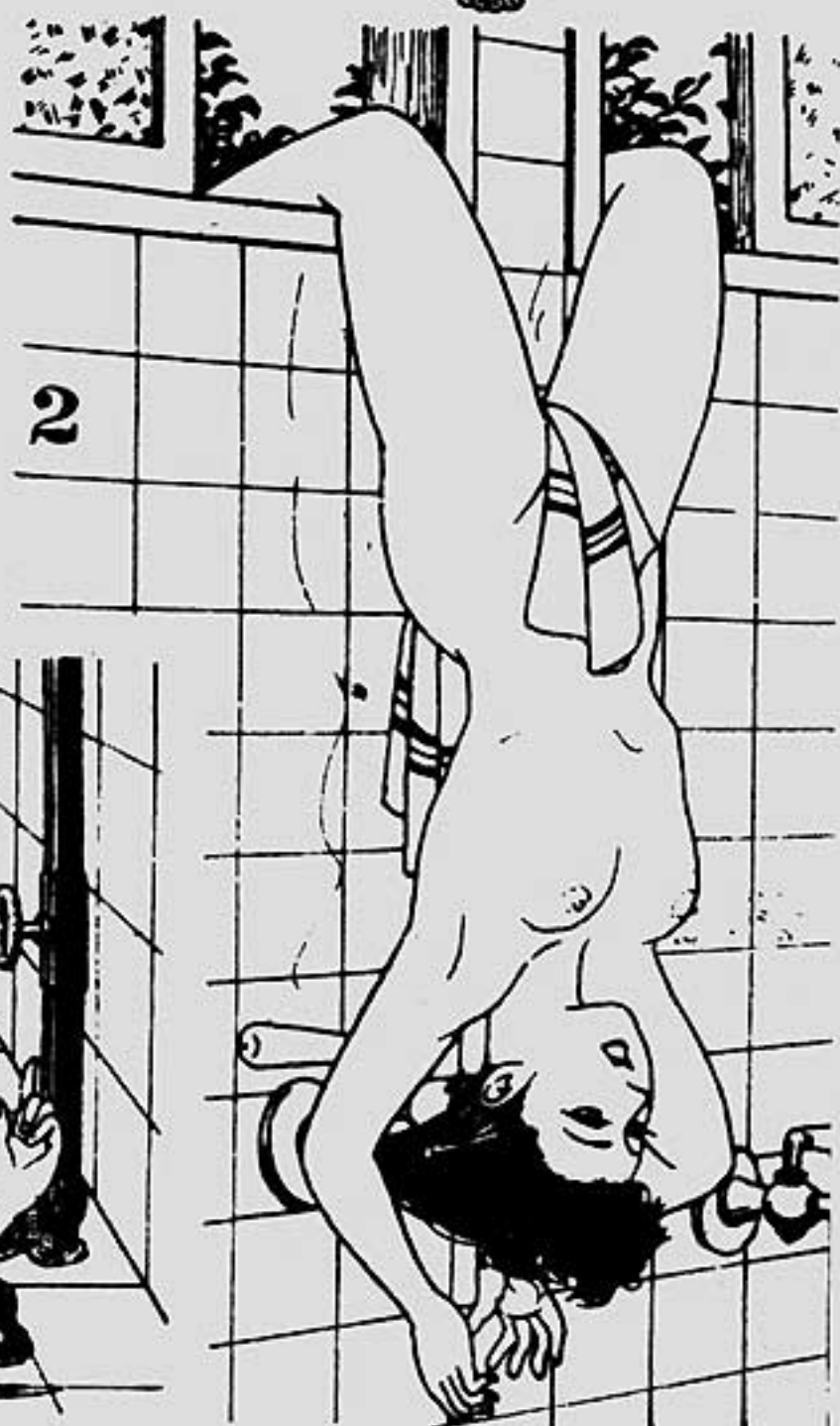


3

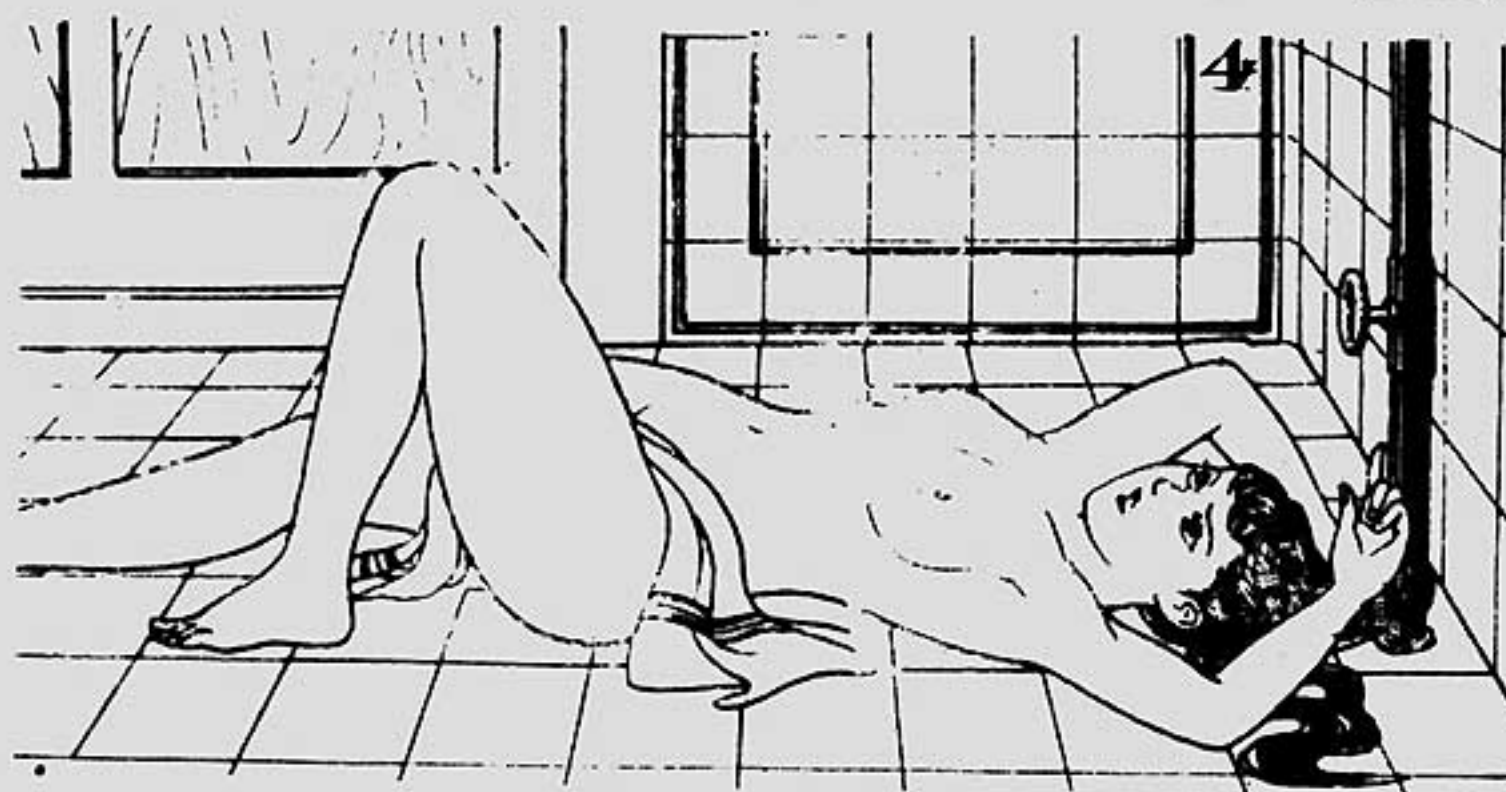


1

黒髪



2



4

縛る目的は三種あると思います。即ち
 一、責めの目的で縛るもの、これはあらゆる縛り方が考えられます。たとえば雁字搦めにして身動きも出来ないものから、唯一本の縄で腹部を蜂の様にしめて手足は自由にしておくといったもので、およそ苦しめる事の出来ることなら何でもよい訳です。
 二、他に目的があつて縛るもの、つまり単に逃亡を防ぐとか、抵抗を封ずるといった程度の縛りで、これは手首や足首を縛るだけで足ります。
 三、マゾヒストを縛る場合、大体一に準じます。



さて、これ等を絵に書くとき、それぞれに応じた表情が必要ですが、いずれも苦悶の気持が現れていなければなりません。たとえ縛られる事を楽しんでる人であつても、苦しくない様な縛り方ではよろこびは味わえないでしょう。ところで、こゝに掲げた絵は前記のどれにも当りません。無風流な縄を使わないで、女なら誰でも持つてゐる艶やかな黒髪を使つたたのしいお湯殿の遊びです。いずれも楽しそうです。その表情を声にして見たら

① いやん、こんなの ② もう下して、落ちそうよ ③ 足が抜けそうで抜けないわ ④ どこで結んだの？ ⑤ 毛がもつれてるのよ ⑥ わあッ たすけて ⑦ 意地わる、足つき取つてよう 首が抜けるわ ⑧ 着物が着られないわ

といった処でしょう。



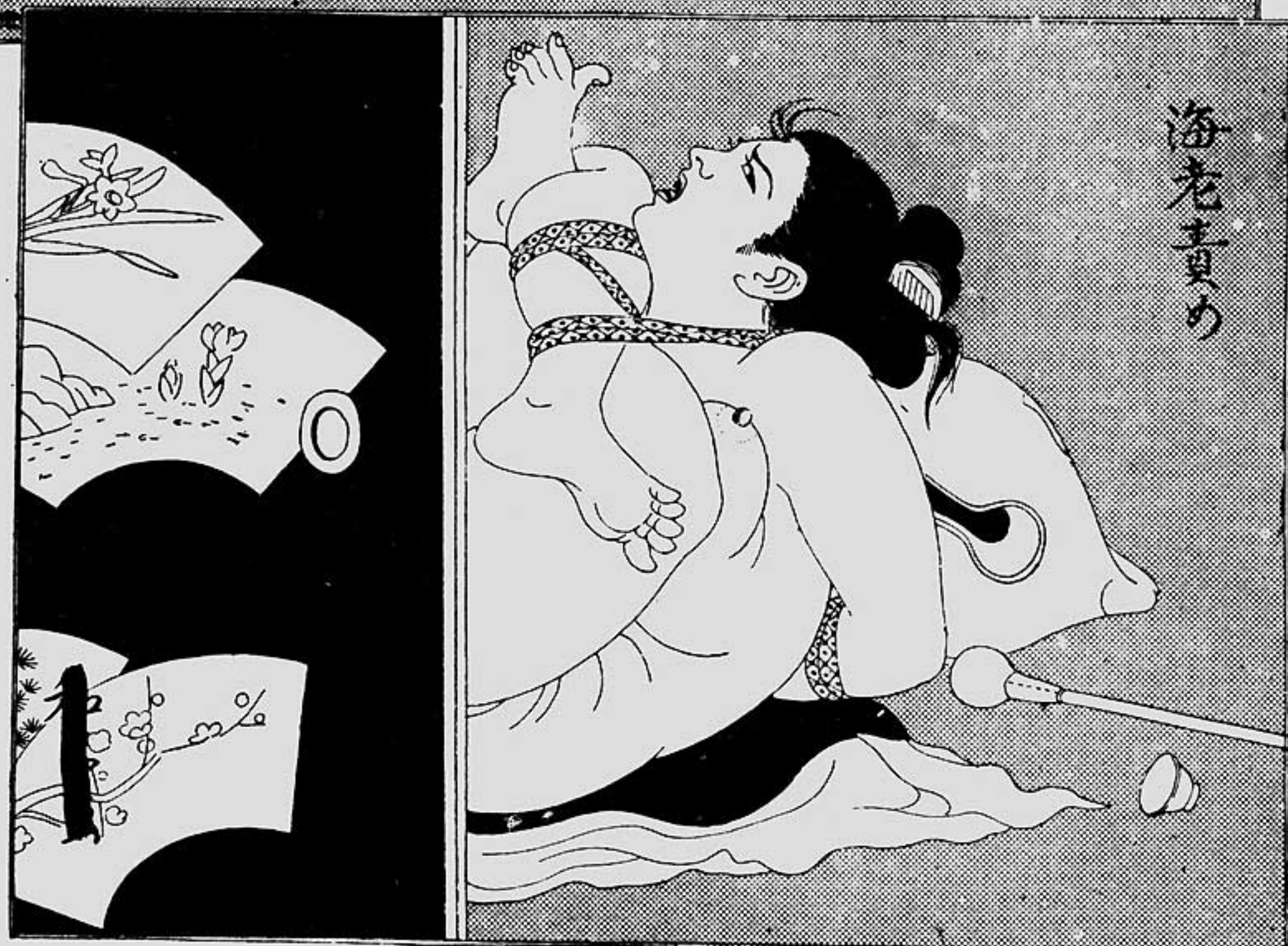
SUK.



Suk.



SUK.



くすぐり責め

麻理がアルバムを見えています。ソツと
うしろから鉛筆でいたずらをしてやりま
した。すると、くるりとこちらを向
いて「ちつともくすぐったくない。
あたしお妾の子だから。」と挑戦し



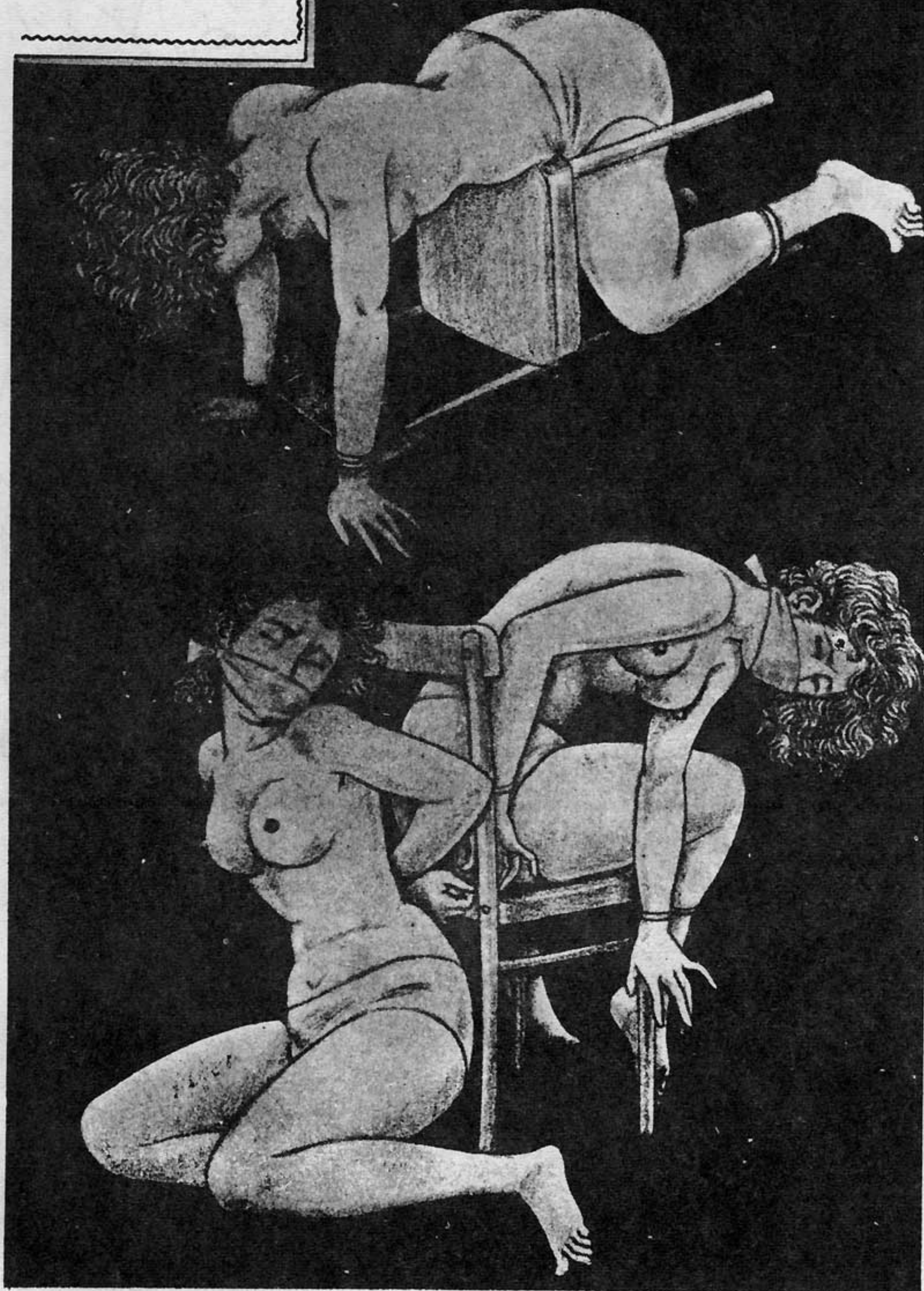
て来ました。「じゃ、これは」と咽喉を
くすぐつてやると、今にも笑い出しそう
な顔をこらえています。「よしッ」とば
かり本格的くすぐり責め、「わあッ」と
今更らあわてゝもう駄目、羽根、髻、
パン切りナイフから孫の手まで総動員。
笑つて笑つて転がり廻つてもがいてとう
とう泣き出してしまいました。ほうり出
されてフーッと青息といき、「どうだ。



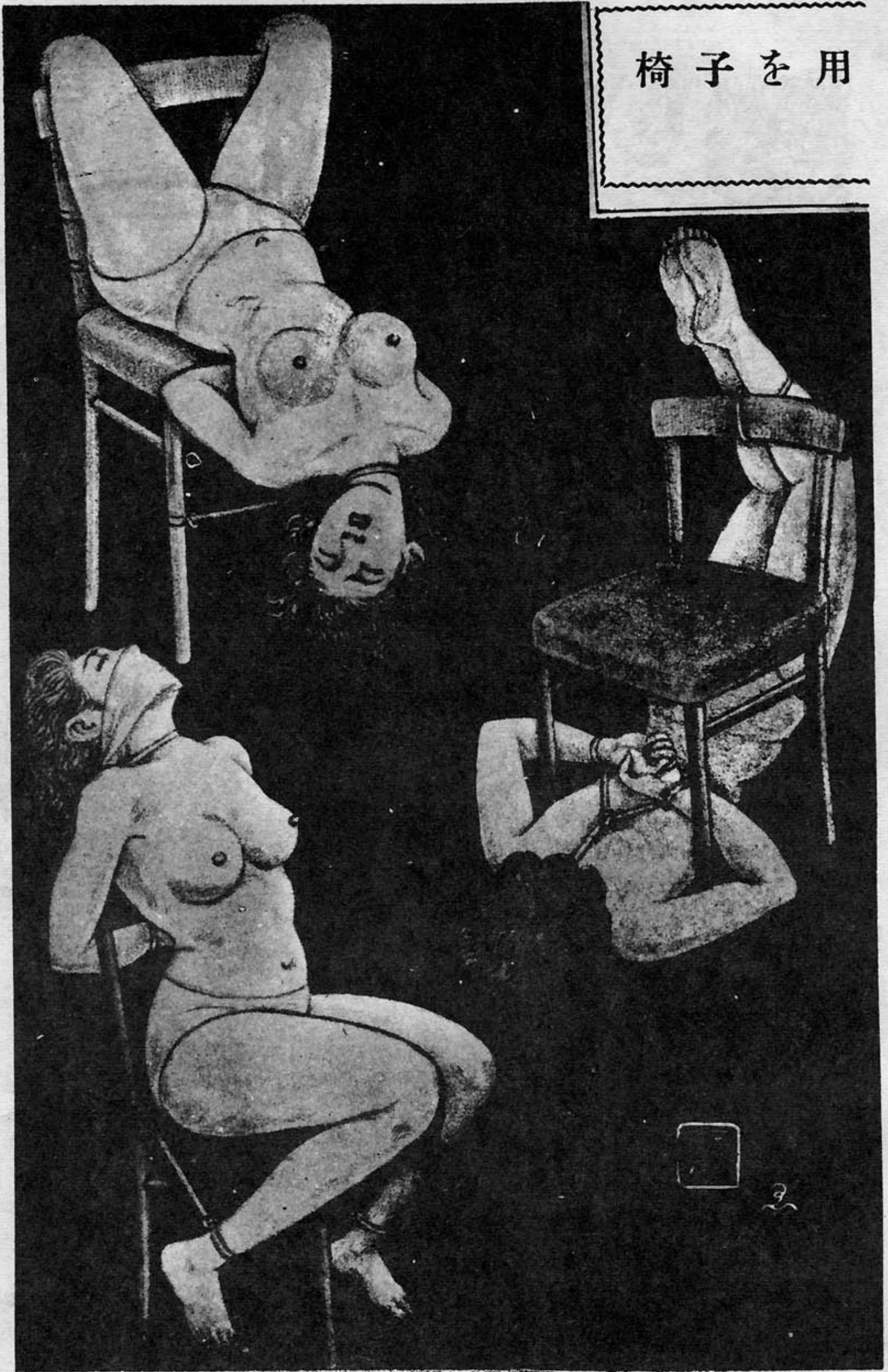


降参か」といってももう伸びてしまつて
声も出ません。肩で息をしながら畳をパ
タパタパタと三つ、手首だけ動かして叩
きました。

いた 縛り



椅子を用



斬首

肉親、財産、着衣と貞操
すべてを失った少女は更
に生命をも断たれぬばな
らなかつた。彼女の屍体
を棄てる孔が一隅に口を
開いて待ち受けている。



SUK.

間諜銃殺

嚴重な身体検査を受けた美しいスパイは羞恥も恐怖も超えて従容と死をみつめている。女士官はその断末魔の姿を冷酷なカメラに捕えんとしている。



火 焙

佛蘭西の
ジャンヌ
ダルクは
灰になるま
で焼き続けら
れたが我國の火刑は
息絶えると共に所刑を
終る。そして鼻か乳房
を焼いて止めとする。



Suk.

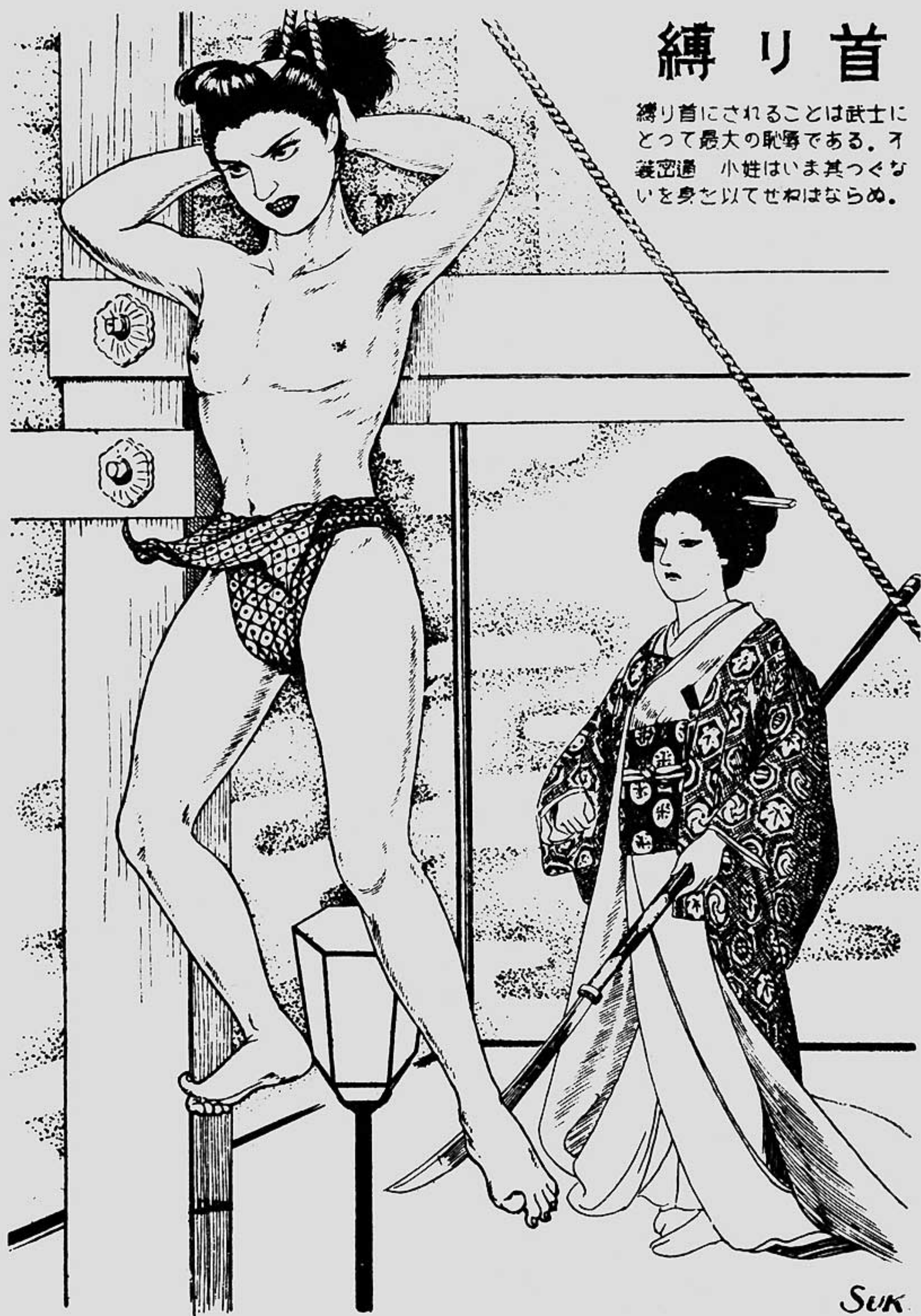
火 焙

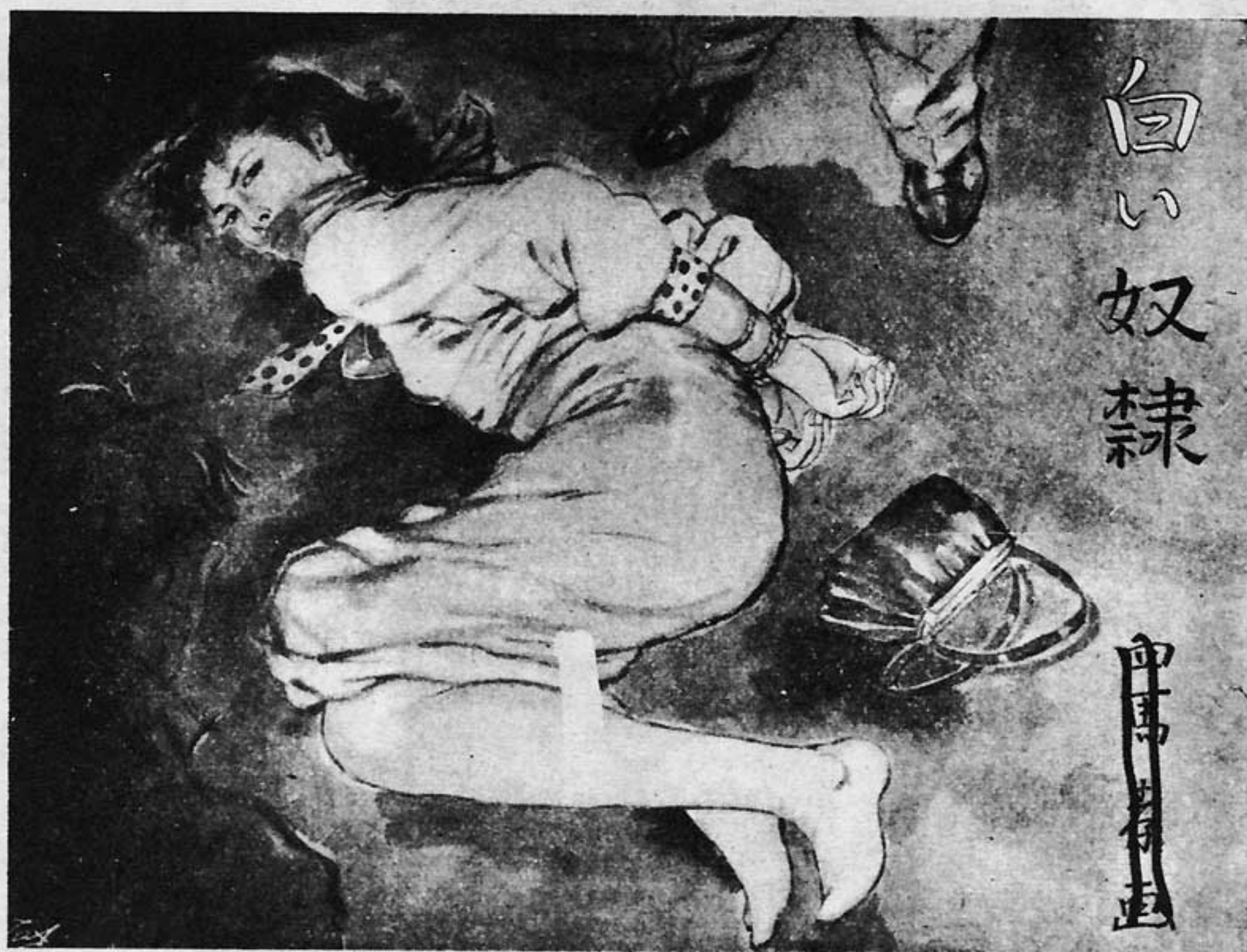
放火の罪を犯した乙女は白紙の
元結、油紙の湯文字、蓬華と塔
澤と珠数に縛しめられて自らの
身を焦熱地獄に焼き亡ぼした。
(原の於蘭に着想す)



縛り首

縛り首にされることは武士にとって最大の恥辱である。オ義密通 小姓はいま其つぐないを身を以てせねはならぬ。





白い奴隷

中野実



大都会の裏街、そこには普通人の思いも及ばない悪業と背徳のはびこっているカスバがある。十七の年、田舎から家出をしてきた緋左子は、駅前に網を張る彼等の手先に欺かれてビルの地下室へ連れ込まれた。泣き喚いて助けを乞う彼女は忽ちのうちに荒くれ男たちに取りかこまれ、よってたかつて後手に縛り上げられ、口には垢じみたタオルで猿くつわされてしまった。

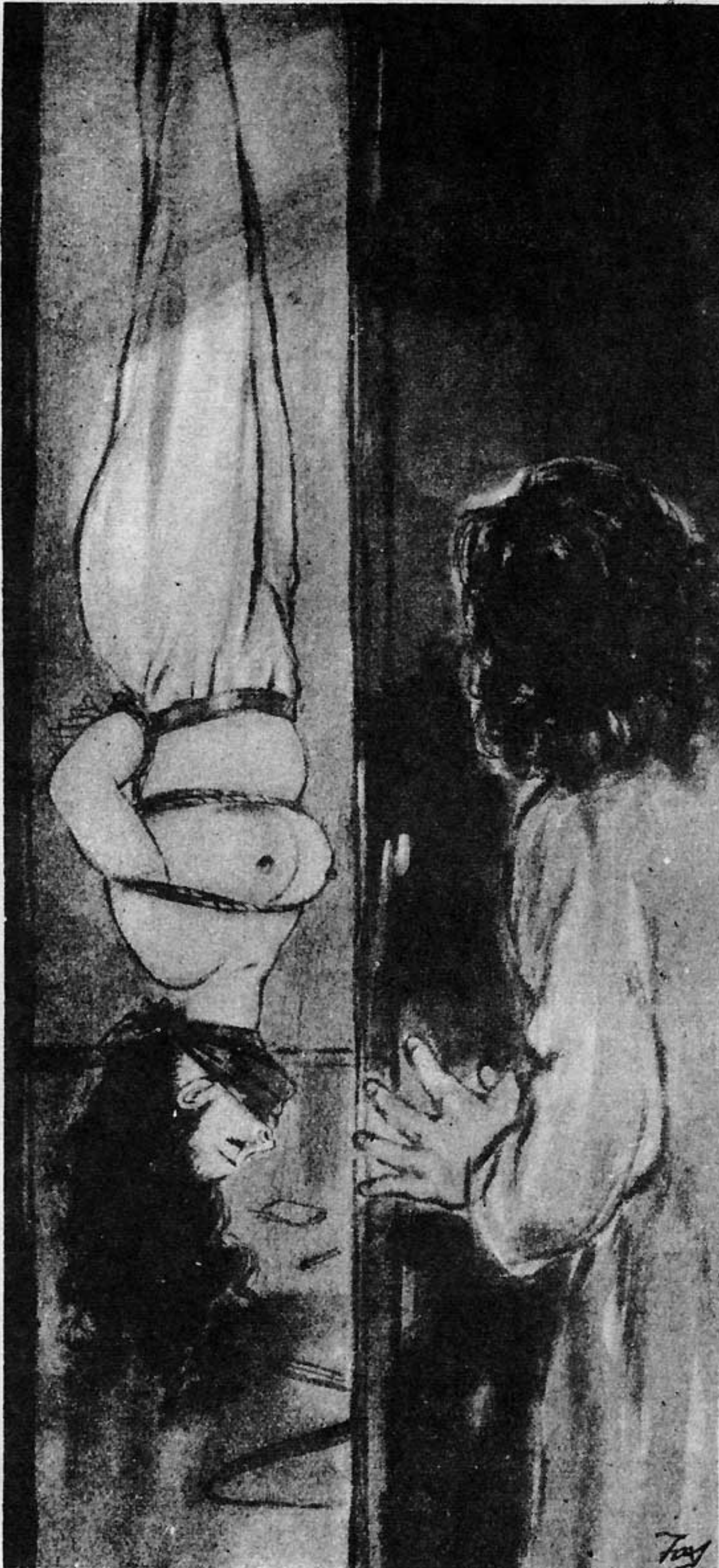
も早や叫ぶことも出来なくなつた彼女は、怨みの目差して彼等を睨んだまゝ、床の上どころがってぼちや／＼とした餅肌を墨を入れたら、いゝ売物になるぜ、男の一人が、緋左子のスカートをまくり上げて太股に手を当て、そういつた。日本娘の柔肌に彫つた刺青に大金を払う第三国人の好事家があつた。女の肉体に商品価値があるのは、昔も今も変りはなかつた。台の上につ伏せに四肢をひろげて縛りつけられた緋左子は腰部の皮膚に激痛を感じて、思わず猿くつわの下で、ううう／＼と呻めいた。青白い螢光燈の下で繰りひろげられる被虐図絵だった。

緋左子のほり込まれた部屋には、各地から誘拐された女、若い男に欺された女、家の為に自分から身を売った女、それに緋左子のように、家出をした宿無しの女などが、十人ばかり、皆一様におびえきつた表情で坐つていた。

彼等はこの女体商品を自分の思いのまゝに白い奴隷として仕込んだ上で、生娘は水揚げ

好みの助平爺に、肌のきれいな娘は背中一面に刺青を施して第三国人に。器用な女は、いろ／＼な芸を仕込んで、花電車、白白、或は白黒等の見世物に使う。妾に斡旋したり、醜業につかせたりさせるのは、まだいゝ方だった。強情を張つて思いのまゝにならない娘はさんざん彼等一味の玩具になった挙句、遠く香港あたりへ叩き売られるのだった。

そうして、強情娘が上玉であつたときは、彼等の憎しみもひどく、激しい拷問が加えられるのが常だった。十人の中、九人迄は自分の運命と諦めて彼等の言いなりになるのだったが、丁度その時、隣りの部屋で逆さ吊りの仕置を受けている娘は、良家の一人娘だったのが後妻にきた継母と仲たがいで、都会へ働く為に出てきて捕えられた娘だった。



「しぶといアマだ」こゝへ連れて来られて一週間、一向に従順に言うことをきかない娘に業をにやした彼等達は、あられもない逆さ吊りにしたが、娘は悲鳴さえ挙げなかった。それより扉のすき間から、この有様を眺めていた十人の娘たちの方が、おじけずいてしまうのだった。

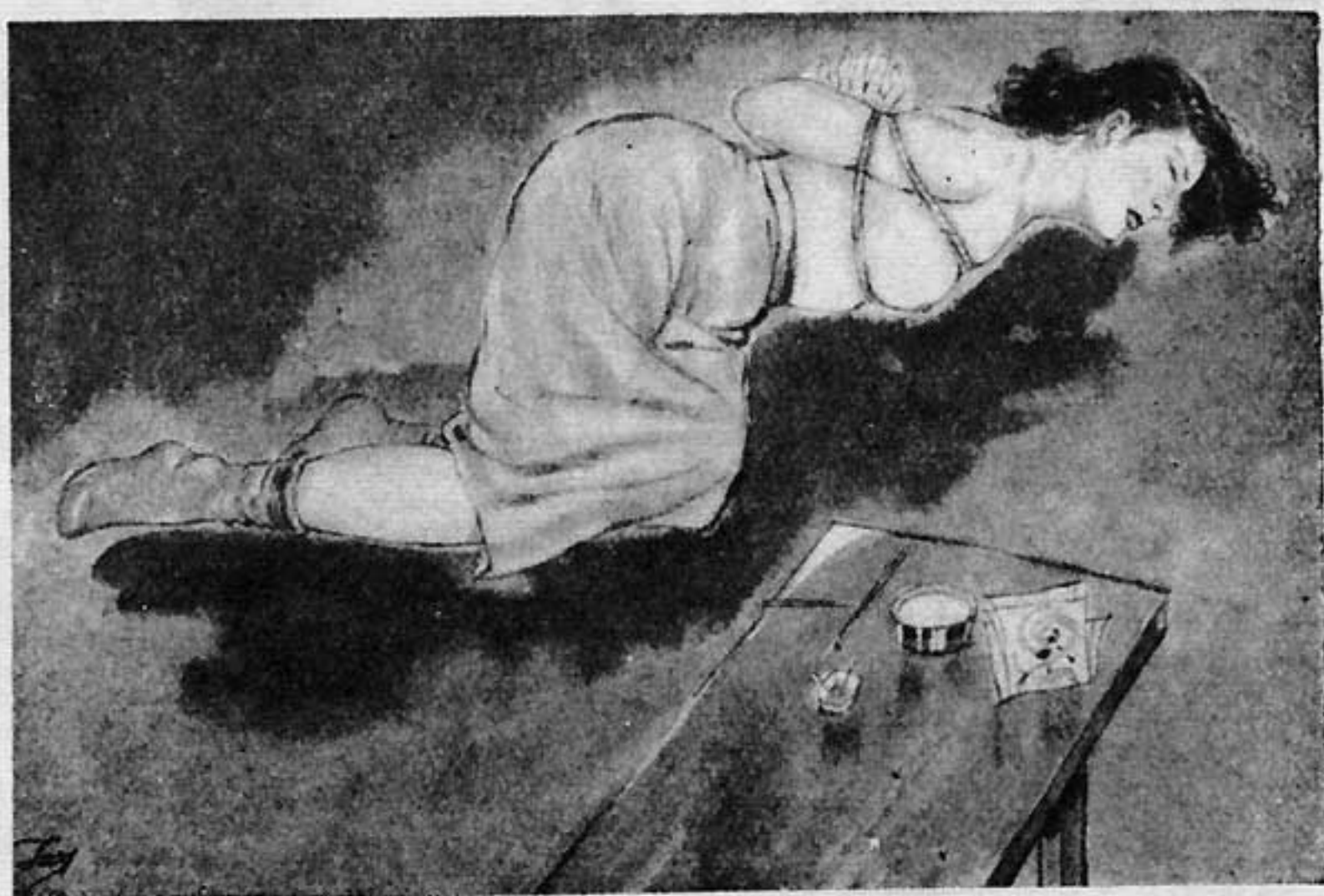
その翌日だった。呼び出された緋左子は、

最初刺青を入れられた部屋で二度目の刺青をされるのだった。汚れない乙女の肌にいま／＼しい刻印をされることは清純な彼女にとつては耐えられない事だった。それに、このような男達の沢山いる中で、裸になる屈辱にも耐えられなかった。「どうか、それだけは許して、外の事だったらどんな事でもきゝますから」と懇願したが、勿論、きゝ届ける彼等ではな

かった。

「一寸甘い顔を見せるとすぐつけ上がりやがる」いや応なしに上半身裸にされてしまった人一倍大きい乳房が両手でかくすひまもなく後にねじ上げられ

てしまった。「いや、いや、許して!」「おい縛り上げてしまおうか」用意の紐が両手首にまきついたが、緋左子は必死になって針を刺させまいともがいた。「これじゃ仕事にならねえ」男は手に注射器をとり上げた。二の腕にチクリとしたかと思うと、彼女は忽ち夢の世界へ転落していつてしまった。



見世物に使われる女二人が、縛られて連れてこられた。この娘たちは、自分から進んで身を売った女だったが、仕込み方が苦痛の多いやり方だけに、身動きならない

ように縛られるのが習慣だった。それが又、次第にこの二人をマゾに誘い込んでゆくのだった。白い肉体の奴隷に対する彼等のあくなき暴虐は、毎日／＼続けら



れた。売られゆく娘のあとには、何処から連れて来られるのか、水々しい肉体の娘がほり込まれてくるのだった。曲芸師に売られるという瘦せた小麦色の肌の娘の悲鳴が、いつか逆吊りのあった部屋から洩れてきた。その部屋ではパンツ一枚にされた娘が、手と足を一緒に二つ折りに縛り上げられて

まるでハンモックのように吊られていた。ムチを持った男が言うことをきかないと言って尻を打つのだった。緋左子は娘の悲鳴とムチの音をきくながら、自分も蛇の刺青を入れられてしまったのだからもう仕方がないわと諦めていた。

(おわり)



蜘蛛

蛛

が

らんとした、物置のような此の部屋のうす暗さに眼が慣れて来ると、貴美子は自分の傍にうずくまつている怪しい人影を見付けて危く声を出しそうになつた。だが、いつの間にはめられたものか、口には猿轡がかまされている、その上、荒縄で後手に縛り上げられているのだ。

「……、気が付いたようだね、貴美子さん。フ、」

そう云つて彼女の顔を覗き込みながら、すり寄つて来るのは、せむしの三公であつた。

「……何も、おいらはこんな手荒いこたあしたくねえンだが何しろ親分の云いつけなンでね お前さんの兄貴のことで親分は凄く気が立つてるンだ、素直に兄貴の居所を教えてくれりやア痛い目を見ずに済むんだが……」

三公は猿のような顔を歪めてにたにた笑いながらそう云つた。貴美子の兄の浩司が、土建業新井組の親分源三が囲つていた女と手に手をとつて逃げ出した爲に、妹の貴美子からその居所を訊き出そうと焦っているのだ。しかし彼女は兄の居所などを知る筈もなかつた、業をにやした源三は貴美子に眠り薬を飲まして自宅の物置まで三公に運ばせたのである。





お い貴美子、浩司の奴ア何処にかくれているんだ。俺の
 面に泥をひっかけやがつたあの野郎と由美の阿魔を探
 し出して、たつぷりお礼がしてえんだが、素直にしゃべつて
 しまわねえと痛い目を見るぜ。おめえが知らねえ筈はねえ」
 先刻事務所で貴美子を訊ねてきた言葉つきとはガラリと変
 つて、どてら姿の新井源三は眼を光らせて貴美子に迫つた。
 「そうだぜ、親分の云う通りだ。痛い目に逢わねえうちに早
 いとこしゃべつてしまつた方がいゝぜ。浩兄貴は由美さんを
 だまかして連れて逃げただけじゃあねえんだ、明日人夫に渡
 さなきやあならねえ十五万の金を行きかけの駄ちゃんにかつさ
 らつて行つたようなひでえ男だ、どうせ捕まるんだが、そ
 なつてからじゃあ遅いぜ、おめえの口から親分に頼んで詫び
 ごとの一つも云つて居所を明かすのが本筋じゃねえか」
 三公も伸びない背を不気味に曲げて、源三の尻馬に乗り貴
 美子に強要するのだつた。日頃から貴美子に身の程も知らず
 横恋慕していた三公は内心では何を考へているか知れたもの
 ではない。恋のかなわぬ意趣ばらし、案外貴美子が浩司の居
 所を知つていると源三にたきつけたのも此奴かもしれない。
 「……あ、あたし兄が何処に居るのか存じません……」
 何度訊いてもそう答える貴美子を強情な娘だと源三は責め
 にかゝつた。
 「おい、三吉、一度身體に訊いて見ようぜ、ビラを引んむい
 ておしやかにしてしまえッ」
 縛られた縄を解かれて逃げようとする貴美子に、源三と三
 公は狼のようにおどrikaゝつた。

悲

鳴を上げてても外に聞える事もない密閉された物置小屋の中で、貴美子はブラジャーとパンタロン一つの姿にされたまゝ悶えていた。逆さまに吊り上げられた足首に喰ひ込む荒縄の痛さ、そして後手に縛られた両腕が今にも折れそうなのがするのだ。

源三は貴美子のそんな姿を眺めながら、浩司と一緒にづらかつた由美の肉体を思い出していた。

（あんな由美などのような女に比べたら、此の貴美子はどうしてどうして、てえしたものだ。えへへ）

貴美子の悶え苦しむ姿を見ながら、源三はだんだん自分から逃げ出した由美の面影が薄れて行くのを感じている。今まで考へてもいなかつた貴美子に対する淫らな気持が頭を持ち上げて来るのだ。それは浩司と由美に対する怒りが矛先を變えて燃え上つたものかも知れない。

—あ——ッ ひい——ッ—

三公の突つき廻し叩きつける竹棒のあくどい責め方に、貴美子は髪をおどろに乱して冷たい床の上に身をくねらせた。「どうだ。これでも云わねえか、これでも……」

源三は何かに憑れたように口走りながら内心

では浩司の行方も由美のからだも、十五万円のこと、どうでもいい、

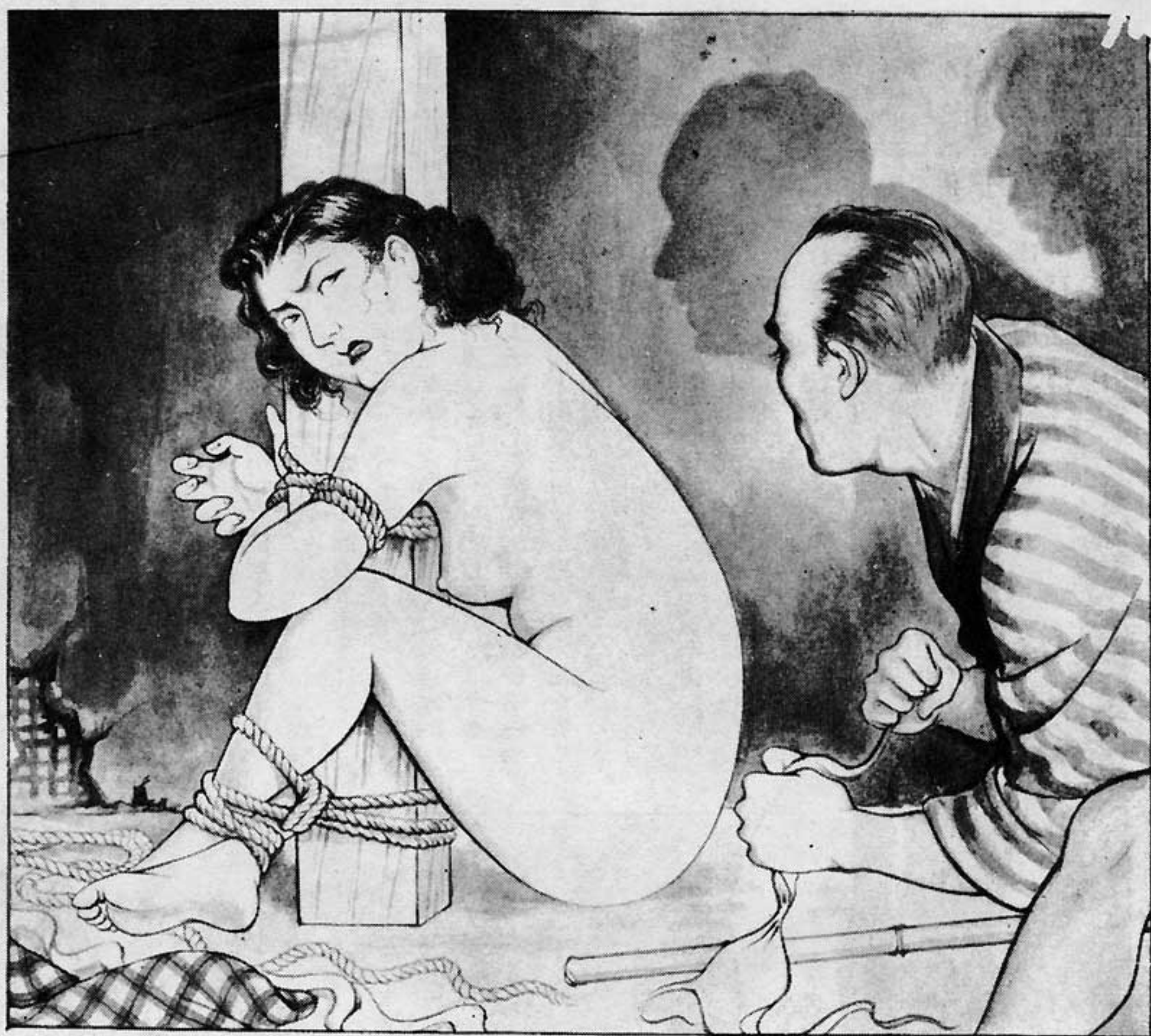
ような氣になつていた。

たゞ眼の前にあ

るものは貴美子

の肌だけだつた。





貴

美子は羞恥と恐怖と絶望に悶え続けた。

うすぐらい物置小屋の中にも、その裸身は白く純のよう輝き、苦痛と羞恥にタラタラと流す脂汗が処女の肌からえも云われぬ香りを部屋の中に発散させて源三と三公の鼻腔を擦るのだ。

「貴美子、強情を張らずに、浩司の居所を云ってしまつたらどうでえ……」

源三はまだそんなことを訊いている。それはもう、自分の慾望をかくす手段の一つの現われでしかなかった。

親分がそんな気持の変化を起していることを全然知らないせむしの三公は、たゞ此の機会に翻れる美女の肌の柔らかさに酔っているだけなのである。此奴には始めから浩司も女も金も頭の中にはない。

三公の爲に柱を抱いたような恰好に縛られた貴美子は、無慙にも一絲もまとつていなかった。くるくると独楽のように動き廻るせむしの姿は、あたかも犠牲を捕えた蜘蛛の姿であった。

「え、へへへ。親分こうすりやアどうでがす」

そう云つてジロジロと貴美子の肌を眺める三吉の眼に源三は火のような嫉妬を感じた。畜生！、此の女の肌を貴様等に自由に眺めさせてたまるか！ 源三はそんな気持になつていた。浩司も由美も何処にでも消えてしまえ！

「おい、三吉ッ貴様ア外に出てろ！」

俺は貴美子のからだから十五万円を取り返すのだと源三はそう心の中で独り決めにして三公をにらみつけていた。



米国家庭における夫の座

妻帯者が長生きするのは、チャンと一城の主となって、うちへ帰ってくつろげるからだそう。いや全く、たしかにくつろげます。御覧のとおり、それに奥様御手製の御料理という奴も戴ける！

(アメリカ雑誌LAFFより)

Married man lives longer 'cause his home's his castle, and he relaxes. Yeah, he sure does—like this! An' get that home-cooking!

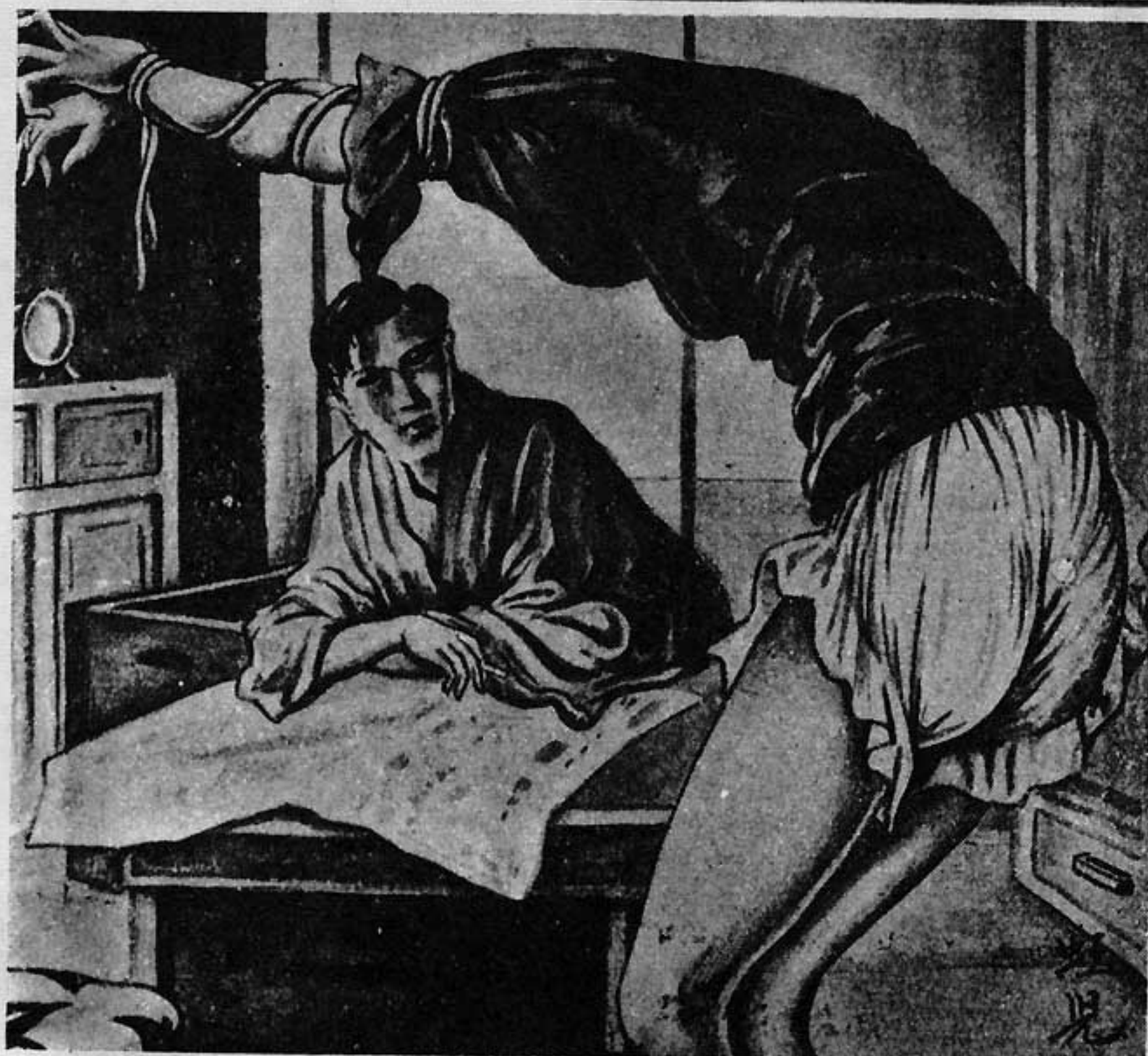




朝の出勤

(玄関にて)

シュミーズ一枚で後手に縛られて食事がすむと、夫の出勤です。口で靴は拭けますが、さて、これから？



夕食後のひととき

「さあ、着てごらん」セーターと一緒に両手を縛られては、着ることが出来ません。夫の嗜虐的な眼はどこに？

『裏切者』



何処へ行くのだろう、速力を早めた車はたつぷり一時間、暗い街並を走ると、やがて潮の香でそれと知れる海浜にそつた倉庫ばかり立ち並ぶ一廓で止つた。車を見送つた長谷は注意ぶかくあたりを見廻しながら、明子を背に、とある古びたコンクリートの建物の中へ入つた。恐らく彼以外誰も知らない隠れ家でもあるのだろう。さして広くはないがガラんとした中に、ちやんと祕密の地下室が出来ていた。コソ／＼と彼はゆっくりその階段を下りて行つた。

昨夜の出来事がまざ／＼と思ひ出された。誰も知らない筈の密輸の現場に手が入つた。そして彼は危ふくその場で捕まる所だつた。恐らく逃げのびたのは彼一人だつたに違いない。無我夢中で拳銃をぶつ発ちながら逃げのびた彼の頭に、その時、明子の美しい顔が、彼をあざ笑うかのように浮かんで消えた。——裏切者——まさかと思つたが、今日のこの事を事前に知つていたのは、自分の外は彼女だけだつた。冷静になつて考えれば考える程、彼の胸は怒りにふるえた。そういえば思ひあたるふしがないでもない此の頃の明子の態度——。ほん数時間程前、彼の事務所の東亜商事の三階建のビルの一室で、明子を連れだそうとした時、チラリと顔を見せた乾分の京次の顔も只事ではなかった。やっぱりそうだったのか、そう思うと、彼の冷たい心の底に気味悪い計画が無慈悲に頭をもたげてくるのだつた。



「明子、どうだい？気がついたか」

どの位の時間だったろうか、明子は夢からさめたように、あたりを見廻したがすぐ眼の前につつ立っている長谷を見ると、瞬間、さつと身を引こうとしたが、身体は思うように自由にはならなかった。

「フフムム、よくも俺を裏切ったナ、さんさん可愛がつてやつた恩も忘れてな」
「し、知りません、そんなこと——」

「馬鹿、この俺を盲だと思つてやがるのか、ちゃんと何もかも知っているんだ」

長谷は憎々しげに言いながら明子の見るも無惨に後手に縛り上げられてし片手を捉えた。彼女は逃れようと必死になつて争つた。二人の身体は、もみ合いながら、暫らく部屋の中をかけ廻つた。が、所詮は無駄な抵抗だつた。「フフフムム、こゝなら、どんなに騒荒々しくその場に引き倒された明子は、いだって二人つきりだ、心配するナ」着ているものまで次々にはぎとられてしまつた。力つきた彼女は、どうすることも出来ず、なすがまゝに、やがてへ押し入れた。がらんとした何も道具



の置いてない小部屋には、古びた材木た。彼は部屋の奥に立っている煤けたやら縄の切れ端が隅にたまっているだ柱に後手のまゝ明子を身動き出来ないけだった。

「裏切者はどうなるか判っているだろうな。まあ、お前のことだ、命まで取ろうとは言わねえよ、そのかわり、たっぷりと礼はさせて貰うからな」
長谷の冷たい心の底をよく知っている今迄溜っていた怒りが、せきを切っ

だけに、この仕打ちがたまらなく恐ろ



しかつた。彼が言った「裏切者」という言葉を聞いた時、彼女はハッと胸をつかれた。と同時に、京次の顔がすうと臉の奥をかすめた。長谷はゆっくり煙草に火をつけながら片頬を不気味にゆがませた。さつきまで何かに追われているような、いら／＼した気持も忘れて、さて、これからこの美しい獲物をどうしてやるか、と考えめぐらしている風であつた。

身動き出来ないように足首から頸まで、柱に雁字搦目に縛り上げられている白いけにえに長谷は近づいた。



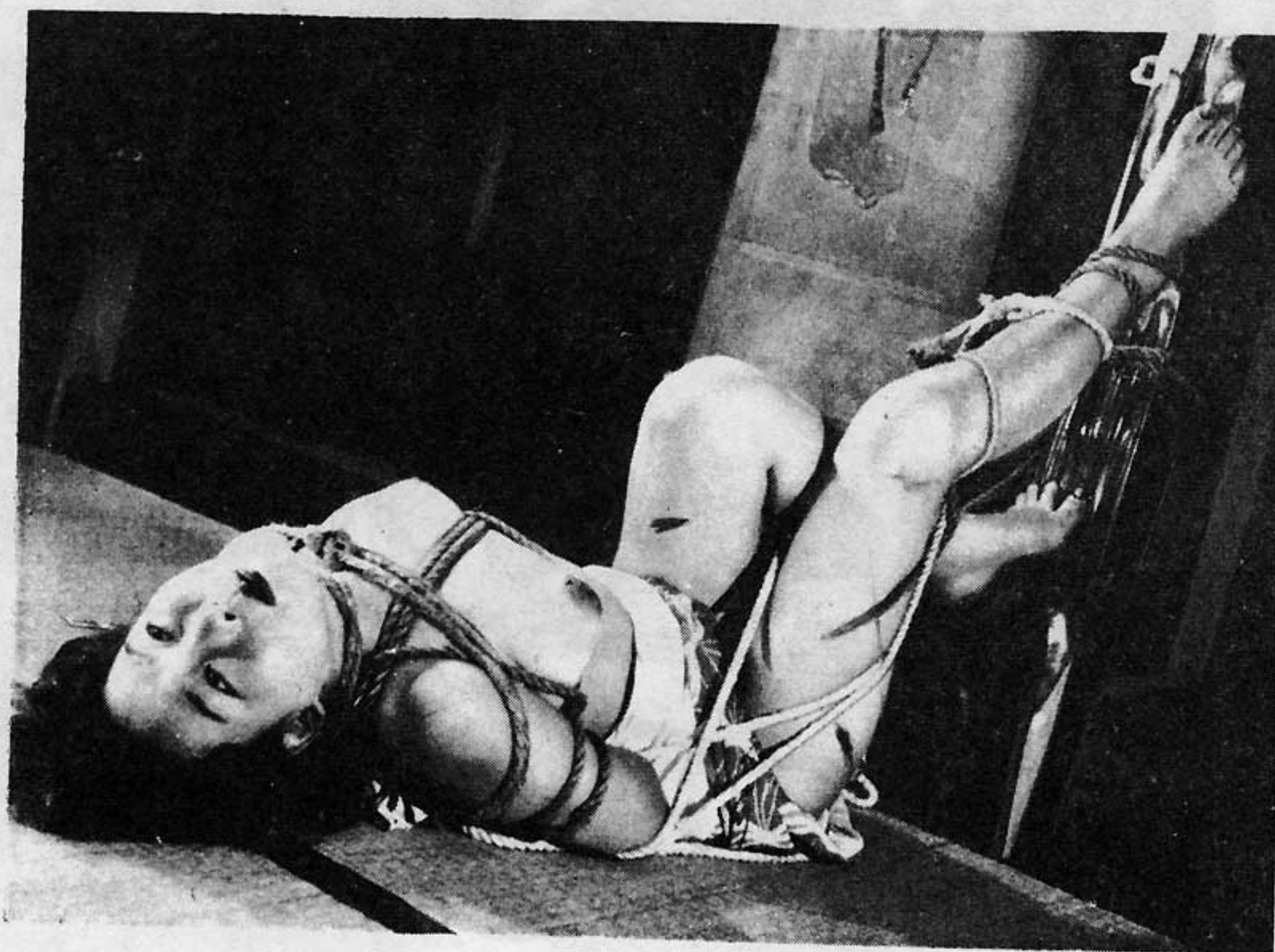
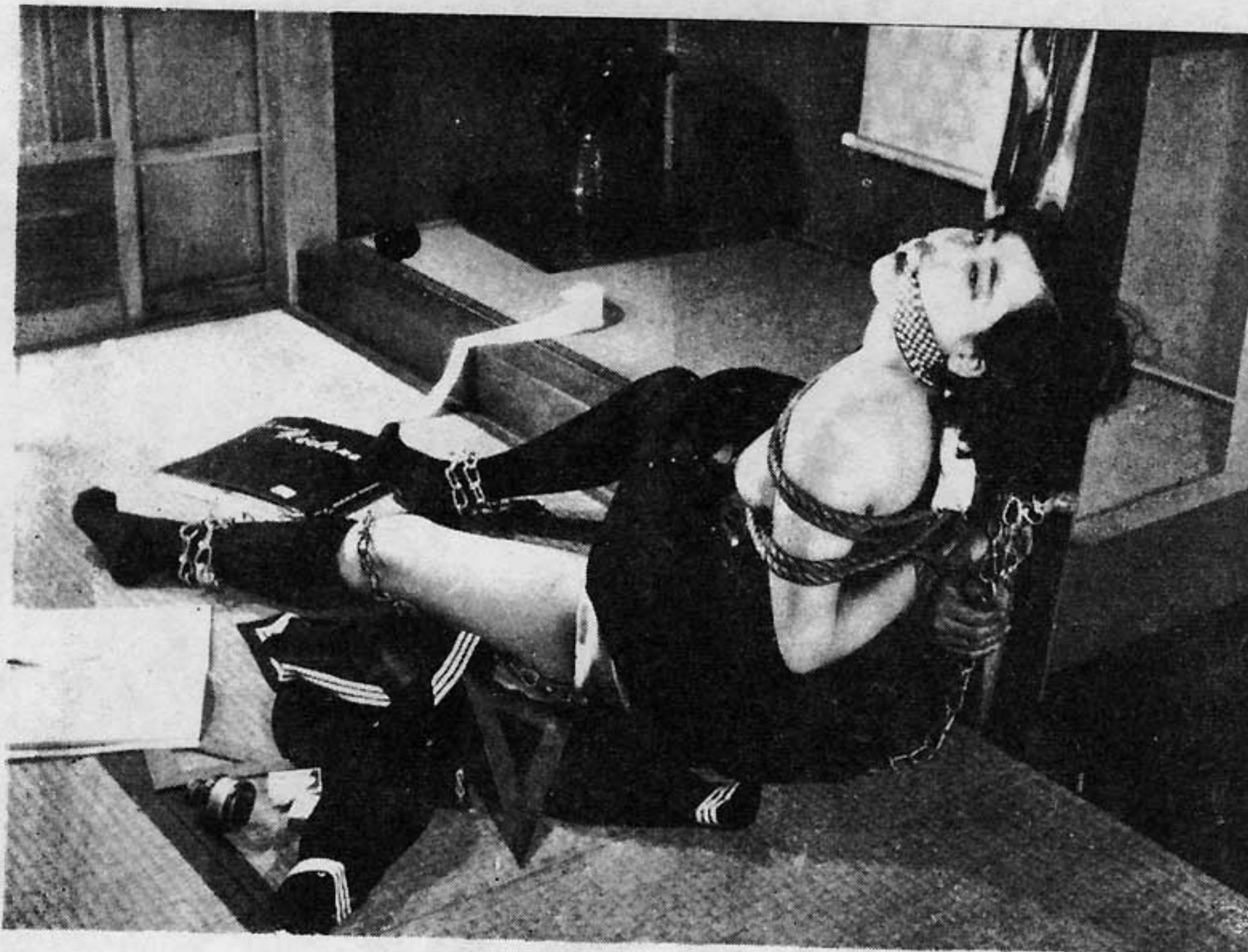
ズボンのふくらみへ動いた間一髪 到するであろう警官達に見せたく
京次の鉄拳が彼の左面で鳴った。 なかつた。京次は長谷を必殺のパ
二人の肉体は、にぶい音を立て、 ンチで倒すや、す早く、明子の縛
ぶつかり合った。組み合いながら しめを解いた。「京次さん」二人
京次は、見るも無惨に縛り上げら は、戸外に大勢の靴の音を聞きな
れた明子の姿をチラリと眺める心 がらひしと抱きあっていた。
の余裕を持っていた。間もなく殺
(おわり)

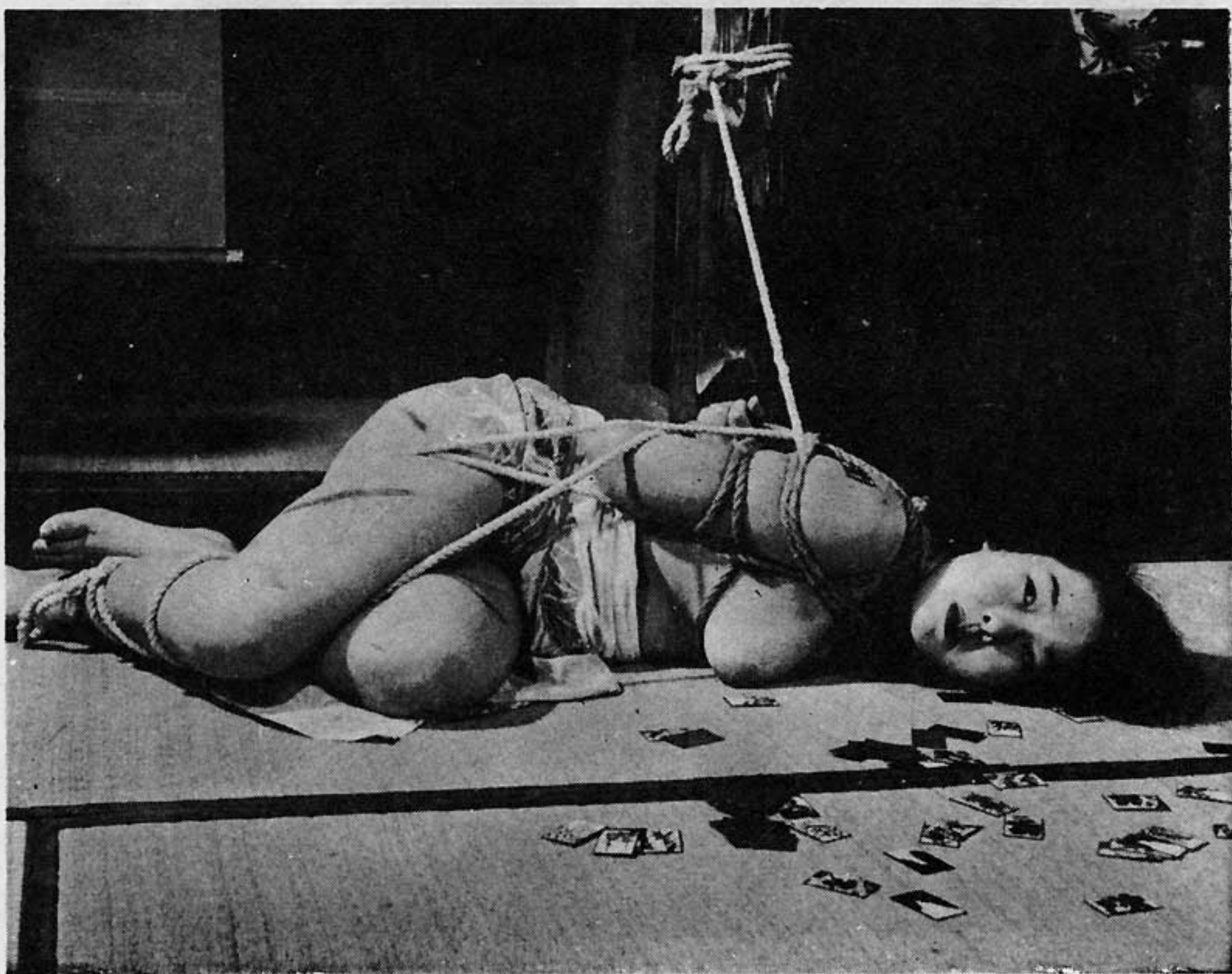
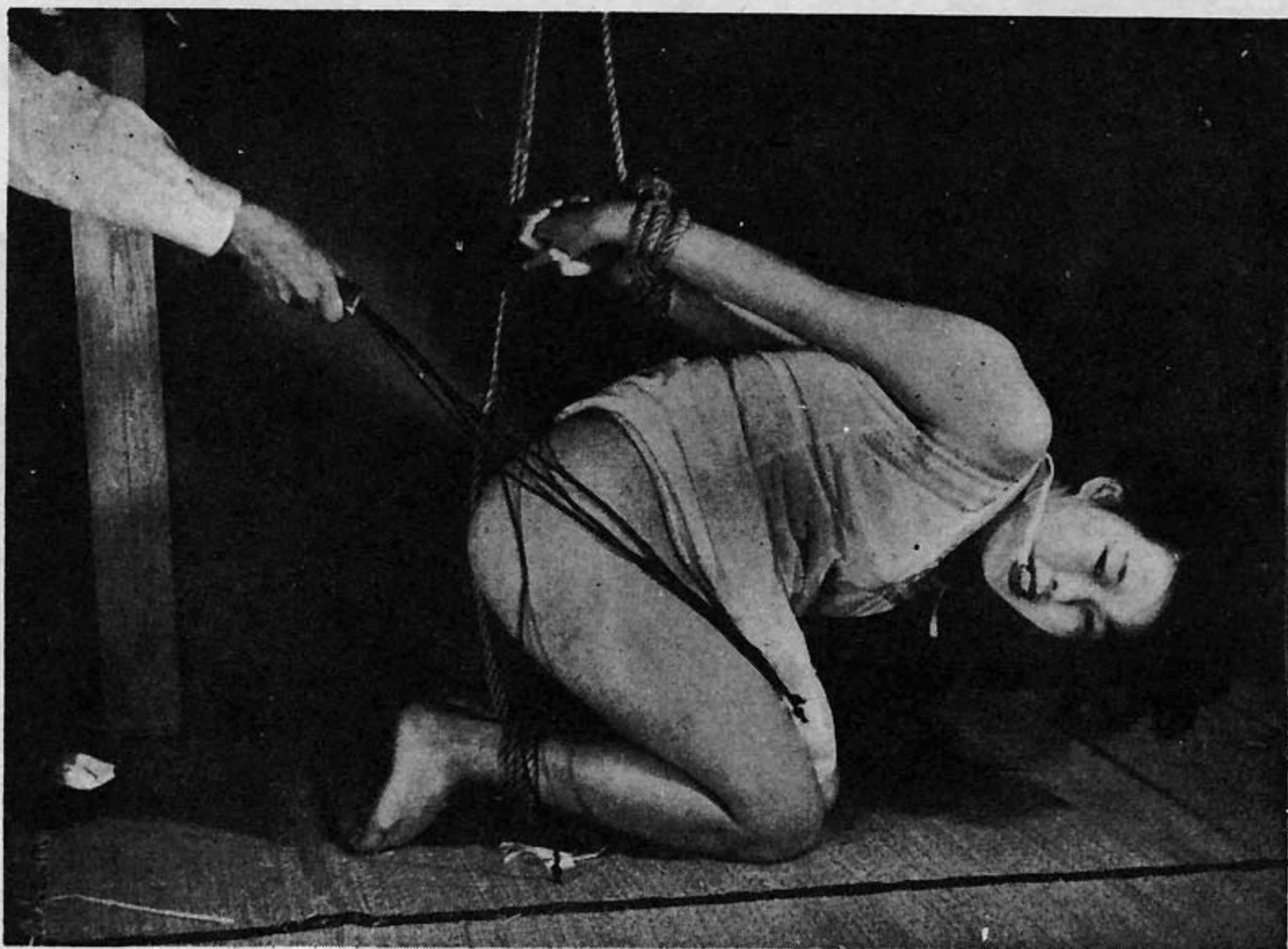


と、その時である。かすかな物音が 「兄貴、お楽しみのところ、すまなか
ドアーの外でした。長谷は思わずハッ ったな」
として耳をすませた。誰も来る筈はな 「なにしに來やがったんだ、お前にや
い、鼠でぐもあるんだろう、と思った 用はねえ、さっさと帰れ」
が、それでも氣になった彼は、ドアー 「ふふ、そうはゆかねえ、兄貴、事切
に手をかけた。が、それより先に彼の 者は俺だよ、とんだ濡れ衣で何も知ら
眼の前に人影が立った。 ねえ人を苦しめちや申訳がねえ、責め
「あッ、誰だ、てめえは？」 るなら、この俺にやって貰いてえ」
薄明りに映った人影は京次だった。 怒りにふるえた長谷の手が、咄嗟に

圖 構 の 辱 凌





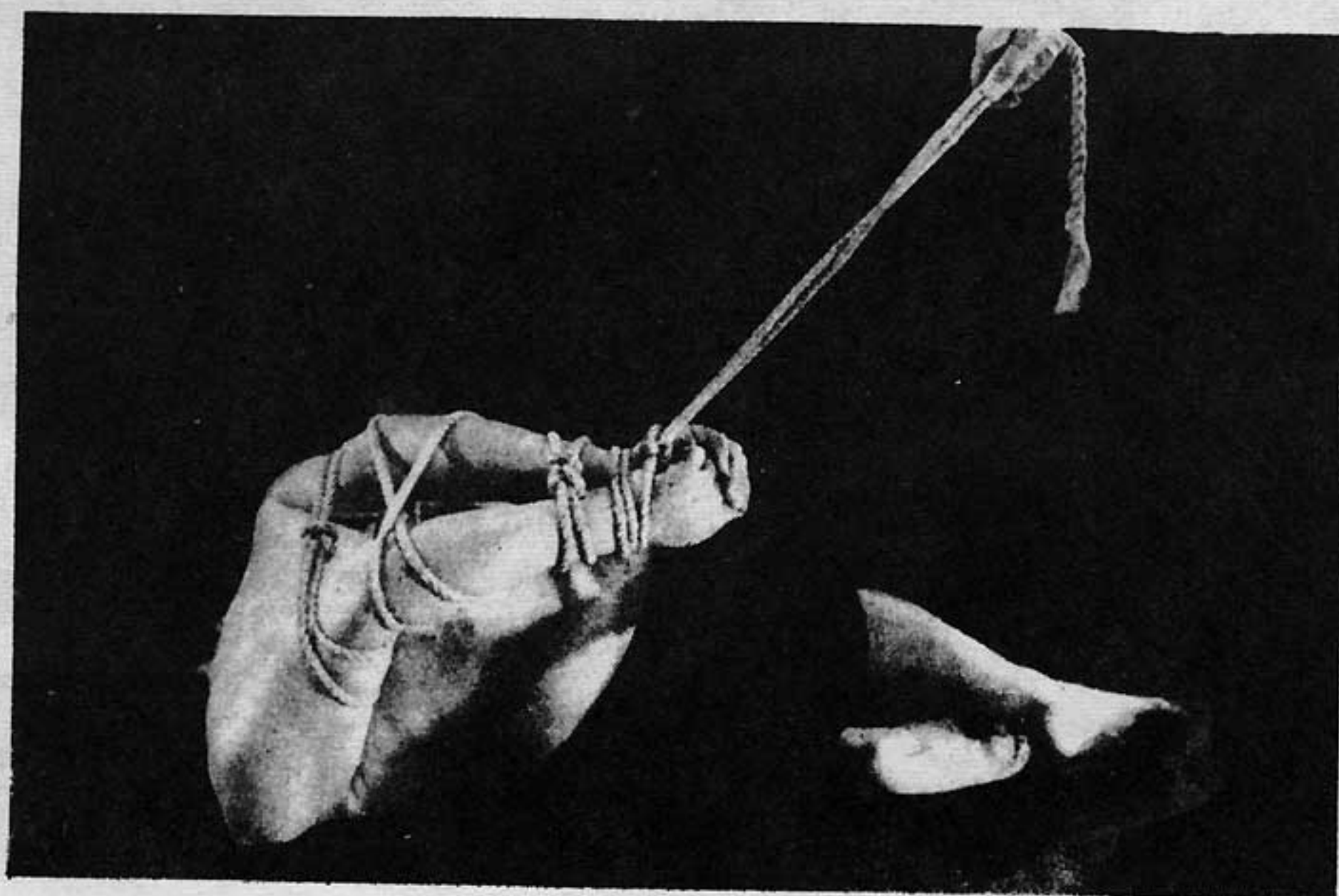
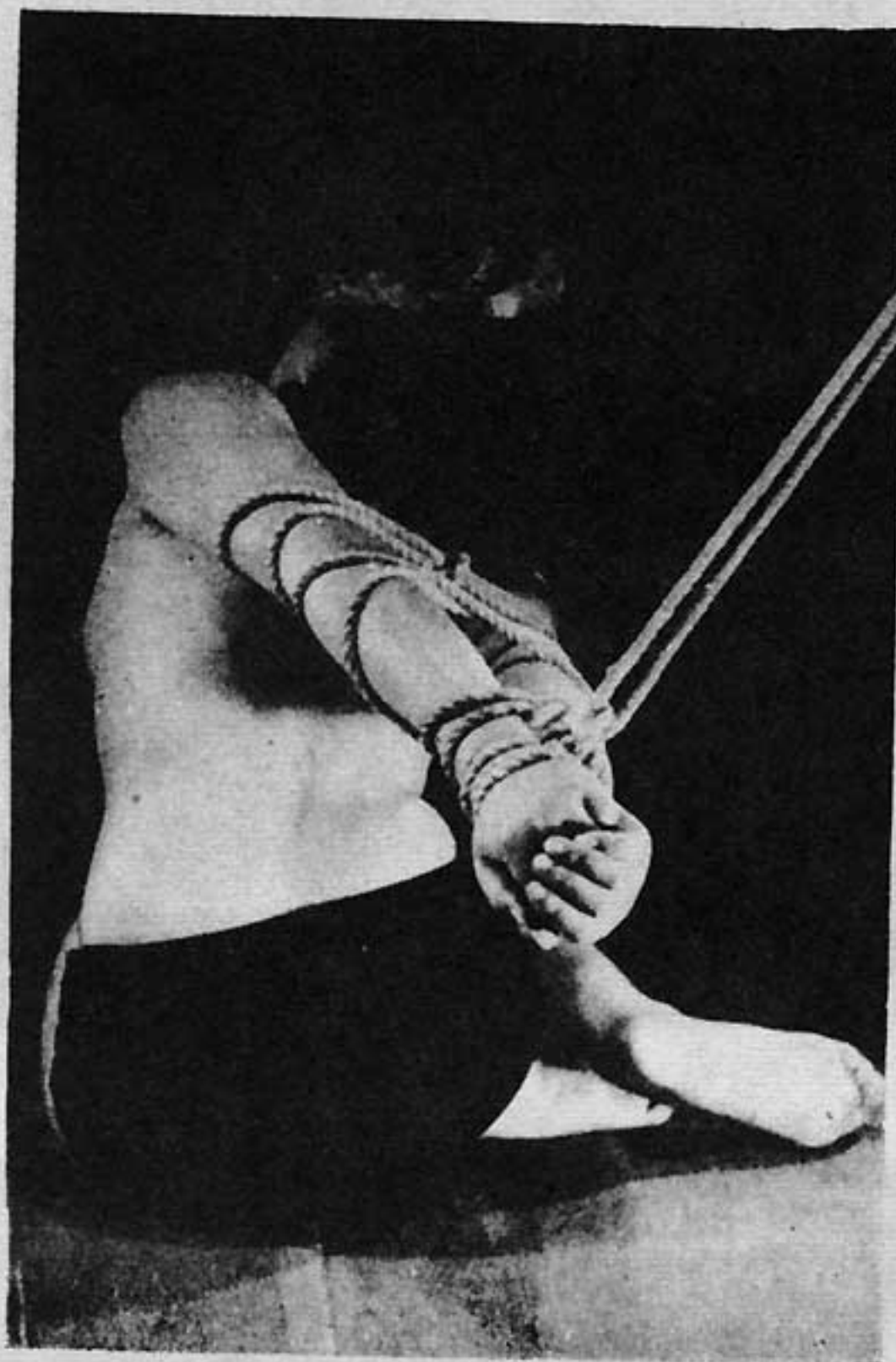


変形後手縛り

アメリカ雑誌のボニイの後手の縛り方からヒントを得て、こんな変った後手を写真にしてみた。

二の腕の縄が手首の方へずってこない工夫をした

ら、案外実用的な面白い縛り方になるのではないか。

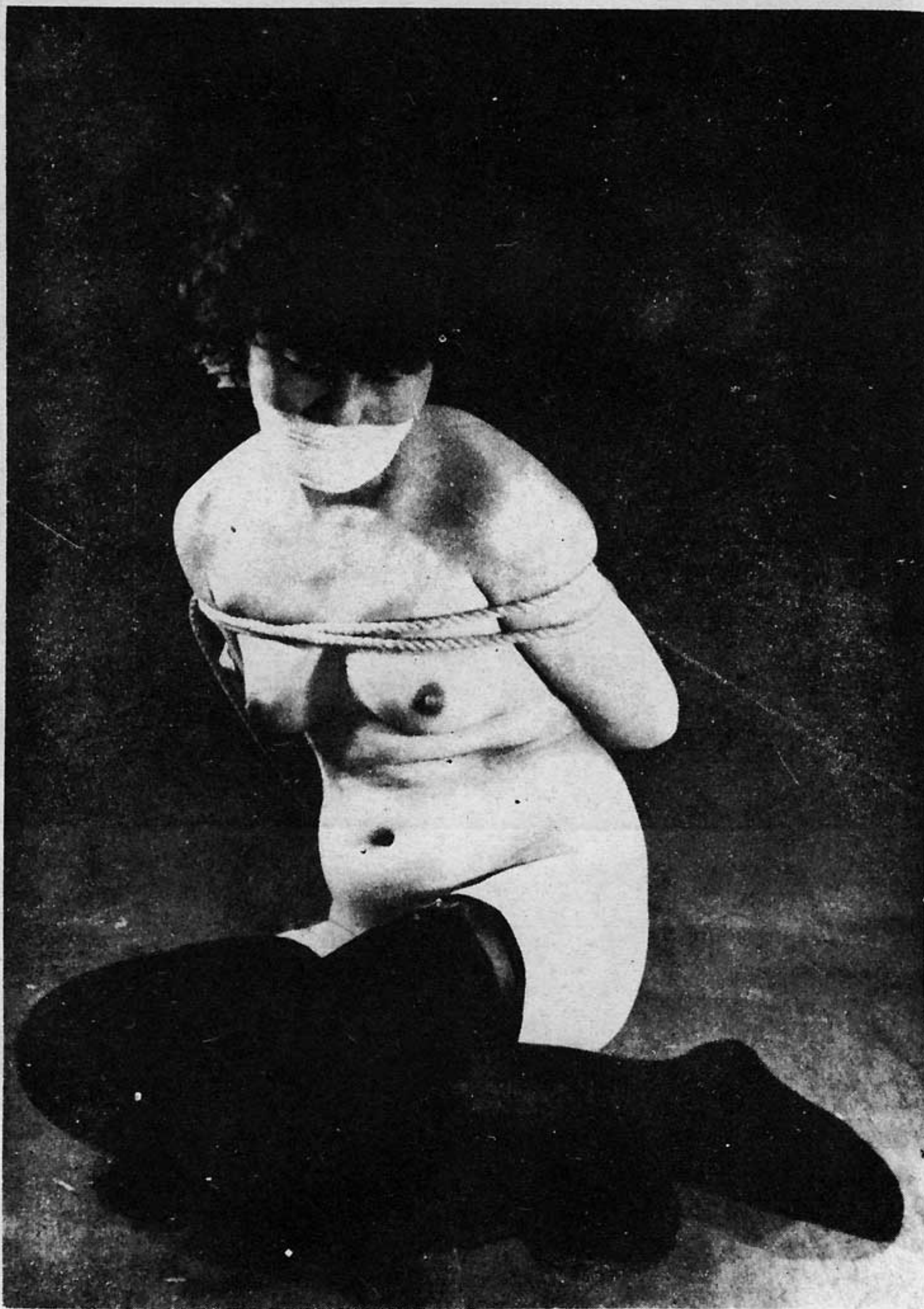




床 柱

ストッキング

(緊縛のなにげないポーズ)



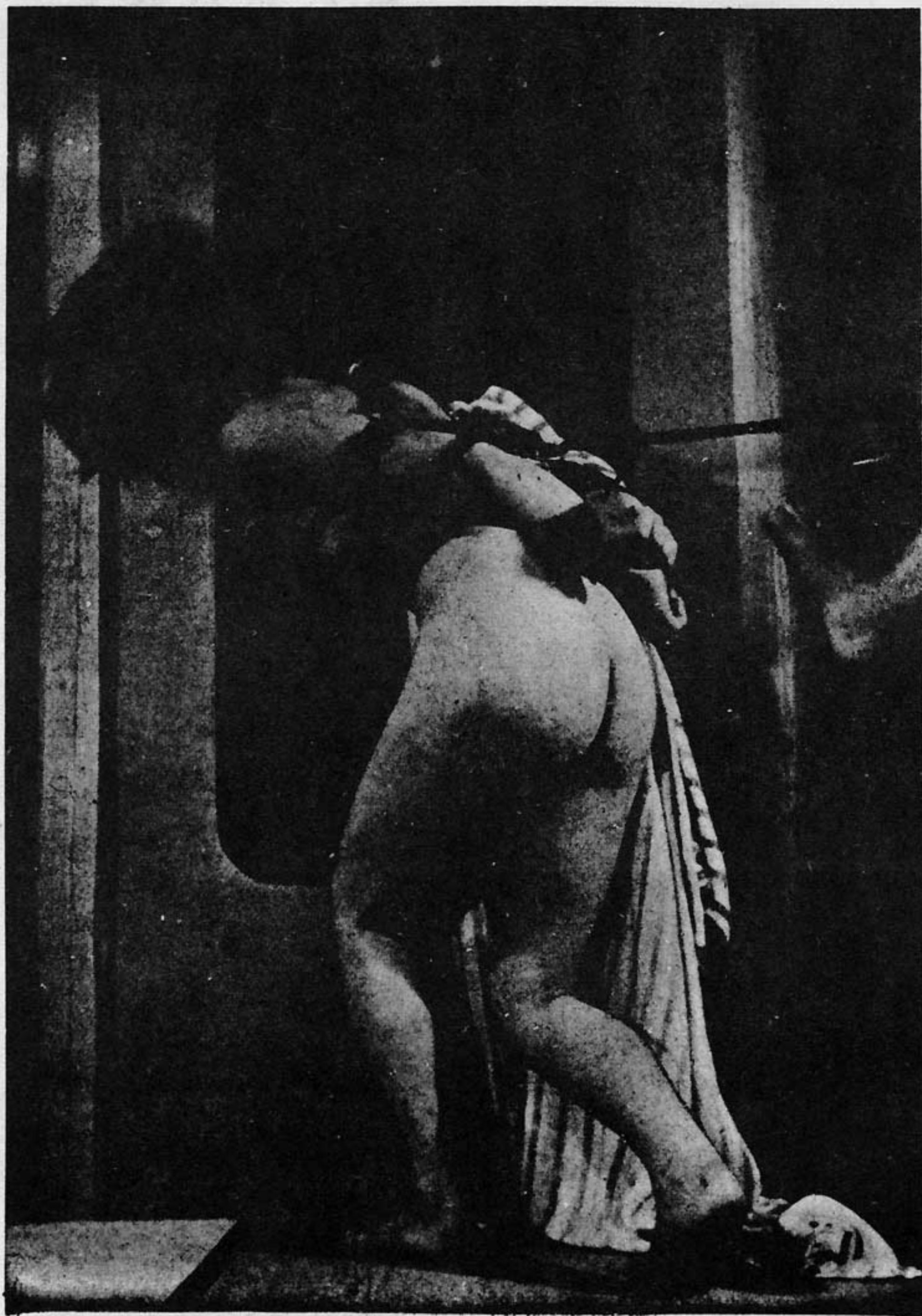


後手首繩胸大字縛り



柱 し ば り

引廻し



野外縛りの記録

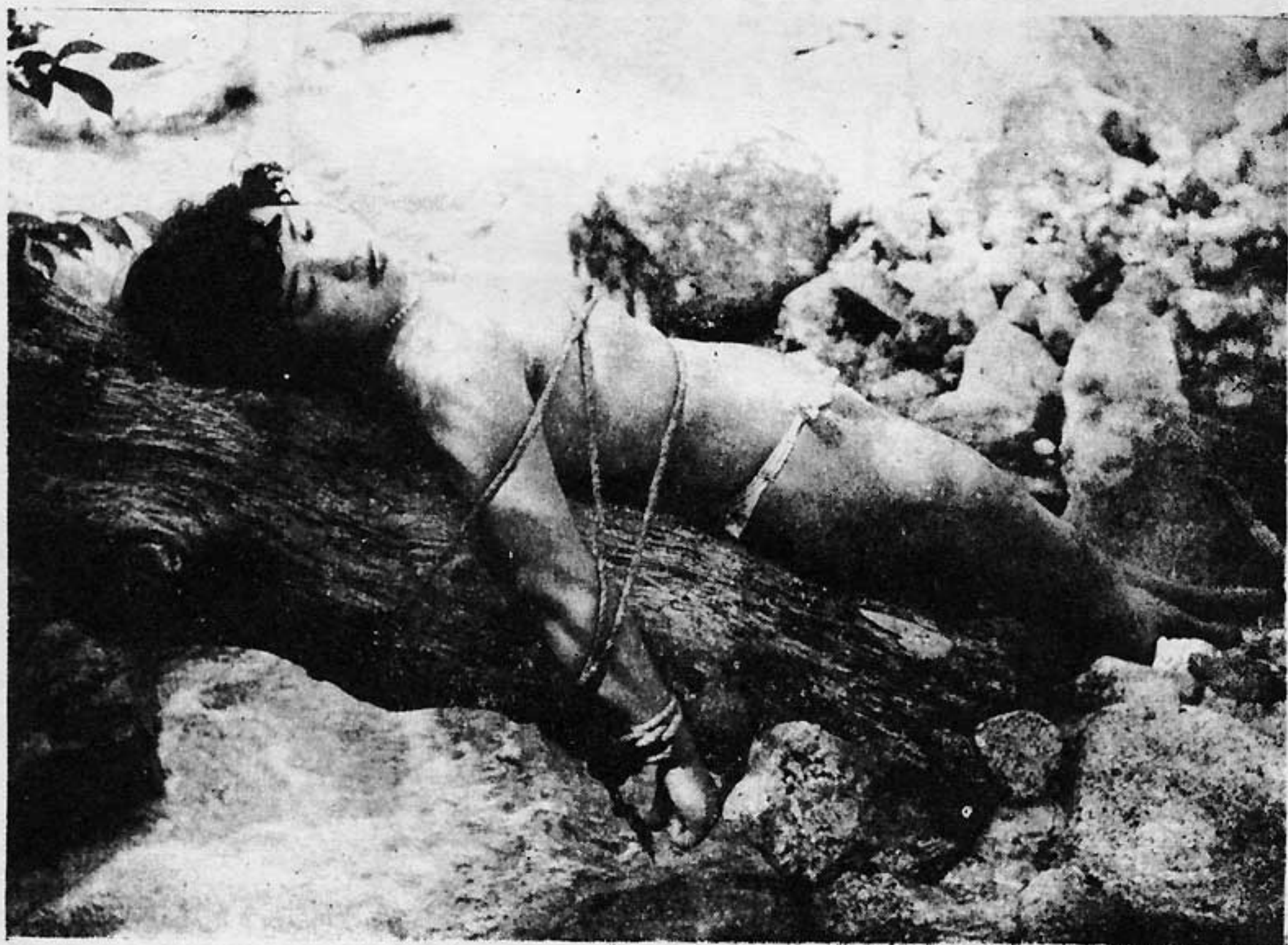
松の幹の晒し



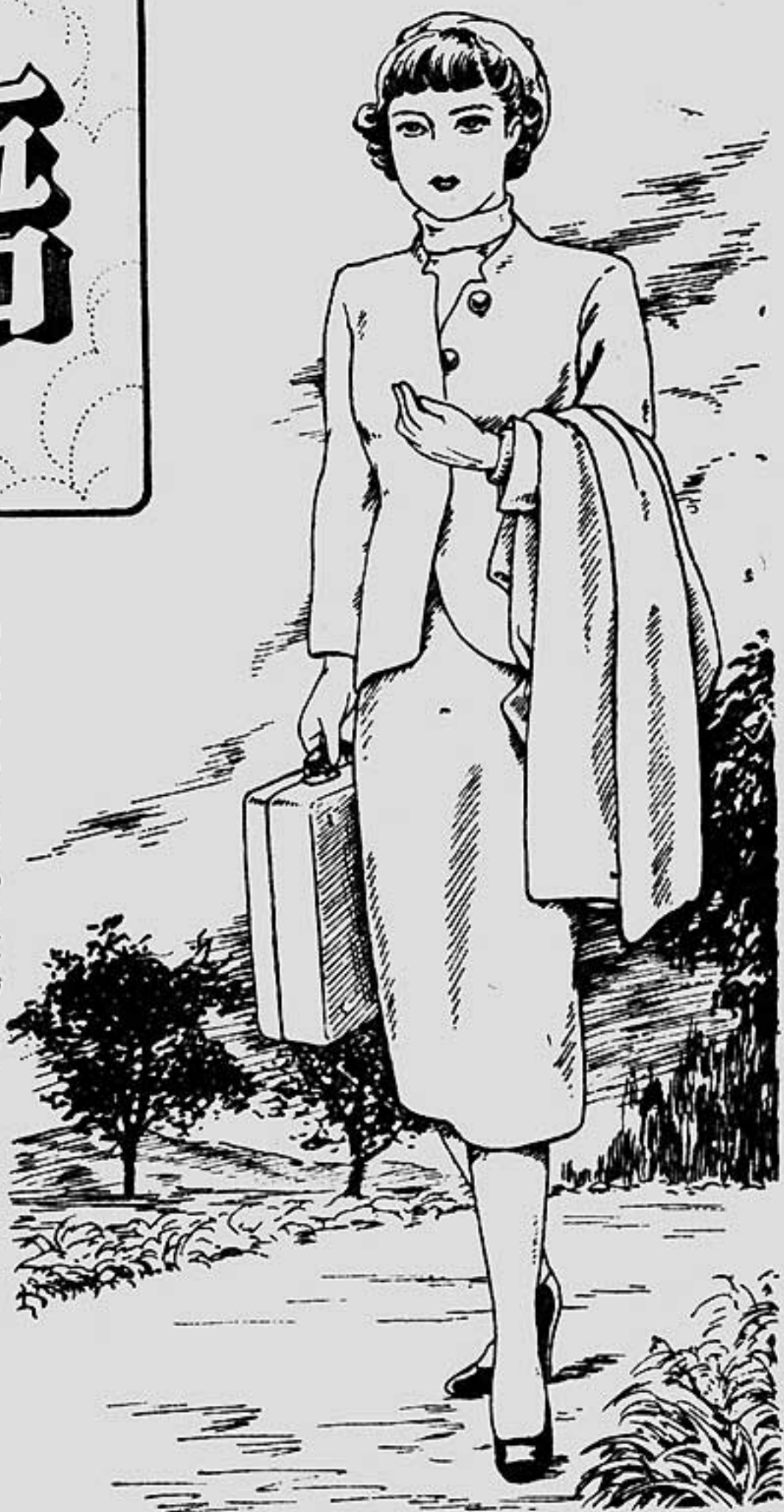
岩を嘯む溪流へ流そうとする



溪流へかけられた木に仰向けに縛る



物語 絵物語 牧場物語



「ああ、あれが私の牧場！」
スーザンは足をとめて、思わずつぶやいた。その声には、テキサスの人里はなれた田舎まではるばる旅をつづけてきた疲れがこもっていた。
ニューヨークをたつとき、恋人の弁護士ゲイリーが一人旅を心配してひきとめたのもかまわず、自分の眼で父の遺産をたしかめたい一心でやってきたのだ。
その小さな牧場には、支配人グレゴリー夫妻と娘のナインシイが、ジョージという腹心の青年をたった一人使っているだけで、勝手気儘に経営を切りまわしていた。だから美しい所有者が突然あらわれて、父の遺言状をみせるとも女ではやってゆけないから売らうと云われたときには、すっかりおどろいてしまった。
「どうするの、あなた！」
「なあに、相手は女一人で、しかも孤児だよ。こうなれ



ば俺たちで乗っ取ってしまおうさ。まあ俺に任せておけよ。」腹黒い支配人は薄気味のわるい笑いを浮べた。



翌日、支配人はスーザンに申しこんだ。

「どうせ売るなら、私が買おうじやありませんか、あんたもそのほうがいゝだろう。」

「ええ、いくらで？」

「千弗。」

スーザンは笑いだしてしまった。

「冗談をおっしゃってるのね。いくらちいさな牧場でも、五千弗以下では手離せないわよ。」

「いや、あんたは手離すよ。」とグレゴリイはすまして云った。「いくら反対したって承知させる手段はあるんだ、諦めなほうがいゝぜ、こゝは町からはなれた別天地なんだから。」
ついに、狼は本性をあらわした。



そのまゝスーザンは一室に檻禁され、鍵をかけられ、食事も与えられなかった。

ロマンチックな夢は破れた、美しい牧場は悪党の巢だった。スーザンは今更のように一人旅を後悔したが、あとの祭だった。

窓越しに、となりの部屋の食卓がみえる。喉がわいて、思わず視線がむくと、みんなはこれみよがしに肉を頬張りながら嘲笑するのだ、なんとこの残酷な拷問だろう、彼女は眼を閉じ、口唇をかねて耐えようとした。

だが、どんなに頑張っても精神は肉体に勝てない。二日めの夕方、とうとう耐えかねて屈服してしまった。

「千弗で売るから、早く食べさせて！」
契約書にサインしたスーザンは、一刻も早く



金を受けとってニューヨークにかえるつもりだった。ところが、グレゴリイは金を払わない。

「代金はあんたの滞在費でさしひいたげるよ。」

「まあ、私は滞在なんかしないことよ。」

「そうはいかない、代金を全部さしひくまで、帰すわけにはいかないのだ。さあ、まずいまの食事代二弗の受取りをかいでもらおう、物事は合法的にしておかないと、あとがうるさいからな。」

その悪賢い抜目のない考えに、スーザンはぞっとするとともに、無性に腹を立てた。

「いやよ、だれが書くもんですか。」
怒りに燃えて拒絶した。



「しようなないお嬢さんだな。」とグレゴリイは落ちついて云った。「じゃあひとつ、痛い目にあわせてやろう。」

「おゝ、なにをするのよ。」

「これから当分一緒にくらすんだから、まず手はじめに教育してやるのさ、なんでも絶対に服従するようにね。」

云うが否や、グレゴリイはスーザンの腰を抱きかゝえ、悲鳴をあげてもがくのもかまわず、物置小舎に引き立てゝいった。そして太い柱に両手両足をしばりつけると、スカートをまくりあげて落ちないように別の麻縄で縛った、それだけでスーザンは気も狂わんばかりだった、生れてはじめてこんな暴力に会う恐怖にもましてあられもない姿を男の眼に曝すのが死ぬより辛

い思いだった。

ゆたかな臀部に最初の鞭が当たると、「ゆるして、書くからゆるして！」とスーザンはたちまちさげんだ。が、グレゴリイは聞えぬふりをして鞭をふるいつづけた、準備に手間をかけた以上、折檻をゆっくり楽しむ権利があるということをしる思い知らせるために。

「書くから、あゝッ、ゆるしてください！」

「まだ、お前のパンツは破けやしないよ。」思う存分に差かしめてやっとな縄を解いたときには、主人と召使の立場は逆転していた。スーザンはふたゝびもとの部屋に追いやられ、そこで命令されるまゝに受取をかいいた。

食べのこしの食事をあてがわれて二弗！、しかも日に六弗として、千弗に達するには半年以

上もかゝる。

「どうだい、千弗で売ってよかったろう、さもないとお前は何年もこゝに釘付けだよ。」

「もうお金は要らないから帰してください。おねがいですから。」

恥も外聞もなく床にひざまずいて哀願したがグレゴリイはゆるさなかった。

「法律を無視した取引はしたくないからね、払うものをチャーンと払ってもらい、棒引になったらかえしてやろう。」

合法的なこのカラクリのおかげで、無一物になる自由さえあたえられないのだ。





涙の目がつぶいた。
ある日、ジョージがそ
とさゝやいた。
「どこかへ手紙を出し
たければ書けよ、町へ
出たときにほりこんで
やるから。」

「え、本当に？」

ふるえる声でスーザ
ンは、いとしいゲイリ
イに走り書きした。

「私はこゝに囚われ
ています、一日もはやく救い出してください。
その手紙をポケットに収めると、彼はいきな
りスーザンを抱きよせて接吻した。それから、
その場に押し倒そうとした、彼女はおどろきの
あまり声も出ず、ただ死物狂いで抵抗した。
「ふん、大それた仕事をたのみやがって、俺の
自由になるのは厭だ、っていうのか。よし、どう
するか見ている。」

獣のような怒りで眼を輝かせたジョージは、
いきなり戸外に走り出ると、通りかゝったグレ
ゴリイにその手紙をつきつけた。
「支配人さん、あいつ、こんな手紙をかいで、
僕にこっそり出してくれて云うんですよ。」

「なんだと！ おいスーザン、ちよっとこい。」

恐怖で死んだようになつたスーザンは、皆の
まえで散々に頬を叩かれた。

「お客様扱いにすればいい氣になつて、とん
だことをたくらみやがる、もう容謝しないから
な。ナンシイ、こいつの服を剥ぎとって作業服

をきせてやれ、そして明日からこき使うんだ。」
「えゝいゝわ。さあお前、こつちへおいで。」
ナンシイは手荒くスーザンをひき立て、笑い
ながら云つた。「ジョージはあたしの彼氏なん
だからね、へんな色仕掛に出るのは御免だよ。
……さっさと脱ぐんだ！」

スーザンは力づくで裸にされ、男の労働者の
着るようなよごれたシャツとズパンをあてがわ
れた。こうして、名実ともにドレイの生活につ
きおとされたのである。





翌日からはげしい労働がはじまった、朝は暗いうちから起きて、水汲み、炊事、床みがきの雑用に追い廻され、それがすむと牧場に追いやられる。主人は一人ではなく、すべてが勝手な用事をいっつけ、すこしでも気に入らないと鞭がとんだ、いちばん辛いのはジョージとナンシイ

の命令だった、手紙の件でこんなみじめな境遇に陥しいれたジョージは、ズボンを穿くようになつてから一層好色の眼つきで腿や腰のあたりをジロジロ眺め、次から次と戸外の用事を云いつけては、人気のないところで抱きしめようとする、それに抗えばまたどんな復讐をされるかとおそろしく、針で刺されるような思いで三度に一度は抱擁や接吻をされるのだった。

ところがナンシイはそういう気配を知ると、やりばのない嫉妬を無力なスーザンの上に爆発させた、彼女はスーザンに小川まで馬を曳かせて、よしと云うまで馬の脚を洗うように命じながら、うしろに立って尻を蹴ったり、鞭で叩いたりした。

「お前のいやらしい気持を洗い落すように、しつかりと洗うんだよ、私も手伝って悪魔をたゞき出してやるからね。」

もはや脱走以外に、この地獄の生活から逃れるすべはなかった。牧場から町まで六マイルだが、そこには警察もあるはずだ。おゝ神よ、守らせたまえ！、

チャンスは朝しかなかった、彼女は水汲みに出るふりをして裏手にまわると、そっとそこをぬけた。それから後も見ずに、夢中で走った。

だが、ものゝ五分とたゞぬうちに馬の蹄が聞えてき

た、いつものように網を張っていたジョージが発見したのだ、それに気づくとスーザンの全身が総毛立った、彼女は追跡をくらますために林にかけこんだ。そして、大きな樹の洞穴をみつけてもぐりこみ、息をひそめた。

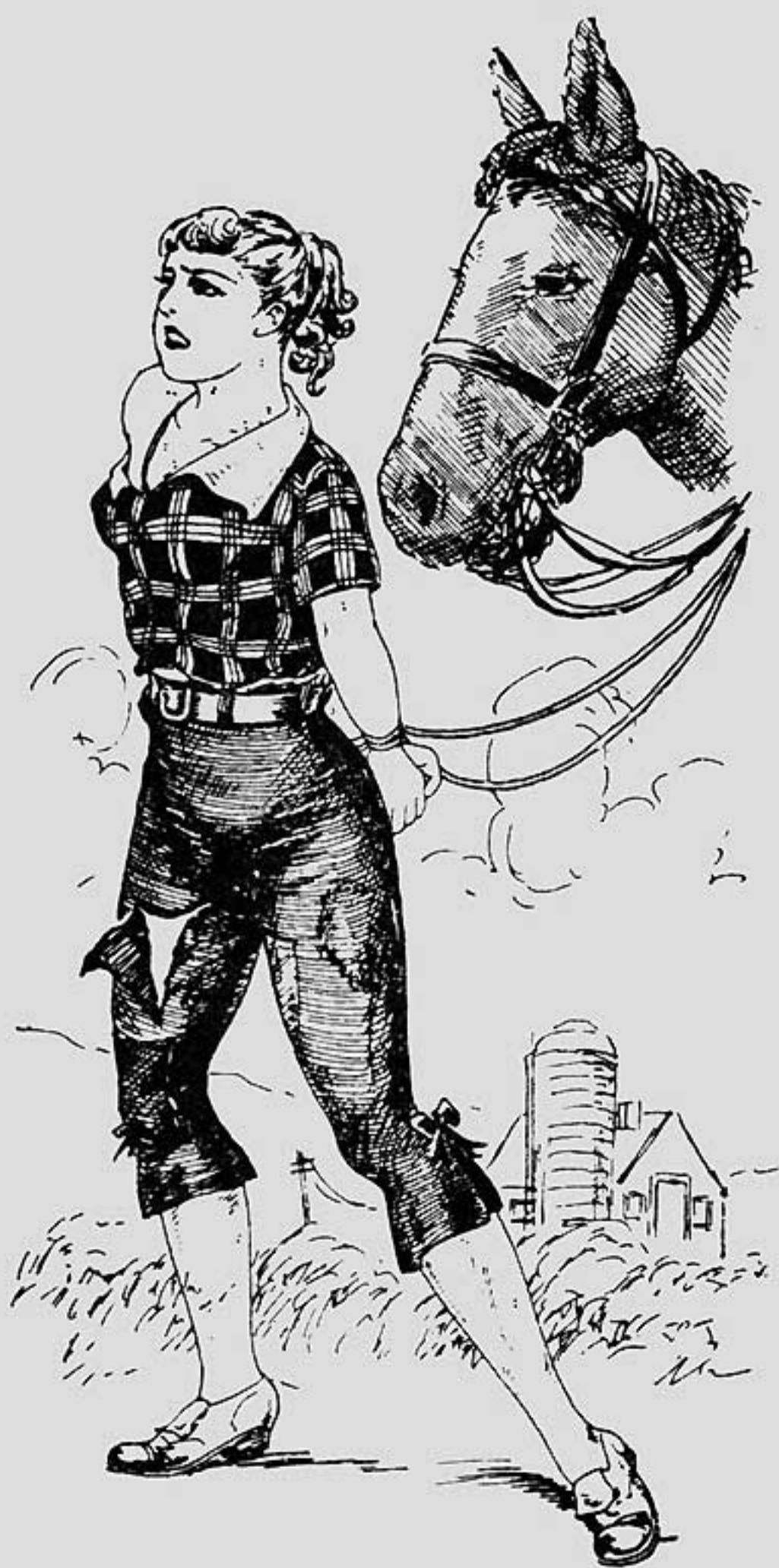
ところがそこはおそろしい蟻の巣だった。たちまち肩から首に。胸に、無数の蟻が這いこんでくる。思わず悲鳴をあげてころがり出たところを、かけつけたジョージに捕えられた。

「あッ、蟻が……、くるしい！」

「まったく、これじゃあ抱きしめることもできやしねえ。残念だな。」

勝手なことを云いながら、ジョージは苦しみもがくのもかまわず、馬乗りになつてスーザンをうしろ手にしぱりあげた。





スーザンは馬につながれ、もときた道を歩かされた。脱走が失敗したことや、これからの懲罰を考えると身も世もない思いがしたが、それにもまして現在辛いのは、からだ中を這いまわっている蟻を払い落せないことだった。

「御生だから……逃げないから……この手をほめて！」

「ダメだよ。うちへ帰ったらすっ裸にして洗ってもらうんだな、それまでは俺の代りに、ちっとはアリにも染しませてやるさ。」

絶えずもがく姿を眺めながら、ジョージはわざとゆっくり、駒をすゝめた。

牧場では、激怒した人たちの折檻が待っていた。支配人は一部始終をきくと、こう云った。

「今日は一日じゆう食事ぬきで、三弗づゝ払わ

せてやる。ナンシイ、お前はこいつを裸にして水をかけてやれ、だがそのまえにすこし鞭を喰わせて思い知らせなくちゃならん。」

スーザンは馬の鞍につな

がれたまゝで、気が遠くなるほど鞭打を受けた、それからやっと身体を洗うことができたが、ナンシイは意地わるくせきたてた。

「服にもまだアリが……。」

「だまってさっさと着るんだよ、私を待たせるつもりかい？」



ふたゝび両手を縛られたスーザンは、食事もあたえられず、一室にほりこまれた。

しばらくすると、しんとした部屋に人の近づく気配がする。ふりむくと、ジョージだった。

あつと声を立てようとする口にすばやく猿ぐつわをはめられ、逃げようとする身体は太い腕に抱きすくめられた。

「待っていたよ、スーザン、今日という今日は可愛がってやるからな。」

叫ぼうにも声が出ず、あふれるのは無念の涙ばかりだった。

すると、ドアがあいた。ナンシイだった。



「あ、ナンシイ、じつはその、こいつがね。」
あわてゝ飛びのいたジョージは口ごもった。
ナンシイの眼は異様に光った。
「ふん、御丁寧に猿ぐつわまでして、あんたの
本心はわかるわよ。でもね、この子は私の監督

下にあるんだから、指一本だって
さゝせないことよ。」
こそく出てゆくジョージを見
送った彼女は、こんどはスーザン
の髪をつかんでゆすぶった。
「よくも私の恋人を誘惑してくれ
たね、いったいお前のどこがいゝ
のさ。この顔かい、それともいゝ
穴いながら、頬をつねり、腿を
つねる、泣き声を立てゝスーザン
はのたうちまわった。
「どうしてそうあはれるんだらう
ねえ。」と、スーザンはいっそう
嗜虐に駆り立てられて叫んだ。
「ようし、そう抵抗するんなら私
にも考えがある。お立ち！」
彼女はむりにスーザンを引き立てゝじぶんの
寝室に追いこむと、手足を大の字に開いてベッ
トの脚に縛りつけた、それから思うがままにい
びりはじめた。嫉妬に狂った女の指先は、美し
い競争者の肉体をあますところなくきぐり、復
讐のよろこびに震えるのだった。
「叫べるものなら叫んでごらんよ、どうにもな
らないじゃないか。これからパパにお願いし
て、お前をずっとこの部屋に寝かせるからね、
毎晩可愛がつてやるから覚悟おし。」
あらゆる攻撃に身をさらし、眼もくらむ思い
でスーザンはもがくのだが、声は猿轡に押しつ
ぶされ、手足に紐が食い入るばかりだった、じ
ぶんの所有地の牧場でこのような責苦に会って
いることを、とおいニューヨークの空の下でゲ



イリイが想像だにしているだろうか。あゝ、恋
しいゲイリイ、あたしを助けて！
だが、復讐はあたらしい形でつぎつぎに加え
られた、夜が明けるとスーザンはこのおそろし
い女主人につき添われて林へ薪集めに行かねば
ならなかった。
「お前は逃亡の前科があるからね。」
そう云ってナンシイは彼女の脚の間に紐をつ
け、その一端を樹の幹に縛りつけた、猿廻しの
猿のように、彼女は紐のゆるす範囲で枯枝をひ
ろった。
「そら、もっとからだを伸ばせばとどくじやな
いか。怠けると承知しないよ。」
ハンモックにねをべりながら、ナンシイは無
理な命令をだして、みじめな姿を楽しんだ。

やっと薪を集めおわると、ナンシイはそれを背負わせてから、幹につないだ紐をほどいて左手にもち、右手に革鞭を握った。

前屈みの姿勢になると、たださえ豊かな臀部がズボンにびったりして、鞭打の欲情をそよることをスーザンは感ずるのである。だが紐でつながれているかぎり、それから逃れることはできないのも明らかだった。急ごうとすれば紐を締められ、足をゆるめれば叩かれる。鞭の響き



はしずかな林にこたまして、この異様な行進の単調な伴奏となるのだった。

家に近づくにつれて、スーザンの苦しみはましてくる。というのは、ジョージの好色的な視線や、グレゴリー夫婦の嘲笑を味わねばならぬいからだった。

「なんて恰好だい、まるでポニーだな、どうやら既へつないだほうがよさそうだぜ。」

「轡をはめて、手綱をつけてね。」



「そして、いちばん乗りたいのはジョージらしいわ。」

ナンシイは皮肉たっぷりに云った。

が、ジョージはまだ諦めていなかった、みじめなスーザンの姿を見るにつけ、ますます征服したい欲望にかられてくる。——もうあの女もドレイミみたいなものだ、俺の申し出をことわる勇氣はないだろう。

ナンシイの眼をかすめて、彼はスーザンに云い寄った。

「お前をこんな眼に会わせただけ以上、もう支配人はお前を手離しっこないよ、告訴が恐ろしいからな。どうだ、俺と夫婦になると約束するなら一緒に逃げてやるが。」

「さわらないで！」

じぶんを裏切った憎しみと、こんなところをナンシイに見られたらどんな眼にあうかしれなという恐怖とで、スーザンは身をもがきなが



ただ泣くばかりだった。
地獄のような日が明け暮れた、一カ月が夢魔
のようにながれた。

ある日、ニューヨークの弁護士事務所から、
ゲイリーのスーザンに宛てた手紙が届いた、も
ちろんグレゴリーはそれを開封した。

長い手紙は、その後のスーザンの安否を気づ
かう文句からはじまり、到着の知らせもないこ
とを責め、これ以上あなたの顔を見ずにはいら
れない、万障繰り合せて明日出発し、明後日そ
ちらに着くだろうと結んであった。

グレゴリー夫妻は色を失った。

「そんな男がやってきたら私たちの身の破滅だ
わ、どうしたらいいんでしようねえ。」

「しっ、声が低い。」

スーザンはすっかり汚れきったスポンの膝を
ついて床を磨いていた。幸か不幸か、夫婦の会
話は耳に入らなかった。

「スーザンみたいな孤児に弁護士の恋人がいる

とはしらなかった。

とにかく、会わせる
ことは絶対にできな
い。来たらスーザン
の受取だけみせし追
い返すんだな。」

彼はジョージを呼
んで、明後日は朝か
ら街道筋を見張るよ
うに、もし男の姿を
見かけたらすぐ通知
するように命じた。

その日、スーザン
は朝から部屋にとじ
こめられて、一歩も

出されなかった、やがてジョージが、馬に乗っ
た青年がこの牧場に向ってくるのを知らせた、
一家はたちまち緊張に包まれた。

ナンシイは部屋に入ってくると、いきなりス
ーザンの両手を縛り上げた、それから猿
ぐつわを取り出した。

「ゆるしてください。私、なんにも悪い
ことをしませんでした。」とスーザンは泣
き声を出した。

「たまっておとなしく、口を開かないと、
あとでひどいよ。」と女主人はおどした。

口一杯にハンケチを押しこみ、いつも
よりずっと厳重に猿ぐつわをかけると、
ナンシイは彼女の縄尻をとって裏口から
林にいそがせた、それから厭がるのを打
ったり抓ったりしながら太い樹の枝に跨



がらせ、あらためて手と脚とをしっ
かり幹に縛
りつけた。

なぜこんな目にあうのか、スーザンには分ら
なかった、ナンシイの立ち去るのを見送りなが
ら、彼女はしみじみと自分の運命を悲しんだ。
もがき疲れて涙を流しながら、幾時経たった
う？ 日は西に傾き、あたりは暗くなった、手
首の感覚はほとんどなくなってしまった。

すると、あたりの様子をうかがいながら近づ
いてきた人影は、あのいやらしいジョージだっ
た。

「どうせこのへんだらうと思っていた。かわい
そうに、いい恰好をさせられてるじゃないか。
いま俺が下ろしてやるよ。」

一難去ってまた一難、スーザンは身にせまる
危険をかんで固くなった。



性こりもなく蛇のように自分の肉体をねらっているこの男が今まで目的を果さなかったのは嫉妬ぶかいナンシイの眼が光っているからなの

「ようし、じゃあ、また猿ぐつわだ。」
こうした悲劇が行われているとは夢にも知らず、スーザンが牧場を売ってとっくに立ち去っ

だ。いまは人影一つ見えぬ林の中で、四肢の自由を奪われ、声すら立てられない。絶対絶命だった。スーザンの血は凍る思いだった。

だがそんなことにはおかまいなく、ジョージは手足を解いて抱きおろす力ずくでシャツを奪いとった。逃げようとするスーザンの白い両手はねじ上げられ、またも呪わしい紐が手首に、露わな胸にまといつくのだ。

「おっと、この前の二の舞をやる気でもそうはさせないよ。待ちに待ったるチャンスだ。いくら暴れたってダメだから観念するがいい。」

バンドに手がかより、竹の皮をむくようにびっちりしたズボンが剥がされてゆく。必死で争った地面にこぼれ落ちていた。だが両腕は空しく虚空を蹴り、みるみる夕闇に白い裸身が浮びあがった。

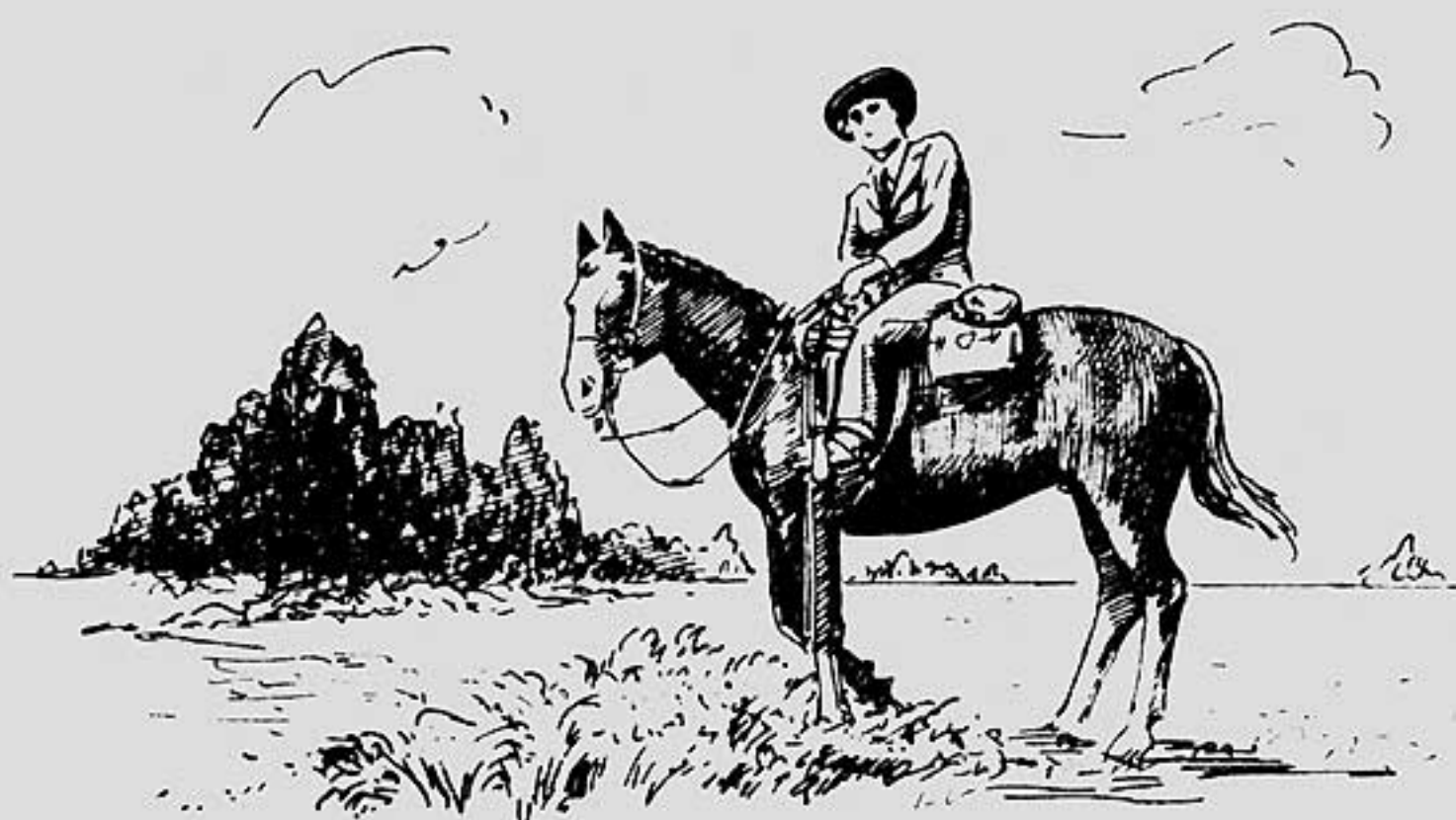
ジョージはゆっくり草の上に腰をおろすと、哀れな犠牲者を引きよせ、膝に抱き上げた。

「声を立てたって家まで届きやしないから、猿ぐつわだけは外してやろう。ただし、おとなしくキッスさせないとまたかませるぜ。いいか。」

「あッ、あッ、あッ、ゆるして！」

たと言いつけるグレコリイの言葉に疑いを抱きながら、ひとまず町に戻って考えようと決心した青年弁護士ケイリイは、はるかな林を眺めながら駒を進めていた。

声も立てられず弄ばれる恐ろしさに耐えかねて、スーザンはいくたびも口唇を奪われた。だ





が、度重なるにつれ、男の息が荒くなってくる
と、彼女はふたたび抑えがたい恐怖におそわれ
た。

「もう、もうやめて、御生だから……。」
「ゆっくりやるのは厭だとおっしゃるのかい。
早く可愛がってくれと言うんだな。」

「ジョージ、ほかのことはなんでも言うことを
きくから、あッ!。」

「どうせ人身御供に上った身体じゃないか。あ
まり騒ぐと痛い眼を見せるぜ。」

容謝なく肌をまさぐる手を避けようにも、し
っかと抱えこまれた縛しめの身はただ浪打つば
かり。それがまたジョージの血を掻き立てるの
であらう。膝からひきずりおろすと、あおむけ
に押し倒した。

「どうせわかることだから、な
ぜこんな林の中につながれたか
説明してやろうか。今日ニュー
ヨークからお前に会いたいとい
う男が来たんだよ。」

「えッ。」

「支配人はお前がいらないこと
にして追い帰したんだ。こうなれ
ばますます危いから、お前を手
ばなす気づかいはないよ。どの
みちお前は逃れっこないのさ。
だからもうくだらない夢はあき
らめて、俺と一緒になっちゃど
うだ。いやだと言ったってこの

とおり、どうせ
力づくで手ごめ

にあうのだからな。」

スーザンの眼のさきは暗く
なり、心臓がとまった。ただ
ひとつの希望の星が消えたの
だ。その空間に獣のような顔
がひろがり、近づくのを眺め
ながら、彼女は眼を閉じた。
あたしはこの男に汚され、や
はり暗黒の空に消えるのであ
らう。

「わかったわ。」と、冷たい
声でつぶやいた。「なにもか
もあきらめて、あなたの言う
なりにあります。……でも、
縛られたままではいや。縄を



「どうとう観念したね。だが、もし逃げような
どとしたら、それこそ思い知らせるよ。」
「どこへ逃げるの? もう頼るのはあなたしか
ないわ。」

ジョージは縄をいいて、すかさず腰に手をま
わした。スーザンは素直にもたれかかった。そ
して片手で相手の腰をさぐり、そっとピストル
を抜き取ると、矢庭に引金を引いた。

弾は外れて、ジョージはおどろかかった。
「だましたな、畜生! さあこうなったら縛り
上げて猿ぐつわをかませた上、死ぬほどなくさ
んでやるから覚悟しろ。」

この男を殺して逃げるしか純潔を護る道がな



い。いまはスーザンも必死だった。だが女の非力の悲しさに、たのむピストルはもぎとられ、草の上にねじ伏せられた。

「殺して、いっそのこと殺して！」

「ふざけるな。殺す位ならこんな手間をかけるものか。うんとおもちやにしてやるからそう思え。」

「あゝ、だれか来て！」

「そんなセリフも言えなくしてやるからな。」

「たちまち両手を縛り上げられ、またしても悲鳴をふさぐ猿轡。スーザンは絶望の呻き声をあ

げた。するとジョージは落ちていた枝を拾って背といわず尻といわず、ピシピシと打ちたたいた。欲情と怒りは一つとなって、身動きできない犠牲者の上に雨とふりそそいだ。

と、林を縫って馬蹄の響きがちかづいた。ジョージが顔色を変えて立ち上ったのと、馬上の男が姿を現わしたのと同時だった。

男は馬からとびおりると、走りよってその場の光景をみた。

「スーザン！」

息も絶え絶えのスーザンの眼から泉のような涙が噴きだした。言葉にならぬ絶叫が猿ぐつわの下からはとばしった。

ジョージがピストルを拾おうとした瞬間、青年のからだに襲いかかった。腕力を誇る牧童もこの青年の鉄のような拳の前には敵でなかった。乱打につぐ乱打をうけて顔面血まみれとなりついに昏倒してしまった。

青年はおののく手でスーザンの縄をとき、猿ぐつわをはずした。それから、ひしと抱きあった。

「おおゲイリイ、ゲイリイ！」

「なぜ僕の言うことをきかなかったんだ？」

「すまないわ。あたしがバカだったのよ。」

「もしピストルの音を聞きつけなかったら、いまごろは……」



「おお、それからさきを言わないで、ゲイリイ……。あたしをゆるして！」

翌日、テキサスの寒村の駅を出る列車は、異様なコントラストをしめす二組の乗客で人々の注目をひいた。一組は、手錠をはめられ、色青ざめて警官に護送される四人の男女だった。いまひとつは新婚と思われる逞ましい青年と一際美しい娘とであった。二人はほとんど口をきかず、熱情的な眼で眺めあい、ひとのみる眼も憚らず抱きあって、幸福な接吻に酔っていたのであった。

Sak
June 5, 1954

後手縛りの二態

後手首縄





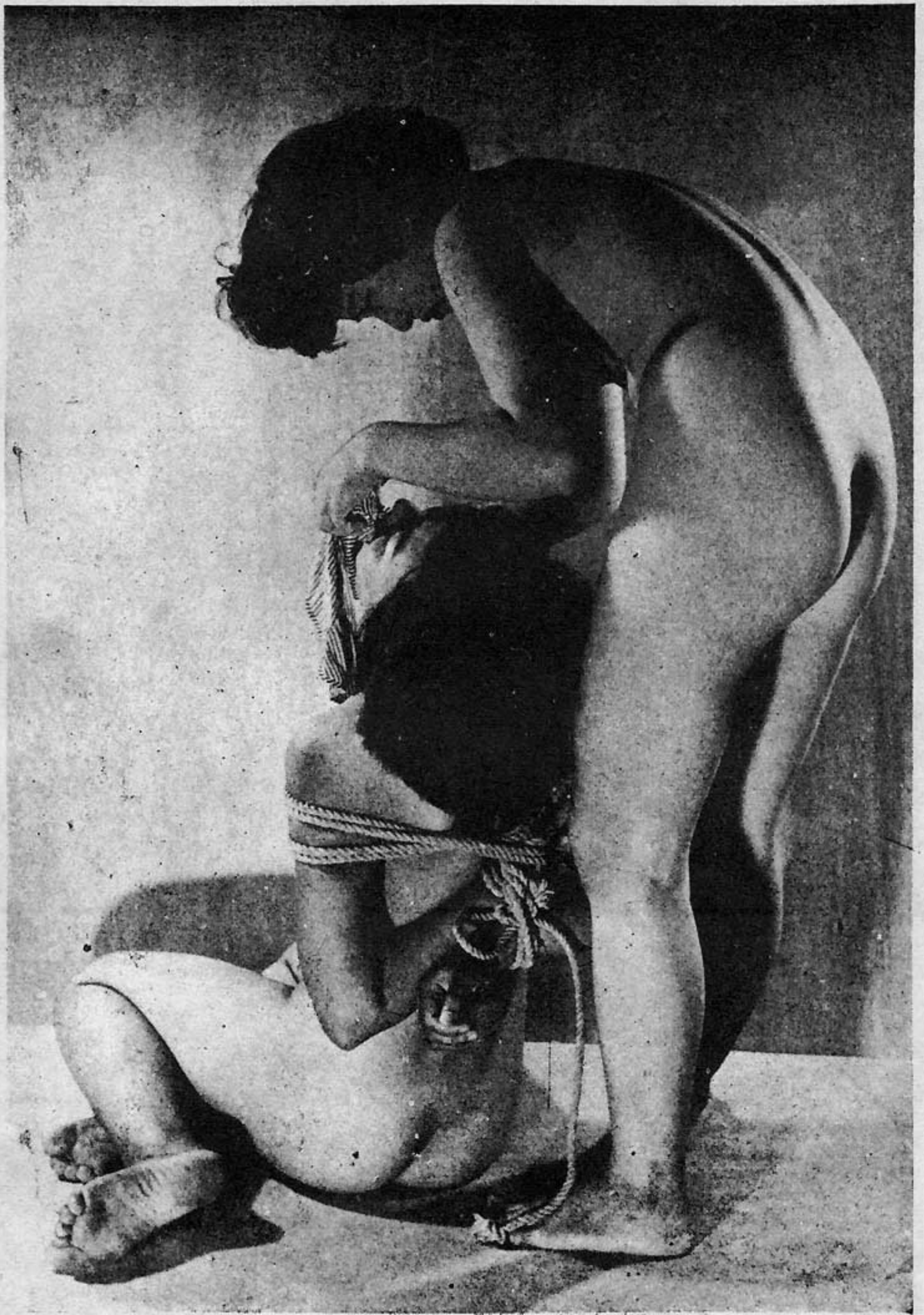
後手首縄足首縛り

地下室

周囲を見廻した多美子は、そこが地下室のような窓一つない部屋で物置小屋の様な所であることに気がついた。「何処だろう此所は？」改めて多美子は両手を後手に縛られ口をふたされている自分の姿を見廻した。その時、地下室の天井がぼつかりと口を開けてサビのある男の音がこもるように聞えてきた。







つぶし島田





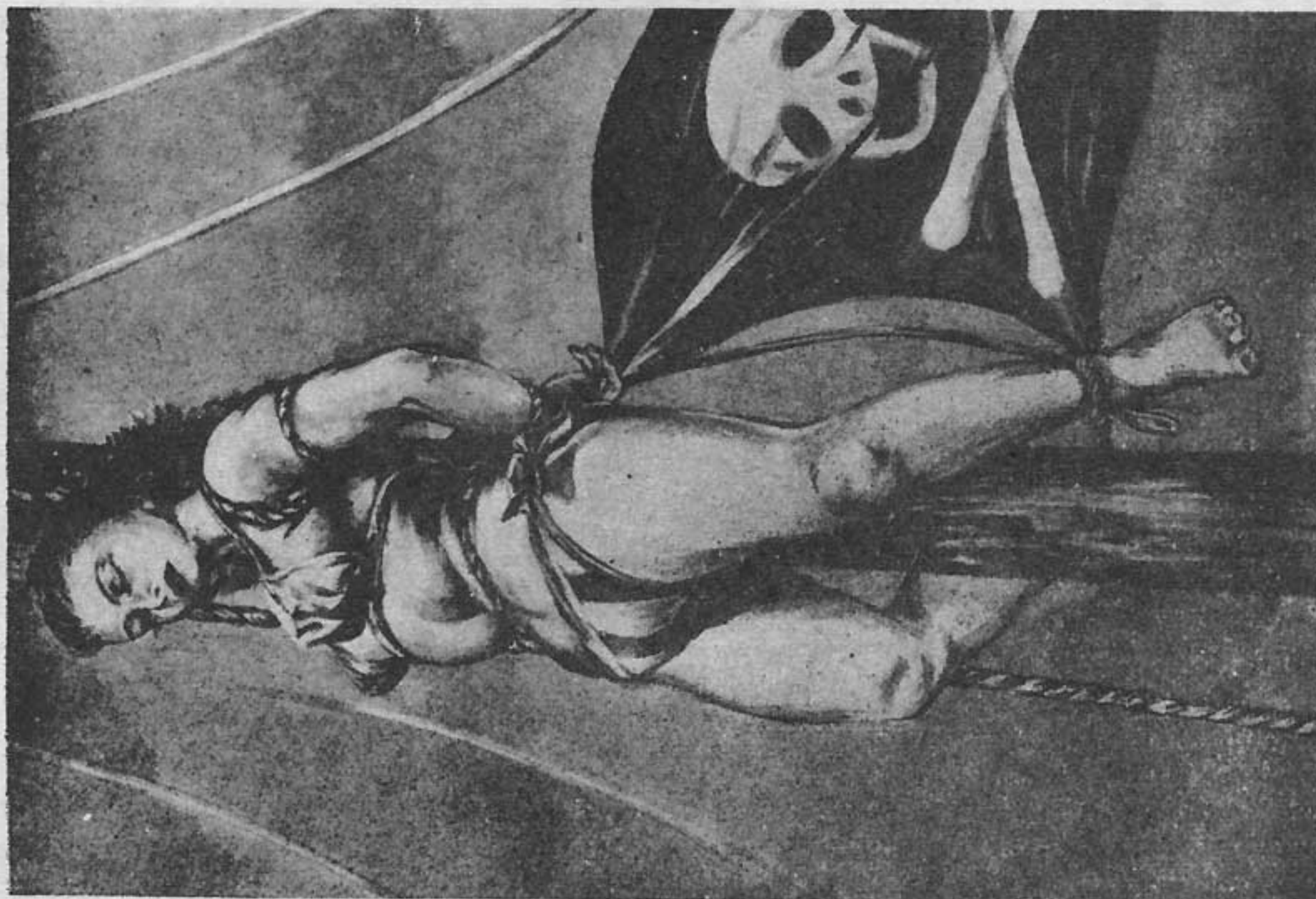


奈津子の振られた役は恐
るべき秘密映画のヒロインだ
った。次々と展開されるサチズム
のシーン。吊られ、打たれ、擦られ
地獄の時間はいつ果てるともなく続けら
れてゆく。









罽褸の旗

南海に姿を現した海賊船——その帆柱に吊り下げた裸身の美女の手と足に結ばれた黒い罽褸の旗、次の獲物を狙って船は荒波を蹴って進む——

美しき囚

太いロープで後手に、両足には鎖でつないだ金属性の足枷をはめられた姿で、彼女は暗い倉庫の一室の柱につながれていた。……何時間経ったのか……物音一つたない倉庫の扉がギイッと静かに開いた。それは彼女を救うために単身乗込んだボウエルだったが、彼女は彼を狙っている男の影にガクゼンとして息を呑んだ。





